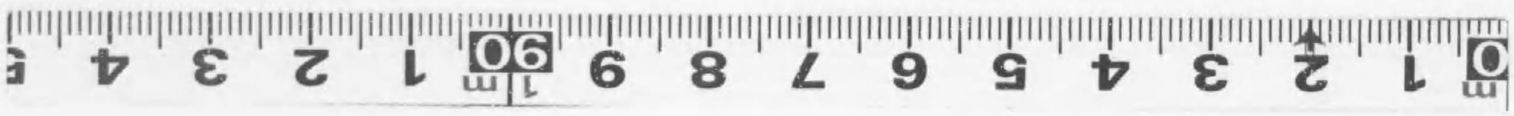
501
30



清見陸郎戲曲集

掾後豐路古宮

1921

80/-30

清見陸郎戲曲集

掾後豐路古宮

大正
10 4.23
内交

1921

亡友中村又五郎君の靈に捧ぐ

序

これは私が世間に發表する最初の創作集だ。

顧れば、私が志を文藝に立てゝ、その頃新進作家の一人であつた某氏を始めて訪問した時以來、既に十四年の星霜が閲された。人間の一生から見ても相應の期間を占めるこの間に、私は一個の文人として文壇に足跡を殘す何等の仕事をなさなかつたのみか、或時は全然文筆を捨てゝ、他の藝術の技巧の修得に貴重な幾年を徒費した事さへもあつた。或偶然の機會が私を劇作家として根岸興行部に關係させるやうにした。併し所謂邪劇の製造に近い自分の仕事に、私は容易に興味を感ずる事が出來なかつた。私が本當に劇作家としての意義を痛感し、一生をこの道で立てようと決心するに至つたのは、私の「宮古路豐後掾」が故中村又五郎君に依つて演出された時以來だ。

又五郎君の技藝を充分に知つてゐる誰もが云ふ通り、君の豐後掾は君の一生を通しての傑作だと推賞するに躊躇しない程の出來榮であつた。作家としての私は、自己の作品に第三者的の批判を加へる冷靜を持たない。併し優れた君の技藝が私のこの戯曲に、更に熱い血汐と、強い生命とを注ぎ

込んでくれた事だけは決して疑はぬ。

この成功に力を得た私は、更に又五郎君の爲に「おこよ源三郎」を書いた。頁の都合でこの集には入れなかつたが、「石田三成」をも提供した。四番目に「松平忠直卿」を演ぜんとして果さず、君は宿痾の爲に急に不歸の客となつた。去年三月十九日――私が君と識つて以來僅に一年を經るに過ぎない。

その當坐、世界は私に取つて闇黒そのものだつた。光明は君と共に永遠に私から去つてしまつたやうな氣持がした。兎に角お前は又五郎君に依つて、劇作家としての或自信を呼覺まされたのではないか。今意氣地なく倒れては、故人に對しても恥かしくはないか。――これだけの元氣を振ひ起して來るのは私に取つては容易の事ではなかつた。

去年から今年へかけて別して新氣運が劇界に澎湃たるを見るにつけ、愈々切に私は君を喪つた悲みを思はずにはゐられない。君の素質及び抱負から考へて、今暫くの壽を保たしめば、かの新人某々君等と共に、遠からず君が新興劇壇の一角に覇を稱ふるに至るは疑ひのない事であつたから。三十六年の君の生涯は遂に一個の悲劇であつた。

殘されし者の寂しさは私の胸に巣つていつまでも離れまい。併し私は書く。弱い心に鞭つて飽くまでも書く。こゝに小さな戯曲集を編んで世に問ふのも、この心に一の策勵を與へんが爲に外ならないのだ。

最後に一言云ひ添へたい。この集の刊行に就いては根岸吉之助氏の好意に俟つ所が多い。記して深く感謝の意を表する。

大正十年三月一日

清見陸郎

目次

宮古路豐後掾……一
おこよ源三郎……四九
坂崎出羽……九九
松平忠直卿……一四一
湊屋兄弟……一八九

宮古路豊後掾

宮古路豐後掾

新狂

人物

宮古路豐後掾

弟子　幸八

同　市四郎

同　綱太夫

息女　お妙

用人松田總右衛門

乳母　お粂

仲間　角助

辰松八郎兵衛女房おけん

氷茶屋娘おそよ

宮古路豐後掾

遍羅屋手代半兵衛
その他近所の子供、駕屋等數名

元文五年九月の出來事。

小庭を前にしたる廢屋。二重の正面は壁。その中程に古びた暖簾（幟か引幕の切れを利用して作れるもの）懸り、奥の間への出入口になつてゐる。上手の壁には袋入の三味線三四挺懸り、その下に見臺、本箱、稽古臺などを置く。下手壁の前に爐を切り、自在鐵より土瓶さがる。傍に茶器その他の品々。下手に傾きかゝつた枝折門。その前に立木一本。（可憐なる花を着けたるものなど宜しかるべし）その向う隣接せる寺院の土塀。家の上手奥深く雜草蓬々たる庭。突當りにこはれかけた垣根。籔だゝみ。その向うは矢張り隣の寺院の境内。總て淺草寺に程近き宮古路豐後掾が佗住居の體。秋の日既に傾きかゝり、庭には折々虫が鳴く。

弟子幸八、四十がらみ、上り框に腰かけてよごれた足を拭き、市四郎、二十ぐらゐの優男、庭の草むしりをしてゐる。

市四郎　むしつてもむしつても、後から後からと生えるのだから仕樣がない。

幸八　だからよい加減の處で切上げて置くのぢや。いくら綺麗にしたからとて、誰一人訪ねてくれるではなし——

市四郎　でも綺麗好きな師匠の事、此頃では口へ出しては云ひなさらぬが、あんまり鄙むさくして置いても惡からう。

市四郎猶も草をむしる。近所の子供五六人男女を交へたるいづれも見すぼらしき服裝、口々に「豐後米八斗二升と觸れられて、孤をかぶるか宮こぢきめら」といふ落首の文句に、自己流の妙な節を附けて唄ひながら出て來る。子供等枝折門の前まで來ると一層聲を高めて唄ひ囃す。

子供一　（門内を覗き）やあ、あんな處で草をむしつてやがら。

子供二　年取つた方は足を拭いてやがら。

子供三　（唄ふ）豐後米八斗二升と觸れられて、孤をかぶるか宮こぢきめら——

子供四　やあい。

宮古路豐後掾

子供一同　やあい。

幸八　（子供等の聲を聞いて立上り）畜生、又いつもの餓鬼共だな。

市四郎　およしよ幸八さん、構ふと却つてうるさいから。

幸八　默つてゐれば猶の事附け上るわな。

市四郎頻りと幸八を制する。門外の子供は猶もわい〳〵囃したてる。下手から水茶屋の娘おそよ、十七八、出で來り、この體を見て家に入り衆ね立木の蔭に佇む。

幸八　（門外に駈け出で）喧ましい。あつちへ失せろ。

子供一　わあい。怒つたい。

子供二　怖かあないぞ。わあい。

子供等の或者は幸八に向つて石を投げつけ、囃したてつゝ揚幕へ逃げ込む。幸八跡を追つて入る。

市四郎　（門の外まで出て）およしつたら幸八さん、子供を相手にしたつて仕樣がない。おそよ後ろから市四郎の目隱しをする。

市四郎　（びつくりしてその手を拂ひのけ）おゝ、お前はおそよさん、いつからこゝに。

おそよ　たつた今來たなれど、悪戯つ子達が騒いでゐるので、入りかねてゐたわいな。

市四郎　（家の方を氣にしながら）何の用かは知らないが、ちやうどしかけた用事もあり、又明日でもゆつくり聞く事にしやう程に――（扉を閉めようとする）

おそよ　（慌てゝ市四郎の袂を捉へ）あれ待つて。人の顔を見るなり、話も聞かずに逃げなさんすは、あんまりひどうござんすぞえ。

市四郎　逃ける譯ではないけれど、今は悪い。今日は折が悪いと云ふに。

おそよ　なぜ悪い。わしがこなたに今日話さうと思うて來た事は、それは〳〵よい事ぢや。この上もなくよい事ぢや。

この話の間に宮古路豐後掾、三十五六、正面暖簾口より現れ、緣端に立つて二人の話を聞く。古びたれども贅澤なる着衣、髮少しく亂れる。

市四郎　よい事とはどんな事ぢや。

おそよ　母さんがな、とう〳〵あれを得心したのぢや。

市四郎　（思はず大きな聲になり）あれとは――お前とわしと夫婦になる事をか。

おそよ　さうぢや。それ故わしは、一時も早うその事をお前に知らしたいと思うて。

市四郎　これ、そのやうに大きな聲はせぬもの。師匠に聞かれたら悪い。

おそよ　なぜ悪いのぢや。つねづゝお前の話にも、お師匠様はわし達二人が味方との事ではないか。

市四郎　それは本當ぢや。したが今日は悪い。さういふ話は、今日の師匠には禁物ぢや。

おそよ　そりや又どうして。わしには合點がいかぬ。

市四郎　（聲を潜め）米田様のお嬢様は、今夜鳥居坂のお邸へお輿入遊ばす。

おそよ　えゝ、ではあれ程に思ひ詰めてゐさんしたのを諦めて、お妙様はとう〳〵よそのお邸へ——

——（市四郎と顔を見合せて暫く詞絶える。）

豐後掾　（二三歩歩み出で）市四郎——これ市四郎、そんな門口に立話をしてるずと、こちらへ入れたらよいではないか。

市四郎　（顧みてびつくりし、おそよにはわざと冷淡に）それぢや話はこの次に聞く事にして、兎に角今日はこれでお歸り。

豐後掾　わしへの遠慮なら少しも入らぬ。おそよさんもこちらへお入り。

市四郎　なあに、いゝのでございますよ。今日に限つたといふ話ではなし。

豐後掾　お前はよくとも、おそよさんは悪からう。（おそよに）おそよさん、今日に限つてなにうじ〳〵。早う入つたらよいではないか。

おそよ　（嬉しさうな、又極りの悪さうな様子で内へ入る）

豐後掾　遠慮せずと、ずつとこつちへ上つたがよい。

おそよ　いゝえ、わたくしはこゝで結構でございます。（縁端に掛ける）

市四郎　（二重に上り、爐の火を見たりしながら）毎日々々の侘しい暮し、さぞお窓屈でございませう。

豐後掾　昨日のやうに思へども、この淺草田甫近くに住居してより最早一年、此頃では馴れたせいかして、さまで侘しうも覺えずなつたわ。恥を恥、苦みを苦みと思はぬやうになつては、人間も仕舞であらうよ。はゝゝゝ。——それはさうと市四郎、お前は今門口で何を話してゐたのぢや。

市四郎　（恐縮して答ふべき辭を知らず）

豐後掾　隱す事はない。わしはちやんと聞いてゐたのぢや。

市四郎　どうぞ勘忍して下さりませ。辛い、切ない師匠の今日の心持を、うかとおそよになど話したのは悪うございました。

豐後掾　いや〳〵、わしはそんな事を云つてゐるのではない。それよりも聞きたいのは、おそよさんが市四郎に云はうとして來た話ぢや。おそよさん、お前の母さんはとう〳〵あの事を得心したか。

おそよ　はい、あの――

市四郎　これ、そんな事を師匠に話す奴があるものか。

豐後掾　まあよいと云ふに。さういふ日の來る事を、わしはどんなにお前達二人の爲に望んでゐたらう。ならう事ならわしは、それをわしの力でしてやりたかつた。したが情けない事にはわしはその肝腎の力といふものを奪はれてしまふた身であつた。

市四郎　勿體ないそのお詞。蔭になり日向になり、わたくし共の爲を思うて下さる師匠のお心盡しは、わたくしにもようく分つてをりまする。

おそよ　（溜らなくなつてはら〳〵と涙し）お師匠樣、お嬢樣は――米田樣のお嬢樣は、今夜よそへお輿入遊ばすさうでございますね。

市四郎　これ、何を云ふのぢや。お前といふ人は物の辨へのない人ぢやな。

この時揚幕に人聲がして、幸八、遲羅屋手代半兵衛に袂を押へられながら出て來る。

半兵衛　いかん、いかん。お前さんのもう暫くにも聞き飽きた。どうでも今日は貰つて行かなけりや、國元の店へ對してわしの申譯が立ちませぬ。

幸八　でもこゝは往來の事。いくらせつついてもどうする譯にも行きはせぬ。

半兵衛　それだから家へ行かうといふのぢや。家へ行つて直々師匠に掛合つて、どうでも拂つて貰はうといふのぢや。

幸八　それされる位なら、何もこのやうに頼みはせぬ。こんな事はなるべく師匠の耳へは入れたくないのだ。

半兵衛　いくら耳へ入れたくないと云つた處が、元々お前さんの師匠が註文して染めさせた品。師匠が拂ふのはこりや當然の話ぢや。

幸八と半兵衛と爭ひつゝ舞臺へ來る。その聲家内の三人が耳へも入る。中にも市四郎はそれと覺つて當惑顔。

豐後掾　幸八の聲のやうぢや。市四郎、見てやれ。

市四郎　（二重を降り、木戸口に立つて樣子を聞く）

豐後掾　何ぢや、市四郎。

市四郎　(困つて)あの……近江八幡の……

豐後掾　近江八幡の――

市四郎　遲羅屋の手代が參つてゐるのでございます。

豐後掾　うむ、では日外頼んだ遲羅染の代金、それを取りに來たのぢやな。

幸八　(門外にて)それはさうさ。さうには違ひないが、長い事は云はぬ。この月一杯、せめてそれまで待つて下され。毎日までにはどうにか都合する。

半兵衛　その手で何遍か瞞されてゐるのだ。お前さんが何と云ひなすつても、今日はどうでも師匠に會ふのだ。

半兵衛、幸八をぐい〳〵押しつけるやうにして門内へ入る。

幸八　(後退りに家へ入りながら、思はず豐後掾と顔見合せ)おゝ師匠。

市四郎　どこまで悪戯ら共を追駈けて行つたかと思へば、飛んだ人に取捉まつたな。

半兵衛　そちらで註文した染物の代金、請取りに來たわしが何の飛んだ人。無駄口聞いて貰ひますまい。

市四郎　成程、これはわしが悪かつた。謝ります、赦して下され。

半兵衛　そんな事はどうでもよい。わしが欲しいのは金ぢや。この春調へた遲羅染二段、棧留縞一疋、それに應帝、阿瑪港の袋物の代金〆て五兩二分、手着かずその儘になつてをります。それを拂つて貰ひたい。

豐後掾　それで今のやうに、門口で幸八と云ひ爭うてゐなすつたのか。わしぢやとて心に掛けぬではなかつたれど、何を云ふにも諸事不如意の今日此頃――

半兵衛　これ〳〵、その言譯ならそこにゐる幸八さんや市四郎さんから、耳にたこのいく程聞かされてゐます。豐後節の御禁止は去年からの事ではないか。米櫃の藝を封じられて、その日のたつきにも困るといふのなら、染がどうの、縞柄が氣に入らぬなどゝ身分不相應の榮耀は云はぬものぢや。今更商買物の効能書を述べ立てるにも當るまいが、自體この遲羅染といふのは南蠻渡來の珍らしい染模樣。遲羅屋の元祖今から三代前の主人が、自ら南蠻へ渡つて染方の秘法を傳授されたもの。さればこそ當節でも、よく〳〵の伊達者でなくば内の染物は身に着けませぬわ。

市四郎　遲羅染の襦袢、阿瑪港の蔓入が師匠に取つて何の贅澤。淨瑠璃が全盛の頃にはな、お江戸中の人々、町方は固より武家方の若衆に至るまで、師匠が好みの文金風の髷を眞似て、われ劣らじと競うて結ふた程のものぢや。

幸八　流行の源、好尚の粋と稱へられたのが内の師匠。世の常の人達と一緒に見て貰ふまい。

半兵衛　それだから金は拂はいでもよいといふのか。いつまで昔の唄をうたふたとて、世間樣が承知せぬ。自體豐後節が御禁止になつたのはどういふ譯ぢや。この淨瑠璃が流行してから、世間に心中斷落の沙汰が絶えぬに依つて、それでは、つとになつたのではないか。

幸八　措けやい。云はいでもの事は默つてをれ。拂はぬと誰が云うた。この月の晦日まで待つてくれと賴んでゐるのぢや。

半兵衛　待てばどんなよい芽が吹く。一日生きてゐれば一日だけ、深みへ落ちて行くお主達だ。のんべんぐらりと何の待てよう。師匠、一體今日はどうして下さるのぢや。

豐後掾　話はよく分りました。お主とて醉狂づくにやる商ひではなし、それを拂はずに今日まで放つて置いたはこつちの過り。いかにもその金は唯今上げませう。

幸八　その金を……

市四郎　あの、師匠が……（幸八と顔見合せて不審さう）

豐後掾　ぢやが、わしの懐には金はない。その日の糧の代となる藝の道をば封じられて、一年この方逼塞のこの豐後掾、恥づかしながら身に着いた金と云うては、鐚一文の蓄へもないわ。

半兵衛　大方そんな事だらうと思うた。それでゐながら、金をこの場でくれうと云ふのは――

豐後掾　おそよさん。（おそよを招ぎて、小聲に何事をか呼く）

おそよ　（頷き立つて奥の間へ行き、すぐ蒔繪の香盒を手にして出て來る）

豐後掾　（半兵衛の前へその香盒を出し）手代どの、これを金の代りに持つて行つて下され。幸阿彌が心血を絞つて作り上げた蒔繪の香盒、捨値に賣つても五兩や七兩の金にはすぐとならう。

半兵衛　（香盒を取上げ）や、こりや素張らしい代物ぢや。

幸八　（香盒を半兵衛の手から奪ひ）待つた。師匠、こりやあの米田樣の……こんな大切な品をやつて宜しいのでござりますか。

豐後掾　いゝから默つてやるがよい。何も彼も手離し盡して、金目の物と云へばそれより外にはないのぢやもの。

幸八　でもござりませうが、この香盒はあの方樣が師匠にとて下された心づくしの品――

市四郎　殊には今宵、鳥居坂のお邸へお輿入になれば、再びお目にはかゝれぬ方樣。云はゞこれが形身の……

豐後掾　何を云ふぞ。所詮かうなる二人が定めなら、潔く思ひ切るばかりぢや。そのわしに何の形

身。身近く持つて思ひの種とならうより……幸八、よいからそれをやつてくれ。(その儘立つて奥へ入る)

半兵衛　近頃堀出し物のその香盒、早くこつちへ——(幸八の手より香盒を取らんとす)

幸八　おつと待つたり。(半兵衛の手を拂ひのけ)なあ市四郎、何ほ何でもこれを遲纖染の代りにくれてやると云ふのはなあ。

市四郎　さうさ。でも、師匠があゝ仰しやるのだから。

半兵衛　さうとも、傍からぐづ〳〵云ふ事があるものか。(手早く幸八の手から香盒を引つたくり)見れば見る程立派な物ぢや。これを代りに持つて行つたら、國の店でもぐづ〳〵は云ひますまいよ。(行きかける)

幸八　手代殿、まあ待つた。

半兵衛　待つも待たぬも、師匠から云ひ出した事ではないか。貧乏はしてゐてもさすがは以前鳴らした豐後掾様、いやお見上げ申しましたよ。ではお弟子の衆、大きにお喧ましうございました。(猶も幸八が留めようとするのを、突きのけるやうにして歸つて行く)

幸八　(門の外まで追つて行つたが、すご〳〵引返し)とう〳〵行つてしまやがつた。忌々しい野郎だな。

おそよ　一時はどうなる事かと、わしや氣が氣ではなかつたわいな。

市四郎　それにしても師匠は、どうしたといふ事だらう。こればかりはと云うて離さなんだあの大切な香盒をば、惜氣もなく近江の商人になどにやつてしまふて——

おそよ　切ないお師匠さんの心持を思ひ遣れば、わしやお氣の毒でなりませぬ。

幸八　それに就けてもお主達二人は、よく〳〵有難いと思はねばならぬぞ。思ひ合うた阿志が、さうして毎日のやうに顔を見せつ見られつ出來るのぢやもの、世の中にこれ程の仕合せがあらうかい。

この頃より奥の間から、あたりを忍ぶやうな一中がゝりの三味線が聞えて來る。(特に一中がゝりとせしは、豐後掾江戸にて一流を開く前、生地京都に於て、初代都一中に就いて一中節を學びしが故なり)

市四郎　後生だから、今日だけはその話は措いて下され。師匠に聞かれるとわしの心が濟まぬ程に。(もじ〳〵す

おそよ　わしもいろ〳〵話したい事があつたなれど、どうやら云ひそびれてしまふた。(もじ〳〵す

る）

幸八　（ふと奥の間の三味の音に耳を留め）師匠だな。

おそよ　ほんにお師匠さんぢや。

市四郎　この佗住居に移つてからは、三味線などには手さへ觸れた事のない師匠が、今日に限つて

どうした譯。

おそよ　胸の結ほれを晴らす手だてか——

市四郎　但しはやけか。

幸八　をかしい。師匠があんな彈き方をする筈はないのだが。（不審さうに小首を傾け）市さん、お主やあの音色に心づかぬか。

市四郎　あの音色とは——（ちつと耳を澄まし）成程、さう云へば少しも撥に冴えがない。

幸八　撥に冴えのないのみか、重く沈んだあの糸の音、まるで泣いてゞもゐるやうな——

市四郎　抑へようとして抑へられぬ心の亂れが、糸の上にまであり〳〵と見えるのか。

おそよ　それではやつぱりお師匠様は、米田様のお嬢様の事が——

幸八　藝の爲には何も彼も打捨てゝ、寂しい獨り身の暮しを送つて來た長の年月、師匠が心の底か

ら許した女子と云へば、あのお娘御より外にはなかつた。そのお妙様が、親御様の勸めに餘儀なくも、今宵は他家へ嫁入り遊ばすといふのぢやもの、師匠の心も亂れいでか。

三人豐後掾の心中を思ひやり、詞が絶える。三味の音は續く。庭の草叢に虫が細々と鳴く。

（揚幕から豐後掾が舊門弟綱太夫、二十八九、辰松八郎兵衛女房おげん、三十二三、を案内して出て來る。

綱太夫　（舞臺の方を指さし）あそこに見えますのが師匠の家でござります。さぞお草臥れでござりましたらう。

おげん　なんの、途中までは駕だからそれ程にも思はなんだが、心配なは豐後掾さん、うまく承知してくれゝばよいが。

綱太夫　大丈夫ですよおかみさん、この綱太夫がふるなの辯で說きつけりや、いかに頑固な師匠でも、ころりと參つてしまひまさ。

おげん　註文通りさういけばよいがね。

綱太夫　（舞臺まで來て、門口に立ち）御免なさい。

市四郎　はい。――誰か來たやうぢや。

幸八　又掛取か。掛取なら駄目だと云うて斷つてしまへ。

おそよ　わしが見て來ませう。（門の戸を開き）お前は、綱太夫さん。

綱太夫　おそよさんか。相變らず可愛い人の顔を見に來てゐるな。（おけんを顧み）おかみさん、ずつとお入りなさいまし。

おけん　（門の内へ入る）

幸八　誰かと思へば綱太夫だな。何と思うてこゝへ來た。見捨てた家に用はなからう。とつとゝ歸れ。

綱太夫　お主が怒るのは無理はない。無理はないからその詫びもしたし、かたぐ〳〵師匠にお願みしたい事もあつたので、この御新造さんと同道して來たのぢや。どうか師匠に會はしてくれ。

幸八　今日は師匠は家にはゐぬ。朝から脇へ出て行かれた。

綱太夫　出て行つた師匠が、どうして奥で三味線を彈いてゐる。そんな片意地を張らないで取次いでくれよう。

幸八　いゝやならぬ。

綱太夫　そんなら市さん。お主に頼む。

市四郎　（當惑して）幸八さん、折角綱さんがあゝ云ふのだから。

幸八　いかん、いかん。そんな事をして見ろ、わし達が反對に師匠から叱られるわ。自體貴樣は内の師匠を見限つて、浪花下りの操座へ脱け出した男ぢやないか。その貴樣が、今更何の師匠に用ぞ。

この間に奥の間の三味線ふと彈きやむ。

綱太夫　それがなあ幸八、是非師匠でなけりやならない事が持上つたのぢや。お主達の爲にも決して悪い話ではない。兎に角わしを上らしてくれ。おかみさんもお上んなさいまし。（おけんを促して二重へ上る）

おそよ　（この體を見て市四郎を小手招ぎ、耳に口を當て）よいかえ、よいかえ。

市四郎　わかつた。わかつた。では明日又ゆつくり。

おそよ　（後に心を殘して下手へ入る）

幸八　やい、やい、やい。何だつて許しもなく人の家へ上り込んで來るのぢや。（綱太夫を押し出さうとする）

綱太夫　そんな因業云はないで、頼むから師匠に會はしてくれ。
幸八　駄目だと云つたらしぶとい野郎だな。市さん、何をうろ〳〵してゐるのぢや。お主も手傳うて、此奴を外へ撮み出してしまはう。
綱太夫は無理にも奥の間へ行かうとする。幸八と市四郎それを支へる。おけんはどうしたものかと、立つたり居たり當惑してゐる。奥の間から豐後掾出で來る。
豐後掾　（穏かに）綱太夫、久しく會はなんだが變りもないか。
幸八　困るな、師匠。あんたが今そこへ出て來なすつちや、何にもなりませんや。
豐後掾　久し振で訪ねて來た客に、その持てなし振はちと手荒からう。まあ下にゐなさいと云へば。（強いて幸八の手を放させる）
綱太夫　（壁に手を突き）師匠、その後は長い事御不沙汰してをりましたが、いつも御機嫌宜しう、結構でござります。
幸八　なんの御機嫌い〻事があるものか。口から出まかせは措いてくれ。
綱太夫　何と云はれても、返す詞はございません。あの時はつひ友達の勸め上手に乘せられて、師匠のお腹立を考へてゐる暇もなく——

豐後掾　なんのわしが腹など立てゝゐよう。弟子よ師匠よと呼び合つたのは昔の事、今は面を撞けて人中にも出られぬ豐後掾、師匠らしい事がしてやりたうても得出來ぬ。いつまでわしのやうな者に附いてゐれば、遂には路頭にも迷はねばならぬ。お前がわしを捨てたのを、何でわしが惡く思うてゐよう。
綱太夫　では師匠は、わたしのした事を咎め立てもせず、あの、赦して下さりますか。
豐後掾　赦すも赦さぬもあるものか、葺屋町の操座へ太夫として出た事を、わしはお前の爲に喜びこそすれ、何の恨みに思うてゐよう。
綱太夫　やれ〳〵、それでわたしも安心しました。物分りのい〻師匠の事だから、大概さう仰しやつて下さるだらうとは思つてゐましたが、でも今の一言を聞くまでは、やつぱり心が安まらないで。
幸八　何の師匠が本心からお赦しになるものか。貴樣のやうな奴は、師匠の方から愛想をつかしてゐなさるのぢや。
綱太夫　お主と口を聞いてはゐぬ。默つて引込んでゐなさい。——師匠、就きましては、折入つてあなたにお願ひしたい事がございますので。

豐後掾　これは又改つた。さうしてその願ひといふのは。

綱太夫　ほかでもございません、こゝにお出でのこのお内儀――（おけんを指さし）わたしが今日上りましたのは、一つには自分の落度をお詫びもしたく、又二つにはこのお内儀のお頼みを、師匠に聞いて頂きたかつたからで。

豐後掾　つひに見かけぬお方ぢやが、一體こなたは――

おけん　（進み出で）これは宮古路のお師匠様でございましたか。申遲れて失禮を致しました。わたくしは昨年秋大阪表より當お江戸に下り、葺屋町に操芝居の櫓を超しました辰松八郎兵衛が女房おけんと申す者、どうぞお見知り置き下さいますやう。

豐後掾　（慇懃に）これは聞及ぶ八郎兵衛殿の内方でございましたか。知らぬ事とて先刻から失禮をしてをりました。

おけん　わたくしこそ突然お邪魔に上り、失禮を致しました。本來ならば良人八郎兵衛お願ひに上ります筈なれど、何を申すも興行毎の大入にて、體にちつとの暇もございませんので――

豐後掾　御繁昌のお噂はかね〴〵聞いて喜んでをりました。して八郎兵衛殿のお内儀が、改まつてわしへお頼みと云ふのは――

綱太夫　師匠、どうぞ内の芝居へ出て下さいませんか。人形使ひには手が揃つてをりますけれど、淨瑠璃の太夫によいのがなくて困つてをります。

おけん　それにこの次の替り狂言には、近松が「博多小女郎」を出したいと存じます。師匠がまだ大阪にお出での頃、あの道行の處を竹本座で語つて、大評判をお取りなさんした事は、わたくしも見物に參つて存じてをります。

豐後掾　さういふ事もありましたな。今思ひ返すと夢のやうな氣がします。

おけん　その昔の夢も、お前様の心一つで、譯なく現實に出來るでばござんせぬか。操座に出て下さりませ。

豐後掾　わしの淨瑠璃が持て囃さるゝやうになつてから、江戸に心中沙汰が絶えぬと云うて、わしは唄ふ事を禁ぜられてしまひました。それはお身達も知つてゞあらうに。

おけん　それは存じてをります。ぢやに依つて、豐後節その儘ではいけますまい。節の上に少しとれまでと變り目を見せて――

綱太夫　それに豐後掾では、お上への聞えも如何と思はれますから、そこはいゝ加減に名を變へて――

幸八　やい、やい、やい。默つて聞いてゐりやいゝ氣になつて、師匠に改名しろとは何事だい。

豐後掾　よいわ幸八、どうでわしは出はせぬのぢや。

おけん　天下に敵のない師匠の喉、久し振で聞かせたなら、お江戸の衆はどんなにか大騷ぎして集まつて來ませう。唯さへ賑はう操座の前が、もう人の山で埋まるのが、今から見えるやうでございます。

豐後掾　わしは出ますまい。禁令を犯してまで、そのやうな恐ろしい事をしようとは思ひませぬ。

おけん　禁令とは申しますものゝ、あのお布令が出てからもう一年餘り、此頃ではお上の手心も、大分弛んで來たと申す事ではござりませぬか。

綱太夫　それに、節も違へば太夫の名前も變つてゐるとすりや、びく〳〵するがものはありませんよ。當時名代の操座、そこへ師匠の出勤といふ事になりや、それこそ鬼に金棒でさ。

おけん　師匠が承知してさへ下されば、この芝居が當るのは定。どうぞ儲けさして下さりませ。その代りお禮はいくらでも致します。

豐後掾　金にこだはつて、わしはためらうてゐるのではない。

綱太夫　でもかういふ事は、お給金の相談が何より肝腎でさ。早い話が千兩と百兩とぢや、拔けべき借錢も拔けられない道理でさあ。

豐後掾　操座へ出る事は斷りませう。

綱太夫　するとその借錢の爲にいつまでも苦しめられて、容易にうだつが上らない。

豐後掾　どうあつても操座へは出ない。さう云つてゐるのが、綱太夫、お前には分らないのか。

綱太夫　では、これ程事を分けて頼んでゐるに、それでも師匠は不承知と云ひなさるか。

おげん　何だね綱太夫さん、師匠のやうな方に今のやうな口の閉き方をすれば、氣を惡くなさるのは當り前だわね。師匠、給金がどうの、借錢がどうのと申したはわたし等が惡うございました。ではわたし共を助けると思召して、いえ、辰松八郎兵衛を引立てると思召して、操座へ出て下さりませ。

豐後掾　（無言）

綱太夫　それなら文句はございますまい。師匠、うんと云つておくんなさい。

豐後掾　何度繰返しても同じ事ぢや。出ないものはどこまで行つても出ないのぢや。

おけん　ではこれ程下手に出てお願ひしても。（きつとなり）宜しうございます。それ程厭な操座なら、もうたつてとは申しますまい。その代りわたし共の芝居へ出られぬ譯を、この場で仰しやつ

て下さいまし。

豐後掾　その譯……はゝゝ、譯はまあ云ひますまい。

おけん　お江戸の眞中からわざ〳〵訪ねて來たわたし達に、こんな恥をかゝせて置きながら、譯が話せぬとは卑怯ぢや。たつた一言あなたの口から、かういふ譯だからと聞かないうちは、わしやいつまでも歸りませぬ。

豐後掾　それ程聞きたくば話して上げよう。わしはお前さんとこの小屋が氣に入らぬのぢや。

おけん　えゝ、何と云ひなさんす。

豐後掾　さつきから聞いてゐれば、詞の端々にさも自慢らしく響く操座の大入繁昌。成程それは嘘ではあるまい。嘘ではあるまいが、一體それは何の爲にぢや。

綱太夫　云ふまでもない、內の芝居が面白いからでさ。

豐後掾　違ふわ。江戸の衆はこれまで操芝居といふものを見た事がない。その珍らし物好きの弱みにつけ込んで、濡手で粟の金儲けをしたのがお前方ぢや。

おけん　濡手で粟とは聞えの惡い。內の芝居はそのやうなまやかし物ではござんせぬ。女と侮り失禮な事は云はぬものぢや。

豐後掾　それでは聞かう。江戸に下る前、お前方の操座は上方ではどのやうなものであつたぞ。

おけん　（はつとして言句に詰まる）

豐後掾　場末の町を小屋掛同然に興行し廻つて、竹本豐竹二座の前には頭も上らぬ見じめなざまではなかつたか。

幸八　うむ、うむ、よう仰しやつた。さうぢやとも、さうぢやとも。辰松の操りと云へば、謂はゞ乞食芝居も同然よ。それがこの土地へ來て繁昌するやうになつたのは、全くお江戸の衆が竹本座あたりでやる本場の操芝居を知らぬせいぢや。

豐後掾　義太夫淨瑠璃をこそ語らね、竹本座にゐた頃、わしはあの芝居でも指折りの太夫であつた。その後江戸に下つて一流豐後節を始め、中村座に出勤するやうになつてからは、當時隨一の人氣役者菊之丞の名聲をも凌がんばかり。堺町へ芝居見物に行くのは、菊之丞の藝を見るのではなうて、わしの淨瑠璃を聽かうが爲ぢやとまで持て囃されたこの豐後掾、時代時節でかく日蔭の身と落ち果てゝはねようとも、何でお前方の小屋に出られよう。わしが斷つたのはその爲ぢや。

綱太夫　引かれ者の小唄とやら、今更昔の全盛を自慢して見たからとて始まらぬわ。

幸八　何が自慢ぢや。師匠の今の詞に、これつぱかりも嘘があるかい。

おげん　（急に立上つて綱太夫の袖を引き）歸りませう。

綱太夫　だつて、こんな大口叩かれながら、のめ〳〵歸るのは業腹だ。――師匠、成程お前さんの云ひなさる事に、微塵も嘘はございますまい。だが、そんな事ばかり云つてゐたら、明日にも順が干上りますぜ。

幸八　何を。餘計な事を云ふな。汝の世話にはなりはせぬ。（坐蒲團を投る）

綱太夫　師匠よ弟子よと呼ばれた昔の誼みを思へばこそ、人が親切に云つてやるのに。

幸八　何が親切だ。汝のやうな人非人は、かうしてやらずは性はつくまい。（綱太夫に掴みかゝる）

おげん　こんな處に長居は無用。綱さん、早く歸りませう

おげんは綱太夫を、市四郎は幸八を一生懸命に引分ける。

綱太夫　この返報はきつとするから、覺えてゐろ。

幸八　それを恐れる幸八かい。相手にならいつでもならう。

おげん　（猶も爭はうとする綱太夫を抑へ）これさ、およしと云つたらねえ。（無理に綱太夫を引張つて庭に降り）皆さん、大きにお喧ましうございました。

幸八　へん、一昨日來やがれ。

おげん　（門口を出て花道まで來り）今日のやうなわしや口惜しい思ひをした事はない。

綱太夫　きつと思ひ知らして見せまさあ。なあに、豐後掾が出てくれずとも、操座が潰れるといふぢやなし。

二人揚幕へ入る。

幸八　（忌々しさうに揚幕の方を見やり）師匠さへ留めなけりや、綱太夫の奴、半殺しの眼に合はせてやつたのに。

豐後掾　又誰か來るといけない。戸口のかき金を掛けて置け。（ごろりと寢そべつて氣を紛らすやうに稽古本を取出して默讀）

市四郎　畏りました。（門のかき金を掛ける。具合が悪くて容易にかゝらぬ仕草などあるべし）

幸八　（ぢつと豐後掾の後姿を眺めてゐたが、突然）師匠、あんた上方へお歸りなされ。

豐後掾　（振向いて）幸八、お前は何を云ふ。

幸八　折があつたら云出さうと、このぢうから考へてをりました。思ひ切つて大阪へお歸りなされ。

豐後掾　歸つてどうするのぢや。故郷を出てちやうど十年、今更浪花に上つて見たとて、それが何の興にならうぞ。

幸八　面白づくでお歸りなされと申すのではございませぬ。京は師匠の生れ故郷、又名前のあがつたのは大阪でございます。向うには師匠が丹精して敎へ込んだ弟子衆も多勢ゐる。又師匠が恩になつたお方も澤山お出になります。その人達とて師匠が今歸つて行つたら、悪いやうには致しますまい。市さん、お主やこの事をどう思ふ。

市四郎　さうさなあ、そりや上方は師匠の故郷には違ひないけれど……

幸八　何でそんな濟まん顏するのぢや。――分つた、おそよさんの事があるからぢやな。それで少しでもこの江戸を離れる事といふと、そのやうに浮かぬ顏をするのぢやな。

市四郎　（慌てゝ）さうではない。さうではなけれど……

幸八　さうでなくば、お主も共々なぜ勸めぬ。こゝが師匠の大事の處ぢやないか。

豐後掾　いや幸八、お前の心遣ひは嬉しけれど、わしはやつぱり江戸にゐよう。

幸八　でも、いつになつたらこの土地に日が照るのやら。遷鶯屋の富草ではなけれど、一日長く江戸にゐれば、それだけ深みへはまるやうなものでございます。殊にはお妙樣も今宵他家へお嫁付き遊ばせば、何の未練がこの土地にございませう。

豐後掾　（呻くやうに）お妙樣……その爲にわしが江戸に執着を持つやうに思はれては心外ぢや。幸八、わしが江戸を得去らぬはな、わしが藝を本當に知つてくれたのは、この江戸の人達だからぢや。

幸八　（無言）

豐後掾　わしは大阪で名を揚げた。又名古屋でも譽を取つた。したが、わしが持つてゐる藝の値打を本當に認めてくれたものは、廣い日本國に江戸の衆より外にはないのぢや。

幸八　でもその師匠の藝に、響をはませるやうな事をして、無理々々留めてしまつたのも、江戸の役人衆ではございませぬか。

豐後掾　時代時節ならそれも仕方がない。

幸八　では、いつまで待つてゐたらいゝ時節が來るのでございます。宛にもならぬ事を宛にして待たうより、お歸りなされ、上方へ、なあ……

豐後掾　わしが屍を埋むべき土地は、江戸より外にはないと、わしはとうから覺悟を定めてゐたのぢや。今大阪へ歸つたなら、あれあの豐後掾は、藝を禁止されてその日のたつきに困つた故のめ

〳〵故郷へ戻りをつたと、人の口の端にかゝらう。師匠甲斐もないこのわしを、それ程までに思うてくれる志、嬉しうはあるなれど、それが口惜しさに故郷へは歸らぬ。必ずともに、悪う思うてくれるなよ。（幸八に背を向けて横になる）

幸八何とも云ひやうなく差俯く。日いつしか暮れて、舞茧人顔も定かならぬまでに暗くなる。

市四郎　うつかりしてゐる内に暗うなつた。どりや燈火をつけませう。（奥から行燈を持ち來る）困つた、油がない。

幸八　油なら今朝方丁字屋の丁稚に云ひつけてやつた筈ぢやに。

市四郎　彼奴ずるうなつて、此頃は少しも人の云ふ事を聞きをらぬ。一つ走り行つて買つて來ませう。

幸八（手眞似で圓を拵へ）あるか。

市四郎はつとして困つたといふ思ひ入。嚬て自分の締めてゐる帶を手眞似で示す。幸八頭を振り、自分の帶に手をかけつゝ何か呟き、二人して暖簾の向うへ入る。間もなく油壺を下げた市四郎の妻屋後に現れ、急ぎ足に下手へ入る。

向うから駕屋二人、急ぎ足に駕を舁いて出て來る。花道の途中まで來ると、駕の中で女の聲がする。駕屋息杖を留め、垂へ耳を當てゝ中なる聲を聞き、何やらうなづく。駕門の前に來て留まる。駕屋駕の垂を揚ける。駕の中より旗本米田家の息女お妙、二十位、出る。目さむるばかり華麗な婚禮の装束。足袋はだし。髪稍亂る。お妙獸つて賃錢を駕屋に渡す。駕屋それを押戴き、同じく一語をも發せず、空駕をかいて元來た道へ引返す。

さて花道まで來てお妙の方を顧み、不審さうに何か呟き合ひつゝすた〳〵揚幕へ入る。

お妙（揚幕の方を氣にしながら息使ひもせはしく）もし、もし、こゝ明けて……豐後掾殿。

豐後掾（ふと聲を耳にして立ちかけたが）心の迷ひか……（又横になる）

お妙　わしぢや。妙ぢや。早う明けて——

豐後掾（思はず立つて行きかけたが）逢うては悪い、逢うては悪い。（苦しさうに頭を振つて又後ろ向）

お妙　これ、わしぢや。市四郎、幸八。こゝ明けて——（劇しく叩く）

幸八　はい〳〵唯今。（暖簾口から飛んで出て門口を開けにかゝる）

豐後掾（幸八を制し）これ、どこへ行く。

幸八　門口に訪ふはたしかにお妙様。

豐後掾　今宵嫁入遊ばす方様が、どうして今頃こゝへお出でなされう。お前の聞違ひぢや。

お妙　幸八はゐやらぬか。市四郎明けて。手間取らば追手がかゝらう。早う入れて。

幸八　あの聲があなたの耳には入りませぬか。疑ひもなくお妙様のお聲ぢや。

豐後掾　よしあれが實のお妙様にもせよ、今宵逢うてはわしの一分が立たぬ。必ず共に門をば開けまい。

幸八　とは云へむざ〳〵お嬢様を、あんな處に待ちぼうけ食はされませうか。（又門を開けにかゝる）

豐後掾　えゝ、ならぬ、ならぬ、ならぬと云ふに。（緣端に立つて門外なるお妙に向ひ）今宵お前様に逢うたとあつては、豐後掾、親御様に申譯が立ちませぬ。どうぞすぐに歸つて下さりませ。（つか〳〵室の隅に駈け戻り、その儘疊の上に面を伏せてしまふ）

幸八　（困じ果てたが、ふと妙案が浮んだやうに獨り肯き）市四郎の奴、何をぐづ〳〵してゐるのぢや。燈火がなうてはどうにもならぬに。――では師匠、一つ走り行つて見て來ますから。（呟くやうに云ひ〳〵そつと門口を開けて出る）

お妙　幸八か、よう明けてたもつた。

幸八　（急ぎお妙を庭口へ押し入れかけたが、小聲で）誰か來たら、すぐに知らせに參りますからの。

（その儘向うへ駈け入る）

お妙緣端に駈け寄る。豐後掾奥口へ逃げ込まうとする。

お妙　（その裾に取縋り）まあ待つて。顏を見るなりどこへ行くのぢや。

豐後掾　今逢うては親御様に濟まぬ。離して下され。

お妙　厭ぢや、厭ぢや。譯も聞かずに歸れと云うても、どうしてこれが歸られう。話がある、待つてたも。

豐後掾　お嬢様、一體お前様は、どうしてこゝへお出でなされたのでござります。

お妙　そなたの顏を見るより外に、わしのこゝへ來る用があらうか。

豐後掾　でも今宵はお前様が、緣組のきまつた鳥居坂のお邸へ、お輿入を遊ばす晩ではござりませぬか。

お妙　わしは逃げて來たのぢや。兩親の無理强ひに餘儀なく承知はしたものゝ、わしやどうしてもあの家へ嫁入る心はない。出立間際の混雜に紛れて邸を抜けて來たわしが身を、どうぞ見つから

ぬ處へ隱して下され。

月出でしと覺しく、舞臺次第に蒼ざめたる光に彩らる。

豐後掾　なりませぬ。お志の程、忝ふはございますれど、それ聞いては猶の事、一刻もこの家にお置き申す事はできませぬ。お嬢樣、さ、お歸り下さりませ。（手を取て出さうとする）

お妙　歸らぬ、歸りませぬ。

豐後掾　そのやうに剛情をお張りなされずと、さ、早う。お邸では父上や母樣が、今頃どのやうに心配してお出で遊ばすか知れませぬ。すぐに歸らば間は缺くまい。少しも早う。

お妙　そなたが何と云やつても、わしや邸へは歸らぬぞえ。思うても見るがよい。わしが抜けて來た後の邸はどのやうな騷ぎであらう。追手の者を四方へ飛ばす。鳥居坂からは時刻の遲いを氣遣うて、迎ひの使が來る。それは〳〵上を下への混雜に違ひない。その中へ、どの顏下げてのめ〳〵戻つて行かれよう。日頃から府癖強い父上樣、よくも親の顏へ泥を塗りをつたと、即坐にお手打は知れてある。

豐後掾　とは云ふものゝ、このまゝお前樣をこゝに置いては……

お妙　わしが父樣や母樣に濟まぬと云やるのであらう。そなたの云やる事は二言目には義理ぢや。義理と情けといづれが重い。これ程までに思ひ詰めたわしの心、そなたにはまだ通じぬのか。

豐後掾　勿體ない。見る蔭もない日影の身を、それ程までに思うて下さるお志、何のおろそかに思ひませう。

お妙　まことその詞に詐りないか。詐りなくば……（ぢつと豐後掾の顏を見て）わしと一緒に死んで下され。

豐後掾はつとしてお妙から身をのく。

お妙　これ程の思ひをして邸を抜け出したわしぢやもの、固より死ぬる覺悟で來ました。

豐後掾　（詞なく沈思する）

お妙　答のないは、わしと死ぬのが恐ろしいか。さもなくば……（ぢつと豐後掾の顏色を讀むやうにして）わかつた、そなたは藝が惜しいのである。よい、よい、それならば頼みはせぬ。わし一人で死ぬるばかりぢや。（帶の間から短刀を取出さうとする）

豐後掾　（慌てゝお妙の手を抑へ）飛んでもない。何をお前樣はなさるのぢや。

お妙　離して、離して。そなたの心はよう分つた。放して。放してたも。（身を揉むうちに髮から笄が落ちる）

豐後掾　お孃樣、どうぞお氣をお鎭め遊ばして。固より生きて望なきこの身が、何の命を惜しみませうぞ。わたくしは唯、貴い旗本のお娘御とお生れ遊ばしたお前樣の爲を思ふばかりに、かやうな事も申します。わたくし風情と浮名を立てられる事を、お前樣はお家の名折れとは思召されぬか。

お妙　名折れといふ者には云はして置け。そなたの唄を聽いた時から、わしが心はそなたの物となつてゐたのぢや。

豐後掾　（感激の餘りお妙の手を取り）お孃樣、死にませう。お前樣と御一緒に死にませう。

お妙　えゝ、死んでたもるか。

豐後掾　旗本の御息女といふ尊い御身分をば、お前樣はわたくしの爲に捨てゝやらうと仰せられます。それ故わたくしも捨てませう、何物にも替へ難う大事にして來たわたくしの藝を。

お妙　（はら〳〵と落涙し）一代に二人とはない優れたそなたの藝と、高が旗本の娘に過ぎないわしが身分と、何の比べ物になりませう。

豐後掾　わたくしに取つてはこの世の中で、お前樣程大切な人はござりませぬ。したがそれよりも猶大切なは、自分の藝でござります。その藝の爲にはわたくしは、強いてもお前樣の事を忘れよう、忘れようと力めました。でも……でも……お前樣の今の一言で、わしが心も折れました。

お妙　赦して下され、豐後掾殿。（犇と取縋る）

豐後掾　どうぞして今一度昔の世に返したい。さうしてわしが命の限りを唄ひ盡したいと願うてゐたその望も、今は綺麗に忘れませう。わしが唄ふを聽いて死ぬる心になつた多くのきとこなんな に、わし達二人もいさぎよう死ぬるばかりぢや。

お妙　父上、母樣、二人が罪をお赦し下され。（向うを遙かに伏し拜む）

豐後掾　（同じく向うへ額づきし後）死なうと覺悟極めしからは、この家に長居はなりませぬ。さ、少しも早う。（お妙の手を取る）

お妙　どこへ行くのぢや。

豐後掾　二人が死場所を搜す爲に。ぐづ〳〵してゐたら追手がかゝらう。弟子も歸つて參りませう。わたくしに捉まつてお出なされませ。（お妙をせき立てゝ庭先を家の背後の方へ行きかける。草叢では盛んに虫が鳴く。ぢつと耳を傾けて）おゝ虫が鳴く。雨より繁く虫が鳴く。鳴け、鳴け。聲を張り羽を顫はせて、命の限り鳴くがよい。やがて冷たい風が吹いて地面が霜に白くなれば、どうでお前方も死んで行かねばならぬのぢや。でもこのわしに比ぶれば、まだしもお前方の方が

仕合せぢやぞ。お前方は命の終るまで、さうして唄ひ死に死ぬる事が出來る。わしは……唄はうが爲に世に出た筈のこのわしは、その唄ふといふ事を封じられて、默つて唖のやうに死んで行かねばならぬのぢや。――おゝ鳴くわ、鳴くわ。葉といふ葉、莖といふ莖につどひ集まる幾千の秋の虫が、喉も破るゝばかり鳴き續けて、この豐後掾が腸をずた〳〵に掻きむしるわ。（又行きかける）

お妙何やらに躓いて倒れる。豐後掾それを助け起す。月光を浴びたその影法師が地上に映る。

豐後掾（ぢつと見返つて）蒼ざめて地に引く二人が影法師……

お妙　離れぬ姿が、いつそ嬉しい。（靠と豐後掾の肩に縋る）

この時遠くで吉原通ひの若者でも唄ふと覺しく、美音で次の投節が聞える。

〽住めば浮世に思ひのますに、月と入ろやれ、山の端に……

この唄一杯に二人の姿鍛だゝみの闇に消える。暫くして幸八、向うから息せき切つて駈けて來る。

幸八　若しお孃樣、お邸の提灯が見えましたぜ。（家へ入つたが返辭がないのであつちこつちと捜し廻り）お孃樣……お孃樣……師匠……師匠……（段々不安な呼び聲になり、あたふた鍛だゝみの向うへ捜しに行く）

すぐ向うから米田家用人松田總右衛門、お妙の乳母お粂、仲間角助急ぎ足で駈け出る。總右衛門とは定紋の附いた弓張提灯を持つ。花道の途中まで來ると、お粂何かに躓いてばつたり轉ぶ。

お粂　あ痛、おゝ痛……（顏をしかめて起上る）

總右衛門　えゝ、ぐづ〳〵してゐる處でないわ。早う、早う。（お粂を引摺るやうにして舞臺へ來る）

角助　どこだ、どこだ。

お粂　こゝぢや。この家ぢや。

三人開け放ちたる戸口より庭に入る。

角助　眞暗だ。誰もゐねえ。

お粂　幸八殿、市四郎殿。暗いのに燈火も點さず、どうしたといふ事ぢや。

總右衛門　人のゐぬこそ猶怪しい。それ、上つて家捜しせい。

三人二重に上り、提灯を振翳してあちこち檢分する。

角助　ゐねえ。誰もゐねえ。

總右衛門　奥の間に隱れたかも知れぬ。

總右衛門、角助奥へ行つたが、矢張り分らないで出て來る。

お粂　てつきりこゝと目星をつけて來たのに、あゝ、お嬢樣はどこへお出でなされたやら。

總右衛門　それといふのも、お身が餘計の橋渡しをしたからぢや。人もあらうに、豐後節語る藝人づれと・・・（齒嚙みをなして口惜しがる）

角助　（坐敷の隅々を搜す內、お妙がさつき落して行つた笄を取上げる）おや、こんな物が落ちてゐた。

お粂　（笄を調べて）こりやお妙樣が差添の笄・・・そんならやつぱりこゝへお出でなされて・・・

總右衛門　豐後掾と手に手を取つて落ちのびたに違ひはない。お乳母殿、どうしてくれる。お身さへお嬢樣と豐後掾との間を取持たずば、このやうな事にはなるまいもの。お邸へ戻つてこの親爺が、何と御主人に言譯せう。（お粂の胸ぐらを取つて小突き廻す）

角助　まあ〳〵、お待ちなせえまし。この場になつて、何と云つたつて追付きませんや。それより

や、ちつとも早くお嬢樣のお行方を——

角助頻りと總右衛門を宥める。その騷ぎの間に道具半廻しになる。

正面一杯の土塀。土塀の中程半月形に崩れ、そこから寺の卵塔場が見える。卵塔場の向うは本堂。本堂は月を背にして立つてゐるので、建築の殆ど全部が巨大な一のシルウエットをなしてゐる。豐後掾が住居の門口は、上手奥の方へ引込んでしまふ。冴えた月の表に雲をり〳〵かゝり、虫の聲する。

下手から市四郎油壺を下げて出で、その跡を追ふやうにしておそよ駈け出る。

おそよ　待たしやんせ。話がある。

市四郎　その話なら、明日ゆつくり聞く約束ではないか。燈火も點さず出て來た家がわしや氣懸りな。

おそよ　でも待遠うて、わしや明日まで待つてゐられぬのぢや。あの母さんがなあ——

市四郎　わかつた、わかつた。お前とわしを夫婦にしてやるといふのであらう。有難い母樣ぢや。

だからもつと孝行にせねばならぬと云うてゐるに。

おそよ　又そのやうなてんごうばかり。わしは本氣で云うてゐるのぢや。

市四郎　わしぢやとて本氣ぢや。でも今夜は赦してくれ。氣がせいてならぬ。

おそよ　（急に語氣が變り）よい、よい。もう聞いて貰はぬ。お前はわしが厭になつたのぢや。（泣き出す）

市四郎　これ、何を云ふ。身にも替へ難いいとしいお前が、何で厭になるものぞ。

おそよ　いゝやさうぢや。さうでなくばこのやうな嬉しい話を、お前が聞きともながる筈はない。

市四郎　聞き分けないも程にこそ依れ。わしは家に用事があるに——

おそよ　お前に捨てられたらわしはどうせう。どうせう。（市四郎に縋りついて泣く）

この時舞臺奥の方に當り、何か云ひ罵る人聲が入亂れて聞える。

市四郎　（聽耳を立て）何だらう、あの聲は。

おそよ　知らぬ、知らぬ。わしはお前に捨てられたのぢや。（猶も離れじと市四郎に縋りつく）

上手奥の戸口に人聲して、總右衛門、角助あはたゞしく走り出る。角助、市四郎に突き當る。市四郎倒れる。それを見向きもせず、角助、總右衛門揚幕へ駈け入る。同時に土塀の崩れた口から幸八が這ひ出る。

幸八　大變だ、大變だ、師匠が……

市四郎　師匠がどうしたといふのさ。お前さんの云ふ事は何だかさつぱり分らない。

幸八　師匠が米田のお孃樣と……（後は詞がつかへて、手眞似で喉を突く仕方）

市四郎　（同時に）えゝ——

おそよ

幸八　かうしちやゐられない。早く……早く……（ぐいぐい市四郎の手を引張つて、再び土塀の崩れた口へ入る）

おそよもそれに續かうとしたが、女の身の、足が慄へて容易に入れない。上手奥の門口からお粂が轉ぶやうに駈けて出る。

お粂　（おそよに取附き）お孃樣がお死になされた。おそよさん、わしやどうしたらよいであろ。

この時月に叢雲かゝり、舞臺急に薄暗くなる。夜の看經をなすと覺しく、本堂の方から突然、カ、カ、カ、カ、カンと小刻みの鉦の音が聞えて來る。お粂とおそよ、悚へかねて劇しく泣く。虫の音。

（幕）

宮古路豊後掾

郷川源ものがた

おこよ源三郎

人物

座光寺源三郎
繼母おいま
吉尾武右衛門
娘　松　江
乳母おとせ
小屋頭喜六
娘　おこよ
友達おせん
雪駄直し長五郎
小屋者三太
おこよ源三郎

同勘作
同助藏
同心倉持佐内
捕手多勢

第一幕　座光寺邸離坐敷

庭を前にした坐敷。縁側を取廻らし、それが鍵の手に折れて、上手奥へ（母屋の方へ）長廊下となりて通ずる。坐敷の正面は床の間、違棚、襖口。（襖口の向うは納戸になりゐる。）廊下から坐敷に入らうとする處に戸を立てる。衣桁に華美な女の衣服掛けあり。坐敷の下手は植込。袖垣。その向う廣庭。

安永九年七月の或日、午後の事。幕明くと主人源三郎の乳母おとせ、主人の愛妾おこよの衣服を疊んでゐる。すぐに廣庭の方から旗本吉尾武右衛門の娘松江、桔梗の切花を手

にし、庭下駄を鳴らして出て來る。

松江　よい花を目つけて來た。これを活けて見ようわいな。（坐敷に上る）

おとせ　お、、お美事な桔梗の花。どこにござりました。

松江　父上と叔母様と御談合の際に、わし一人でお庭を歩いてゐたら、泉水の岸にこれが咲いてゐた故――

おとせ　（不安さうに）してお父上と御後室様とは、どのやうな事を御談合でござりますな。

松江　そちはあちへと云はれた故に、ようは分らぬが、何ぢややらお二人して聲を潜めて――

おとせ　はて何でござりませう。氣懸りな事でござりますな。

松江　ともあれこの花を……（床の間の花瓶に花を活けかける）

おとせ　お部屋様が御病氣でお宿下り遊ばされてからは主ないお坐敷を飾る花もなく、いかう寂しうござりましたが、久し振に見る鮮かな秋草の色。殿様がお戻りになつて御覽遊ばしたら、どんなにかお喜びなされませう。

松江　（悲しさうに）何の源三郎様がお喜びなされう。入らぬ事をする女子ぢやと、そのまゝ庭にお捨てなさるに違ひない。

おとせ　お優しい殿様が、何でそんな事をなされませう。詰らぬ事を仰せられますな。

松江　でもばあや、わしは……わしは源三郎様に嫌はれてゐるのぢやもの。（そつと涙を拭く）

おとせ　それはお嬢様の取越苦勞。お前様のやうなお美しい、お心のお優しい方様を、どうして殿様がお嫌ひなされう。もう〳〵そのやうな事を考へるのはやめになされませ。

松江　いゝや、源三郎様はどうでもわしを嫌うておいでなさる。それでなくば何でわしの顏を見るなり、「よう來た」との仰せもなく、ぷいとどこぞへ行つておしまひなされう。わしを見るのが厭なからぢや。わしとは顏も合すまい、口も聞くまいと思うてお出でなさるからぢや。

おとせ　お嬢様……

松江　源三郎様と叔母様とはなさぬ仲の親子同志。常から氣の合はぬその繼母の緣に繫がるわし故に、そんなにまで憎いのか。わしが心のどのやうなかは、ばあやだつてよう知つてゐやるのに

――

おとせ　殿様とて情を知らぬお方ではござりませぬ。人一倍强い情がおありなさればこそ今のお部屋様とも……（云ひかけて語氣を變へ）お心を丈夫にお持ちなされませ。わたくしも及ばずながらお力になりませう。思ひ詰めた人の一心、通ずる時の來ない筈はござりませぬ。

松江　一體この部屋の主はどのやうな人か。それが聞きたい。

おとせ　お部屋様の事でござりますか。

松江　さうぢや。おこよといふ人の事ぢや。顏だけはこれまでにも一二度見たなれど、向うで身を避けるやうにしてゐるので、ついぞ口を聞いた事はない。

おとせ　（迷惑さうに）お部屋様の事なぞどうでもよいではござりませぬか。そのやうな事はやめにして、何か面白いお話を致しませう。

松江　いや〳〵、源三郎様があのやうにわしをお嫌ひなされるのも、このおこよ殿があるからぢや源三郎様のお心をそれ程にしてのけた女子がどのやうな人か、わしは知りたい。知らずにはゐられぬのぢや。そなたの眼に映つたまゝを、飾なく話してたも。

おとせ　御悧發な殿様が、あれ程までお打込み遊ばすお部屋様の事。御縹緻ばかりではござりませぬ、それはもうお氣質まで……

松江　えゝ。

おとせ　（はつと心づき）いえ〳〵、わたくしもよくは存じませぬ。お宿へお下りなさる前までは、毎日々々この離れにばかり引籠つて、人に面を見られるのを恐れてゐるやうなお部屋様、どうい

ふお方か細かい事の分りやう筈はございませぬ。いかにお氣に入りでも、お妾と申せば所詮は當坐の手活の花、いつかは捨てられる日が參ります。詰らぬ事をくよ〳〵遊ばして、お體でもお惡くなされたら、それこそ取返しがつかぬではございませぬか。な、な、もつと浮き〳〵なされませいな。

松江聲を呑んで泣く。おとせ頻りと慰める。

廊下口から當家の後室おいま（源三郎の繼母）、實兄吉尾武右衛門と共に足音高く入つて來る。

武右衛門　源三郎が戻らぬうちに、それ——（おいまと共につか〳〵納戸の襖を開けにかゝる）

おとせ　あれ、どこへお出でなされます。（袂を抑へる）

武右衛門　そち如きの知つた事か。離せ。

おとせ　いゝえ離しませぬ。お部屋樣がお歸りなさるまでは、殿樣のお吩付でこのお離れはわたくしがお預り申してをりまする。滅多な事をなされますな。

おいま　高が乳母の分際で、詞が過ぎる、控へてゐなさい。兄上のお出でなされたを幸ひ、これからおこよの素性を洗はうといふのぢや。

おとせ　お部屋樣の素性を洗はうとは。

おいま　はて知れた事。いかにおこよが身元を飾ねても、詞を濁して明らかな答をせぬ源三郎。今日こそ邪魔のないを幸ひ、部屋の主の持物殘らず調べて、うま〳〵と源三郎をたらしくさつたあの白狐の本體を見屆けうとてぢや。そこ退きや。

武右衛門　あの妾づらがあるばかりに、松江を源三郎の嫁にとの親同志の約束も履まず、いつまで他をじらしをる。わしは我慢がならぬのぢや。この上はおこよの素性を突留めた上一日も早くあの女を邸から追拂ひ、有無を云はせず源三郎を、松江と祝言させずには措かぬわい。

おとせ　それはわたくしとても願ふ事。したがその爲お部屋樣のお持物を、斷りもなしにお調べなさるといふのは、餘り亂暴ではございませぬか。後でその事が知れましたら、私が殿樣からどのやうなお叱りを受けようも知れませぬ。お願ひでございます。この事ばかりはどうぞお赦し下さいまし。

武右衛門　この期になつてもまだあの二人を庇ひだてするか。隱すだけ猶怪しい。源三郎が包むおこよの秘密、どうでも今日はあばいてくれるわ。

武右衛門おとせを突きのけて納戸の方へ行きかける。松江縋りつく。

松江　父上、お待ち下さりませ。

武右衛門　そちまでも留めるのか。

松江　ばあやの今の詞に無理はござりませぬ。部屋を捜す事だけはやめにして下さりませ。

武右衛門　それとても皆そちの身を思ふが故ぢや。父の心がそちには分らぬのか。

松江　勿體ない。何の疎に思ひませう。したが源三郎様がお戻りなされて、この場の様子をお聞きなされたら、おこよ殿の身の上嫉ましさに、わしが父上や叔母様に願うて部屋捜ししたとお疑りなされよう。さう思はれるのがわしは辛うございます。どうぞ源三郎様が戻つて見えるまでは、この部屋の一品にも手など掛けて下さりますな。お願ひでございます。のう、父上。叔母様。

おいま　そなたまでが乳母と同じやうに。ぐづ〳〵と手間取つて、源三郎が戻つては面倒な。さ、兄上。

おいま、武右衛門の手を引張るやうにして遂に納戸口を開けて入る。おとせ、松江、それを留めようとして續いて入る。半ば開かれた襖口から、箪笥その他の諸調度を引掻き廻す武右衛門兄妹の姿、それを止める松江等の姿がもつれ搦んで見える。「あれ、いけませぬ。」「うるさい、離さぬか。」「待つて下さりませ。」などいふ聲入亂れる。とゞ、おい

手文庫の底から一通の書狀を發見する。

おいま　おゝ、手紙ぢや。――おこよ殿まゐる、父より。（上書を讀み）兄上、こりや面白さうなものが……

武右衛門　おこよが親父からの手紙とあらば、あの女の素性が分らうも知れぬ。何にしても明るい處で。（おいまの手から手紙を奪ふやうにして、納戸を出て來る。）

松江　そればかりは父上。他の文見るのは罪深い業でございます。（武右衛門の手に縋る）

おいま　又しても入らざる口だて。控へてお出でと云ふに。（松江を突きのける）

武右衛門　（急がはしく手紙に眼を通して行く間に、自然と聲を出して讀むやうになる）我等如き卑しき者の血を享けしそもじが、千石取のお旗本の御寵愛を蒙り、お部屋様と立てらるゝ今の仕合せ、それにつけても身を慎み、構へて人より素性を怪しまるゝやうな行ひ致すまじく候……（讀みながら小首を傾け）我等如き卑しき者の血を享けし……素性を怪しまるゝやうな行ひ……

おいま　をかしな事が書いてございますな。どれ、見せて下さりませ。（手紙を受取つて默讀する。不安の表情）

武右衛門　かゝる書狀の現るゝ上は、急々怪しいおこよが素性。もつと細かに調べて見よう。（再び

納戸に入る）

おいまも手紙を帶の間に卷き納めて、同じく續く。

松江　今にもこゝへ源三郎樣がお戻りなされたら、どのやうな事にならうも知れぬ。ばあや、どうしたらよいであろ。

おとせ　お部屋をお搜し遊ばす事は、その位で措いて下さりませ。お願ひでございます。

下手庭先から座光寺源三郎、唯ならぬ面色、急ぎ足に出で來りつか〳〵と坐敷に上る。

松江　源三郎樣。（立ちかける）

源三郎　（松江には目もくれず）母上にも伯父上にもこは何たる御狼藉。誰が許してこのやうな事はなされます。（おいまの肩を摑んで納戸の外へ押し出す）

おいま　何しやる。母に對して慮外でありませうぞ。

源三郎　母上こそお慮外な。誰に限らずわたくしの許しを受けずして、漫りにこの離れへ來てはならぬと、日頃から堅く申渡してあるではございませぬか。母上とてもそれはよう御存じの筈。

武右衛門　それを知りつゝわしも共々部屋搜しするは、そちが秘し隱しにするおこよが素性をあばかん爲ぢや。

源三郎　なんと。

武右衛門　おこよが父は誰ぢや。それ聞かう。

源三郎　又しても同じお訊ね。今こそ浪々の身なれおこよが父は、元中國筋の藩中にて、立派な武士であつたと、先日も申上げたではございませぬか。

武右衛門　わしが聞かうとするのはおこよが父親の名ぢや。何の某（なにがし）の娘ぢやといふ事を、そちの口からはつきりと聞きたいのぢや。

源三郎　そればかりは仔細あつて、申上げる譯には參りませぬ。

おいま　云はれぬも道理。おとよは卑しい素性の女ぢやもの。

源三郎　何と仰せらるゝ。おこよの素性が卑しいといふ何ぞ證據でもございますか。

おいま　大きな口は聞かぬもの。しら〴〵しいその顏が、時の間にうろたへ惑ふを見るが笑止な。

源三郎　詐りを云はぬ者にうろたへのあらう筈はございませぬ。

おいま　まだ〳〵ぬけ〳〵とそのやうな事。どうぢや、これでもそなたはわし達を云ひくるめる積りか。（帶の間から先程の手紙を出し、源三郎の鼻先に突きつける）

源三郎　やゝ、この奇狀は――（さつと面色が變る）

武右衛門　（聲を勵まし）源三郎、そちにも眼があらばその中に記しある文字は讀めよう。「我等如き卑しき者の血を享けしそもじ」とは何の事ぢや。それでもそちはおこよの身性を正しいと云張るのか。

源三郎　（剛情に）何と仰しやつても、おこよは侍の娘に違ひございませぬ。

おいま　侍なら己が身を何で卑しい者と呼ばう。その文面から推して考へれば、おこよの父は決して浪人ではない。百姓……町人……いや〳〵、それよりもつと〳〵卑しい者の娘のやうにも思へますわい。

武右衛門　町人百姓でないとすれば穢多か非人。いかに性根が腐らうとも、よもやそのやうな者の娘にうつゝを抜かすそちでもあるまい。源三郎、どうぢや。

源三郎　（きつぱりと）若しおこよが穢多非人の娘でございましたら、伯父上には何となされます。

武右衛門　（ぎよつとして）ではあの女は……あの女は……

源三郎　はゝゝゝ、御安心なされませ。いかに無頼のわたくしでも、まだそのやうな無茶は致しませぬ。

武右衛門　（念に弱々しく）源三郎、わしが頼みぢや。どうぞ今日限りおこよと縁を切つてくれ。さうして松江と祝言の式を擧げてくれ。

おいま　兄上のやうにもない。二人が縁組は亡くなつた良人も承知の事、下手に出て頼むには及びませぬ。

武右衛門　（しく〳〵泣いてゐる松江の方をじつと見て）濡れ萎れた娘のあの樣子。あれを見るのが源三郎　（切なさうに）松江殿と縁組むのは厭でございます。

武右衛門　假にも伯父と名のつく者が、詞を低くして頼んでもか。

源三郎　源三郎が心の苦樂を分ける女は、おこよの外には誰もないと嫌てより思ひ極めてをります。

松江それを聞き、溜りかねておとせの膝によゝと泣き伏す。

武右衛門　娘、何吠える。――親同志が定めた許嫁の松江、卑しい妾づれに見替へられたで濟まされうか。憚りながら女一通りの事、缺くる所なく仕立て上げた筈の娘ぢや。松江のどこが氣に入らぬ。さ、それ聞かう。

源三郎　源三郎は己が妻を、己が心で選びまする。伯父上や母上の權柄づくにはなりませぬ。

おいま　なに、權柄づくぢやと。そなたの身を大事に思へばこそ、他がこのやうに心を碎いてゐるものを、餘りと云へば餘りの詞。

源三郎　生れて二十九年、今日が日まで、わたくしは獨りで寂しく生ひ立つて來ました。今更何のお構ひだて。これからの一生も、どうぞわたくしの氣儘にさせて下さりませ。

おいま　さうして素性も知れぬ女を邸に引込んで、われとわが手で家名に疵を附けうと云ふのか。ほんに腹は爭はれぬ。形ばかり立派に生ひ立つても、卑しい生みの母の血を引いて、類は友を呼ぶの喩の通り、おこよのやうな女が戀しいのか。

源三郎　母上。（きつとなる）

おとせ　（はら〳〵して）お願ひでございます。殿樣の生みの母樣――いえ、お袖樣の事を仰しやるだけは、どうぞお赦し下さりませ。あのお方のお名前を聞いただけでも、殿樣はすぐにくわつとなされます。

おいま　お袖は亡き夫の側女、名もない町人の娘であつたが、途中お手が附いて源三郎を生み落し果は亂心して淺ましい死ざまをした女子ぢや。その女子の噂をするに何の遠慮ぞ。

源三郎　（聲を慄はせ）その亂心も元を糺せば、母上、皆あなたより起つた事ぞ。

おとせ　あれ殿樣、それをこゝで仰せ遊ばしては――

おいま　聞捨てならぬ云懸り。わしがいつそなたの生みの母を亂心させた。お袖は勝手に氣が狂うたのぢや。

源三郎　いゝや、お袖の手から母上が乳離れもせぬわたくしを奪ひ上げ、その上酷たらしう邸から追出さずば、お袖は決してそのやうな非業な死はせなんだであらう。幼少のをりとてわたくしは覺えてをりませねど、母上がどれ程情なくお袖に當つたかは、こゝにをる乳母から敎へられて、わたくしはようく知つてをります。

おいま　おとせはお袖がそなたを懷胎すると間もなく、附人として置かれた女、身最眞は知れてある。そのやうな者の詞を眞に受けて聞くそなたこそ痴ぢや。わしには子供がなかつたのぢや。座光寺家の世繼を定める爲にあゝするより外はなかつたのぢや。

源三郎　それならそれで、もつと外にお袖を扱ふ道がございましたらう。父上の胤を宿すと共に、愈よ御寵愛が深くなつて行くお袖の身の上があなたは嫉ましかつたのぢや。それでわざ〳〵お袖の心に、母として堪へ難いやうな苦みを與へて、狂ひ死に死なせたのぢや。母上、この源三郎が

體内にはな、わたくしの名を呼び續けて息を引取つたといふお袖の血汐が流れてをりまするぞ。

おいま　わしを睨むその眼は何ぢや。そなたはわしを呪ふ氣か。わしはそなたの親ぢやぞ、不孝者。

源三郎、おいま、一瞬間劇しい敵意を以て睨み合ふ。

武右衛門　その上おこよのやうな者を引入れて、子でも出來なばそのまゝ座光寺家の後目に立てる心か。家の名折、血筋の穢れを何とする。

源三郎　源三郎が求むるは唯眞實な心の誠。その外には家も名もございませぬ。

武右衛門　おのれ、云はして置けば方圖の知れぬ世迷言。もう勘辨が――（刀の柄に手をかける）

おとせ　まあお待ち下さりませ。そのやうな手荒な事はなされずとも、話はいくらも出來ませう。

武右衛門　女色に溺れて母伯父の見境さへ失うた源三郎、口で云うたぐらゐで眼が醒めうや。たつた今手打にしてくれう。

おとせ　でもそれでは、松江樣が……

武右衛門　娘の愛も家名には替へられぬわ。性根の腐つた源三郎、このまゝ生け置かばいかなる事を仕出來さうも知れぬ。そこへ直れ。（抜きかける）

松江　あれ、父上。（その手に縋る）

武右衛門　こゝで成敗致すは、まだしも伯父の慈悲と知りをらぬか。えゝ、離せと申すに。

松江　いゝえ、離しませぬ。源三郎樣をお斬りなされてはわしも生きてはゐられませぬ。これ叔母樣、どうぞあなたも詞を添へて父上を留めて下さりませ。（おろ〳〵聲）

おいま　兄上のお怒りはお道理。家を家とも思はぬ源三郎なら、いつそこの場で刀の錆となつた方がましであらう。

松江　そのやうな事云はずと、なあ叔母樣。

おとせ　殿樣に若しもの事があつて御覽じませ、お嬢樣はどうおなり遊ばすか知れませぬ。今日の處はどうぞ勘忍遊ばして……これこの通り、乳母が手を合せてお願ひ申します。

おいま　それ程頼むなら、今日は我慢をしてやらぬ事もないが……

武右衛門　いや、ならぬ。かう云出したからにはどうでも源三郎の首打落し、その場を去らずわしも皺腹切るばかりぢや。

おいま　そのやうな事になつては實も蓋もございませぬ。二人があんなに留めるの故、今日の處はそれに面じて……

おいまも今は松江やおとせに力を協せ、無理に武右衛門を押し宥めて廊下口に入る。

おこよ源三郎

後には源三郎唯一人殘る。じつと沈思。日少しく傾きかける。源三郎何事か決する所あるが如く、つと立上つて沓脱に下りようとする。おとせ廊下口から戻つて來る。

おとせ　殿様、どこへお出で遊ばす。

源三郎　新しい運命を拓く爲に——

おとせ　(解しかねて)え、。

源三郎　いや、おこよの病氣見舞の爲——

おとせ　これはしたり。今の騒ぎのすぐ後に、それではあんまり當てつけがましい。そればかりはお止り下さりませ。(袂を控へる)

源三郎　何事も知らぬ顔。このまゝにやつてくれ。(柔らかに乳母の手を拂ひのける)

おとせ　とは云へ今のお話を伺ひましては……(再び袂を控へ)一體お部屋様は、どういふ素性の方でござりますか。

源三郎　え、、そちまで母上達と一緒になつて、この源三郎を苦しめようとか。

おとせ　左様ではござりませねど、先程の手紙のやうなものが出て參りましては、わたくしとても氣懸りでなりませぬ。何事も包み隠さずこのばあやにだけは話して下さる殿様が、お部屋様のお身の上となると厭なお顔をなされて、口を噤んでおしまひ遊ばすはどうした譯。云うてならぬ事なら誰にも口外は致しませぬ。どうぞこの乳母だけには打明けて下さりませ。さうしてお前様のお胸の苦みをわたくしにも分けさせて下さりませ。

源三郎　放埒無慙のこのわしをそれ程に思うてくれる志、嬉しうはあるなれど、こればかりはどうも明されぬ。

おとせ　これ程お願ひ申してもやつぱりお包みあるからは、それでは若しやお部屋様は、さつき伯父上様が仰しやつたやうに、忌はしい破多非人の……(云ひかけて思はず身顫ひし、あたりを見廻す)

源三郎　美しくとも所詮は道行く人の足に蹂み躪らるる野の花。その名もない花に我から迷うて云つたのは、身分、家柄、先祖の譽——さうした形のみ厳めしうて内容のない窮屈な境涯に、反抗せう爲のわざくれぢや。世の常の女に飽きた心をおこよの上に移して、濁つた盃の底から、親をも、家をも、世間をも、笑ひたいだけ笑はうとてぢや。

おとせ　まあ、お前様は——

源三郎　したがわしのその考は、おこよを知つて三年越、いつとはなしに變つてしまうた。わしは他への面當ばかりにあの女を寵愛してはゐられなくなつた。名もない野花の香のうちに、誠の戀

のこゝろを見出したのぢや。今のわしにはおこよは雪坐のもて遊びではない。おこよなしにはわしは一日も生きてゐられなくなつたのぢや。

おとせ　お部屋様の素性は存じませねど、御縁組は申すまでもなく日頃の起居振舞、いかなる大家のお嬢御と申上ぐるも恥かしからぬお方、おいとしうお思ひ遊ばすのもさら〳〵御無理とは存じませぬ。これが町人百姓の身ならこの乳母とて……したがお前様は千石取のお旗本の御主人、女々しい一時の心に引かれて、お家の浮沈に係はるやうな事があつてはなりませぬ。それでは第一、あの松江様がお可哀想でござります。お前様との御縁組を待ち暮してこゝ幾年、この頃めつきりお窶れなされたのがお前様のお目には留まりませぬか。

源三郎　――　此頃から松江廊下口に佇み、様子を聞いてゐる。

おとせ　（床の間の花を指さし）さつきもその花をお活けなさりながら、源三郎様がわしをお嫌ひなさるのは、なさぬ仲の母上と縁に繋がる身故にかと、きつう泣いてござりました。それ程に戀ひ慕ふ松江様が、お前様はどうして憎いのでござります。

源三郎　何の憎からう。あのやうな心の素直な娘が滅多にあらうとも思はれぬ。

おとせ　それならばなぜ奥様にはお持ちなされませぬ。

源三郎　松江は暖い彌生の日を浴びて長閑に咲いた緋桃の花。わしのやうな枝振ねぢけた木に寄添はして、一生を涙で送らせるに忍びぬわ。思うても見よ、わしが生ひ立。心からこの身を恨うてくれる生みの母には乳呑兒のうちに引離され、冷い眼、冷い心の中にかたくなに成人せしこの源三郎。身にも心にもその暗い陰のまつはらいでか。

おとせ　そのお心持も松江様はよう汲分けてお出でなされます。あの方様と夫婦におなりなされたら、お前様のお胸の曇りもやがてはからりと晴れませう。

源三郎　いや〳〵、源三郎は日陰の葛よ。心の狹い世間が、侮りの眼で見る者の娘と手を攜んで、我から暗い浮世の裏道を行かうよ。（沓脱に下りる）

おとせ　（慌てゝ袂に縋り）お待ち下さりませ。せめてそれなら、お部屋様のお處なりと……

源三郎　それ敎へたらこの身の破滅……

おとせ　えゝ。

源三郎　いや、何、まだ物心もつかぬ赤兒の時から永の年月、ばあやには苦勞ばかり掛けたな。（ぢつとおとせの顏を視つめて眼を瞬き）やがてはわしの心も知れう。堅固で暮せ。（袂を拂つてその

まゝ下手に駈け入る）

おとせ　待つて下さりませ、殿様。（源三郎の後を追はうとして縁端に躓とゝなる）

松江　（駈け出で）ばあや。（おとせに縋りつく）

おとせ　お嬢様。（松江の手を取る）

松江　わたしやどうせう。どうせうぞいな。（泣く）

（幕）

第二幕　小屋頭喜六内

土間を前にした茶の間。舊家らしきどつしりとした造。正面に奥への暖簾口。上手は土藏の白壁にて見切る。壁には幾数かの棚を釣り、上段に鼓、太鼓、下段に雪駄、爪革などをぎつしりと積み重ねる。鞣皮なども見える。下手に枝折門。四つ目垣に朝顔の蔓搦む。背景は本所小梅邊の田圃の景。

前幕と同じ日の夕刻。幕明くと小屋者三太、勘作、助藏、席を敷いた土間で仕上つた鼓、太鼓を片づけてゐる。暖簾の向うからしめやかに洩れて聞える爪彈の三味の音。

三太　もう蚊が出て來やがつた。早く片付けて行水でも使はうぢやねえか。

勘作　かう暑くつちや夜の來るのを待つばかりよ。今夜は土堤でもぶらついて、思ふさま川風に當るかな。――おや、奥でおつな音がするぞ。

助藏　おこよさんが彈いてるんだ。相變らずうめえもんだな。あの樣子ぢや今日は大分體の具合がいゝな。

三太　（聲を潜め）おこよさんと云や一體今までどこへ行つてゐたんだらう。ちらりと小耳に挾んだのぢや、何か妾奉公といふやうな事だつたが、この通り家には金はあるし、それに小屋頭が眼の中に入れないばかりにして可愛がつて來たおこよさん、何を好んで妾奉公になんかやらう。已やそんな筈はないと思ふんだ。

助藏　あの事ばかりはおいらにも一向見當がつかねえ。何でも打明けて話してくれる頭が、おこよさんの事となるとむづかしい顔をして向う向いちまふんだからな。

勘作　兎に角おこよさんのは唯の病氣ぢやねえぜ。さつきもおいらがあの土藏の横手を通ると、忍ぶやうにして泣いてる女の聲がするのよ。おやと思つて見ると、おこよさんが白壁の處に顔を當

てゝしく〳〵泣いてゐるぢやねえか。驚ろかしちや悪いと思つて、おいらそうつと戻つて來た。

三太　氣病みといふんだらう。心配事があるんだな。

仲間の娘おせん、嵩張つた風呂敷包を下げて門口から入つて來る。この間に奥の三味の音やむ。

おせん　今日は。よう御精が出やしやんすな。

助藏　おせんさんか。まあお掛け。

おせん　遲うなつて濟まなんだ。（風呂敷包を解いて雪駄の束を取出し）はい十五足、調べて受取つて下さんせ。

三太　（算へて見て）十五足、確にあるよ。帳面は——

おせん　うつかりして忘れて來ました。この次の時一緒に附けて貰ひませう。ぢや、左樣なら。（行きかける）

勘作　そんなにせか〳〵するなよ。ちやうど仕事を仕舞つた處だ。お茶でもいれよう。話してお出で。

おせん　でも、家に仕掛けた用がござんすもの。

三太　いくら嫁入の口が極つたからつて、さう急にそつけなくするものぢやねえぜ。可哀想に、こゝにや獨り者が三人も控へてゐるんだ。

おせん　あれ、知らぬわいな。（赤くなつて前垂で顔を隠す）

三太　隠したつてこつちはその嫁入先まで、ちやんと先刻御承知なんだ。おせんさんお目出度う。（顔を覗き込む）

勘作　おいらもお目出度うと云ふよ。

助藏　一體幾つ寢たら新公の處へ行くんだい。さぞ待ち遠しからうな。

おせん　知らぬ、知らぬ、知りませぬわいな。

おせん愈々赤くなつて逃げ廻る。三人面白がつて追廻す。

それを聞きつけて暖簾口から喜六娘おこよ出て來る。病に窶れし凄艶なる風姿。髪稍亂れる。舞臺暗くなりかける。

おこよ　何かと思へばおせんさんをからかふて。もういゝ加減にしたがよい。

おせん　おゝ、おこよさん。（懐しさに駆け寄つて）お前はいつから家に戻つてぢや。

おこよ　つい十日餘り前にな。

おせん　それにしてもいかう顔に窶れが見える。氣合でも悪いかえ。

おこよ　いゝえ、ほんの少しばかり。（三人の方を見て）お前達は風呂場へ行つて、早う汗を流すがよい。

三人　へい〳〵。（そこらを片付けて、土藏の側面を上手に入る）

おせん　（上へあがつて）十日も前から歸つてゐながら、なぜ知らしてはくれなんだ。少さい時からあれ程仲ようして來たわたしの事を、お前はもう忘れてか。

おこよ　さうではなけれど、わたしも今では人目を忍ぶ……（云ひかけて心づき）それよりもおせんさん、お前のお目出度い話を聞かしておくれ。

おせん　あれ、お前までがそんな事を……（頰を染めて、しなをする）

おこよ　新さんとは思ひ思はれた仲。わたしはお前が羨ましい。

おせん　お前こそ此頃は大層仕合せな身分にならしやんしたと云ふではないか。わたしこそお前にあやかりたいものぢや。

おこよ　何のわたしが仕合せぞ。世の中にわたし程悲しい身はないと思うてゐる。

おせん　お前の云ふ事は謎のやうで、わたしにはちつとも分らない。もそつとはつきり云うて下さんせ。

おこよ　幼馴染のお前に久し振で會ひながら、胸にある苦みを打割つて聞いて貰ふ事さへならぬ切なさ。何とした因果な身の上であろ。（差し俯く）

おせん　あれ、お前泣いてぢやな。（びつくりして寄り添ふ）

おこよ　いゝえ、わたしや泣きはせぬ……泣きはせぬ……（涙を隱す）

おせん　わたしが云過ぎたら勘忍して下さんせ。な、な。

おせん心配しておこよを慰めろ。この間に舞臺人顔も定かならぬ程に暗くなる。

暖簾口から助藏、切籠燈籠に灯を點して持ち來り、無言で檐端に吊して去る。

おせん　（心づき）おゝ、いつの間にか灯がついた。それではわたしは歸るぞえ。

おこよ　まあよいではないか。折角久し振で顔見たのに。

おせん　でも、家では母さんが心配してゐるであろ。お前が歸つてゐる事が分つたからは、これから毎日でも遊びに來よう程に。（立ちかける）

おこよ　そんならどうでも歸るのかえ。

おせん　何ぢやなあ、そのやうな悲しい顔をして。わたしまで歸りともなうなるではないか。

おこよ　でもわたしは……これぎり何だか、お前に會はれないやうな氣がして……（語尾が悲しげに消える）

おせん　ほゝゝゝ、阿呆らしい、何ぢやいな。明日にも遊びに來ると云ふてゐるに。

おこよ　その明日がわたしには……

おせん　そんな事思ふのも病氣のせいぢや。明日は朝のうちからきつと訪ねて來よう程に、待つてゐて下さんせ。

おこよ　わたしや何ぢややら歸しともない。

おせん　えゝ、氣の弱いおこよさん、はつきりとさんせいな。

おせんも唯ならぬおこよの樣子を心にかけながら、相手を勵ます爲にわざと快活な外貌を作つて、そのまゝ門口から歸り行く。おこよ緣端に立つてじつとその後影を見送る。

暖簾口からおこよの父親喜六出て來る。

喜六　そんな處に何してぢや……これ、おこよ。（後から背を叩く）

おこよ　おゝ、父さん。（我に歸る）

喜六　何をうつとりと。おせん坊が來てゐたといふが、もう歸つたのか。

おこよ　（思入つた語氣で）人間は分相應な處に緣付くものでござんすな。

喜六　突然にをかしな事を云ふの。

おこよ　でもわたしは、身に過ぎたお方の御寵愛を受けたばつかりに、おせんさんなどの知らぬ苦みをせにやならぬ。包めど穗に出る心の喜び、いそ〳〵歸つて行つたあの人が羨ましい。

喜六　何をいふぞ、今夜に限つて。この世の中にわたし程仕合せな者があらうかと、つい此間まで云つてゐたではないか。それとも何か殿樣に對して、物足らぬ事でも出來たのか。

おこよ　勿體ない、そのやうな事口にすらだけでも罰が當ります。殿樣のお爲なら、わたしや今夜に死んでも構はぬと思ふてゐる程ぢや。宿下りして十日餘り、夜毎の夢に立つお姿は、父さん誰ぢやと思はしやんす。

喜六　それ程殿樣が戀しくば、一日も早く本復して、お邸へ歸れるやう養生したらよいではないか。

おこよ　わたしの病氣は、生きてある限り、所詮直りは致しませぬ。

喜六　又しても詰らぬ事ばかり……

おこよ　あゝ、ならう事ならこのまゝどこぞへ行つてしまひたい。人の顏も見えず、聲も聞えぬ山

の中にでも身を隠してしまひたい。わたしといふ者があるばかりに、殿様もどんなにお苦みを遊ばすか知れぬ。

喜六　これさ、おこよ。お前が座光寺様のお目に留まつて、お部屋様にまで取立てられた事を、わしはどんなに嬉しく思ふてゐるだらう。夢にも叶はぬ望が遂げたと、本當に鬼の首を取つたやうに喜んでゐるのぢや。頼むからそんな悲しさうな顔はしないでくれ。

おこよ　でも……でもわたしといふ者がゐるばかりに、お邸にはいつも波風が絶えぬのぢやもの。わたしの爲に、末には殿様のお身に係はるやうな事が起りはせぬかと思ふと……いつそ……いつそ一思ひに死んでしまひたい。

喜六　ば、ば、馬鹿な事を。冗談にも死ぬるなどと云つてくれるな。女房に先立たれて男親の手一つ、お前の成人するのばかりを樂みに、わしはこの年まで生きて來たのぢや。その可愛い一粒種のお前を何でよそのお邸になど手離してやりたからう。ならう事ならこの家へ婿を取つて、夫婦仲よう暮すのを傍に見てゐて樂みたい。したがわしは非人の身。家倉はあつても、小屋頭とあがめられても、婿を取るとなればやつぱり仲間のうちから貰はにやならぬ。それがわしは心外なのぢや。親の口から云ふも異なものなれど、縹緻なら風俗なら、讀み書き遊藝何一つ揃はぬ處なく

仕立て上げたそなた。あゝ、これが常なみの家に生れた娘ならと、わしはお前がふびんでならなかつたのぢや。どんな事をしてもお前だけは、この喜六の體はどうならうともお前だけは、鳥毛物のやうに辱しめられる非人の女房にはすまいと、わしは心に誓つたのぢや。その望が叶うてお前は立派なお旗本のお部屋様。そりやお部屋と云へば御本妻ではない。したがお前の話では、お殿様はお前といふ者があるばかりに、奥方をおきめ遊ばす事さへ不承知ぢやといふではないか。すればお前は御本妻も同然ぢや。手もなくお旗本の奥方様ぢや。悲みも、苦みも、この仕合せには替へられぬ。泣くな、おこよ。お前の涙を見るのが、何よりわしには辛いのぢや。(顔を反向ける)

おこよ　父様、勘忍して。もう何にも云ひませぬ。(喜六の膝に顔を埋めて泣く)

娘を抱寄せて喜六も泣く。

下手から雪駄直し長五郎。薄ぎたないなりをして出で來り、足音を盗むやうにして門の外に立つ。

長五郎　御免下せえまし。

おこよ　人ぢや。(慌えたやうに立上る)

おこよ源三郎

喜六　誰も來やせぬ。空耳ぢゃよ。

おこよ　でも、門口で聲が……

長五郎　御免下せえまし。（扉を開けてのそ〳〵入つて來る）

おこよ素早く暖簾の蔭に隠れる。

喜六　（庭の方を見て）誰かと思へば長五郎か。久しく來なかつたがどうした。（胡散らしく相手の樣子に注意する）

長五郎　へえ、暫く旅に出てゐたもんですから。まあ御免なすつておくんなせえ。（構はず上にあがる）

喜六　さうして、こんなに暗くなつてからやつて來たのは、何か急用でも出來たのか。

長五郎　べえ、急用も急用、たつた今入用の事がありますんでね。

喜六　入用とは。

長五郎　金で。

喜六　なに、金。

長五郎　すつかり負けちやつて、御覽の通りのざまなんです。（衣裝を示し）たんとの事は申しませ

ん。五兩ばかりどうかしておくんなせえ。

喜六　金の話なら御免ぢらう。

長五郎　何ですつて。

喜六　手前の無心にも聞き飽きた。どこまで行つたら際限があるのぢや。

長五郎　だからたんとは入らねえと云つてまさあ。今戸の賭場で裸にむかれてこのていたらく。頭に助けて貰はなけりや、明日から商買物の雪駄の荷も擔いで歩けねえつて始末でさ。

喜六　負けたのはそつちの勝手よ。その尻拭ひを他の處へ持込んで來る間抜けもないものぢや。

長五郎　それぢやどうでも、金は貸せねえと云ふんだね。

喜六　どこか他樣を當つて見たらいゝだらう。

長五郎　へん、恩を忘れるのも大抵にするがいゝや。三年前に已に云つた調を忘れたのか。

喜六　座光寺樣とおこよとの橋渡しの禮なら、し過ぎる程にしてある筈だ。始めの時が百兩。それから五兩三兩と、幾度他をいたぶるのぢや。

長五郎　非人の娘がお旗本のお部屋樣。どう考へたつて嘘のやうな話だ。その嘘を眞事にしたのは一體誰のお蔭だと思ふ。おい、誰のお蔭と思ふんだよ。いくらあの放埒な殿樣が、吾妻橋の上で

鳥追姿のおこよさんを見染めたつて、襦の袂に已が雪駄を直してゐなかつた日にや、かうした仕合せは降つて來なかつたんだ。だからあの時にや、お前はその白髮頭を已の前に下けて、「長五郎、お前は娘の助けの神だ。一生恩に着るよ」と禮を云つたぢやねえか。それだのに今となつて、僅かの目腐れ金を出し惜しみやがつて……

喜六　いや、わしは金が惜しいのではない。他の弱身に附入る手前の根性が憎いのぢや。

長五郎　何だと。（きつとなる）

この間に源三郎、編笠に面を隠して下手より出で來り、門外に立つて樣子を聞く。

喜六　ぐづ〳〵云はずにとつと〻歸れ。顏を見るさへ胸が悪いわ。

長五郎　ようし、歸るとも。その代りこの返報には、どうするか覺えてゐろ。（土間に下りて行きかける）

おこよ　嗟嬬口から駈け出る。

おこよ　あれ、待つて。（留める）

長五郎　おこよさん、お前家に歸つてたのか。

喜六　お前の出る場處でない。あつちへ行つてゐなさい。（おこよを押しやらうとする）

おこよ　でも、この人を怒らしては……（帶の間から金包を出し）これを持つて、何にも云はずに歸つておくれ。（長五郎に渡す）

長五郎　お前さんがくれるんですかい。（開いて見て）小判で五枚……へ〻、おこよさんの方がよつ程物分りがい〻や。かうと知つたらおいらだつて何も、大きな聲なんかするんぢやなかつたが、あんまり父さんが分らねえ事を云ふから……ぢや、これは貰つておきますよ。（金包を懷に仕舞ひかける）

この間に源三郎、音せぬやうに門内に入來り、默つて長五郎の背後に佇んでゐたが、この時つと手を伸べて横合から金包を奪ひ取る。

長五郎　（びつくりして）おや、此奴が……他が貰つた物を横合から出て何しやがる。（源三郎の胸ぐらを取る）

源三郎　弱みに附込む淺ましい心を、この源三郎が懲らさう爲ぢや。（編笠を脱ぐ）

長五郎　や〻、あなたは。（さすがにだじ〳〵となる）

おこよ　殿樣。（駈け寄る）

喜六　見苦しいあばらや へ不意の御入來。さ、どうぞあちらへ。（慌てふためいて、奥へ案内しよう

と先に立つて暖簾口へ入る)

源三郎　委細の樣子はあれにて聞いた。長五郎、そんなにして迄、そちやこの我々を苦しめたいのか。

長五郎　滅相な。殿樣の御武運長久、又おこよさんとのお仲の睦ましい事こそお祈り申せ、何のあなた……そんな事云はずにそのお金は、どうか、どうかお返しなすつて。(手を出す)

おこよ　あれ、あのやうに長五郎もお願ひ申すのでございますから。

源三郎　ならぬ。此奴の云ふ事ばかり聞いてゐたら、愈々附上つて、仕舞には何を云出さうも知れぬ。この金やる事罷りならぬ。

長五郎　でも、それはおこよさんが……

源三郎　えゝ、ならぬと申せばならぬわい。(金包を坐敷の奥の方へ放る)

長五郎それを奪はうとして坐敷へ上りかける。源三郎劇しくそれを突きのける。

長五郎　(きつとなつて源三郎を睨み)殿樣、お前さんまでこんな事をなさるとは、あんまり非道ぢやごぜえませんか。

源三郎　何が非道。僅な橋渡しの骨折を盾に着て、際限もなく附纏ふ汝こそ非道ぢや。

長五郎　僅な骨折とは口から出まかせな。御自分の今の境涯を、あなたは何と思召す。あなたとおこよさんとの仲を、一言でもわつしがこの口から外へ出して御覽なせえ、お家は改易、殿樣は切腹物と極つてるんですぜ。

源三郎　それ程の事知らぬわしか。嚇しは措いてくれ。わしもおこよも、何遂その手を喰つてゐるか知れぬのぢや。

長五郎　いゝや、嚇しぢやねえ。そつちがさういふ氣なら、こつちにも覺悟があるんでさ。(行きかける)

源三郎　待て。散々他をいたぶつた果にその暴言。いかに下人の汝でも少しは人の道を辨へよ。

長五郎　人交りもならぬ非人のおいらを捉まへて何が人の道。へん、糞でも喰らへ。(行きかける)

源三郎　もう勘辨が……(矢庭に刀を拔いて長五郎に斬りつける)

おこよ　あれ、あぶない。(源三郎を背後から押へる)

長五郎　うぬ、斬りやがつたな。(斬りつけられた左の肘を押へて逃け廻る)

おこよ　あれ、誰か來て……父さあん、父さあん——(呼ばはりつゝ、一所懸命に源三郎を留める)

源三郎、おこよを振拂つて長五郎を追ひ廻す。奥から喜六、續いて三太、勘作、助藏駈

け出る。

喜六　おゝ、こりやまあ殿様――

源三郎　了簡のならぬ奴。留めだて致すな。

喜六　いえ〳〵、そんな事をなされては――

皆々一所懸命に源三郎を取抑へる。その隙に長五郎、命から〳〵門外へ逃げ出す。

長五郎　よくもひどい目に會はしやがつたな。この上は出る處へ出て洗ひ浚ひぶちまけ、家中殘らず珠數繋ぎ、縄目の憂目を見せてやるから待つてろ。（すた〳〵下手へ入る）

源三郎　そち達か留めずば、眞二つにしてくれたものを……

喜六　畜けら同然の長五郎、あのやうな者をお斬りなされてはお刀の穢れでございます。（漸く源三郎を留めたが、三太等のゐるに心づき）それからお前達は、今夜は客席へでも行つて遊んで來るがよい。これは三人分の小使ぢや。（紙入から幾らかの金を摑んで三太に渡す）

三太　へえ〳〵、こりや有難うございます。

勘作　ぢや頭、行つて參りますぜ。

喜六　うむ、ゆつくり遊んで來るがよい。――それから、今夜の事は内密にな。

助藏　心得てますよ。ぢやあ行つて參ります。

三人源三郎の方に一禮して門を出て行く。

おこよ　それにしても長五郎の、逃げて行きしなに云つた詞が氣懸りな。あゝ、ひよんな事にならねばよいが。

源三郎　訴人すれば彼奴も同罪。まさかにそのやうな無茶もすまい。

おこよ　でも、口惜し紛れといふ事がございますもの。

喜六　それよりもお殿様、何のお知らせもなく夜に入つて、急にお入り遊ばされたには譯がございませう。何ぞお邸に變つた事でも起りましたかな。

源三郎　（きつぱりと）喜六、わしはそちの仲間へ入れて貰ひに來たのぢや。

喜六　何と仰せ遊ばす。

源三郎　わしはつく〴〵武士といふものが厭になつた。これ、この通り、大小を捨てゝ頼む。今からわしをそちの仲間に入れてくれ。（腰に帶びた大小をがらりと喜六の前に置く）

喜六　（己が耳を信じ得ざるもの〻如く）それではお殿様は、今夜から非人の仲間に入りたいと仰せられますか。

源三郎　さうぢや。さうして誰に憚る事もなくおこよと樂しく暮したいのぢや。

喜六　（きつぱりと）なりませぬ。

源三郎　なに、ならぬとは。

喜六　恐れながら、そのやうな事をお考へ遊ばすさへ、わたくしには正氣の沙汰とは存ぜられませぬ。思うても御覽じませ。あなた樣は人の中でも人の上にお立ち遊ばすお旗本の御主人。われらは人間の形はしながらも、明るい顏して人なかへも出られぬ淺ましい身の上。そのわれらの中へ、何を好んで尊いお身をお沈めなさる事がござりませう。

源三郎　それは世の誰もが口にする詞。そのやうな常一通りの詞は、今のわしには何の徹へもなくなつたのぢや。

喜六　數ならぬ娘をそれ程までに思うて下さるお志、お禮の申上げやうもござりませぬ。したが、そのお志を有難く思へば思ふ程、娘の爲にあなた樣をまで、犬畜生の道にお落し申すに忍びませぬ。（はら〳〵と落涙）

源三郎　（じつと喜六の樣子を見て）それでは聞くが、そちや心から自分の身を、犬畜生にも劣ると思ひをるか。そちもおこよも、世間の者から足蹴にされ、蹂み躙られ、散々な辱めを受けても、一言の返しもなさぬやうな穢れはてた心を持つた者と思ひをるか。

喜六　殿樣、それはあんまりお情ない。いかに非人のわれ〳〵でも、心まで腐つてはをりませぬ。

源三郎　それ見よ。穢多非人をば血肉まで穢れた者のやうに卑むのは、因れた世間の偏見ぢや。心潔ければ身も亦潔い。身分よ家柄よと、形ばかり厳めしい武士の家に詐りが多くて、世間から卑しめられ、爪彈きされる非人の世界に、わしは却つて美しい誠を見出したのぢや。虚僞の世界には源三郎はもう飽き果てた。これからのわしは唯眞實に生きたい。思ひ出多い邸を捨てゝ、わしが今夜こゝへ來たのはその爲ぢや。これ程に云うてもそちはまだ、わしを仲間に迎へてはくれぬのか。

喜六　（じつと頭を垂れて聞いてゐたが感激の涙と共に）殿樣、よう仰しやつて下さりましたあなた樣の今のお詞で、この親爺までが眼の醒めたやうな氣が致します。あゝ今夜は何といふ嬉しい、胸の晴れ〳〵する……（と云ひながらも胸塞がり）この上はお詞に甘へ、わたくしの方からお願ひ申して仲間へ入つて頂きませう。

源三郎　では、聞屆けてくれるか。喜六忝い。（頭を下げ）何はともあれ、改めての身祝ひに今宵は一獻……（心地よげにおこよの方を見る）

喜六　（急に顔を曇らし）いや、さうしてはをられますまい。長五郎の事もございますれば、これからすぐにおこよと二人で、お身をお隠しなされませ。

源三郎　高が長五郎風情。何の恐るゝ事があらうぞ。

喜六　でも、用心に越した事はございませぬ。たとへ長五郎の訴人に依つて、お役人がこゝへ向はうとも、お殿様さへお出で遊ばさずばわたくしは安心。幸ひ下總の八幡在に、仲間の頭分で俠氣の者がございます。唯今手紙を書きます故、當分そこにお身を隠し、をりを見て又お戻りなされませ。

源三郎　うむ、新しい生涯の門出に誓しの旅寝も一興であらう。

喜六　それでは奥で出立の御用意。娘も來い。（急ぎ暖簾口へ入る）

源三郎もそれに續かうとする。その時まで聲を呑んで泣いてゐたおこよ、つと顔を上げてその袂を控へる。

おこよ　待つて下さりませ。

源三郎　話なら道々聞かう。そちも早う。（手を取る）

おこよ　いや〳〵、わたしや八幡へは參りませぬ。

源三郎　なんと。

おこよ　殿様、お願ひでございます。わたし達の仲間へお入り遊ばす事はお止まり下さりませ。

源三郎　この場に臨んで何を馬鹿な。喜六が心配してぢや。早う立たう。

おこよ　どう考へてもわたしのやうな者の爲に、殿様のお名まで汚すのが堪へられませぬ。お願ひでございます。どうぞ今から、すぐにお邸へお歸り下さいまし。さうさへ遊ばせば、御後室様もお疑りはなされますまい。

源三郎　わしがそち達の仲間に入るのは、そちの爲よりわし自身の爲にぢや。それ程の事が分らぬのか。

おこよ　たつて殿様がお心を通すと仰しやれば、わたしは……わたしは……もう生きてはゐられませぬ。（泣く）

源三郎　はゝゝゝ、氣の弱い事を。嚴めしう構へた武家邸の内のみが源三郎の世界か。一管の尺八一挺の破三味線、行くへ定めぬ漂泊の旅にゐても、二人が誠の變らぬ限り、美妙な戀の音樂が續くわ。おこよ、支度せう。（奥へ入る）

おこよじつとその方を見送つて泣く。奥で「おこよ、おこよ」と呼ぶ喜六の聲。おこよは

つと立上る。

おこよ　殿様のお心を翻へすには、死ぬより外に道はない。殿様……父様……先立つ罪はあの世でお詫び……

おこよ素足のまゝ土間に下りて名残の惜しまれる形。軈て思ひ切つて門外へ出る。本鈞鐘を打ち込む。その鐘の音の間を、魂の抜けた人のやうな足どりでおこよ揚幕へ入る。

暫くして下手から同心倉持佐内、捕手多勢を引連れ出て來る。

捕手の一部は門外に忍び、他は家の背後に廻る。

暖簾口から喜六が出て來る。

喜六　おこよ、おこよ……おこよはどこへ行つた。手紙も書けたに、殿様のお支度のお手傳ひもせず、どうしたといふのぢや。おや、ゐないぞ。どこへ行つたのぢや。おこよやあい。

娘の姿が見えないので喜六次第に不安を加へ、土間に下りて門の方へ行き、扉を開けにかゝる。捕手ばら〳〵と闖入する。

捕手　御用だ。

喜六　あつ。（驚いて家の中へ逃げ込む。源三郎に告げようとの心）

同時に家具の崩れるやうな物音が奥でがら〴〵として、暖簾口から源三郎多勢の捕手を突きのけ跳ねのけ駈け出る。佐内その後に續く。

源三郎　狼籍なり方々。この座光寺を何とめさるる。

佐内　狼籍呼ばはり片腹痛い。長五郎の訴人によつて、この家の娘おこよとの一條明白に相成る上は、武家の掟に背きし咎人、尋常に奉行所まで同道致されよ。

源三郎　新に開くる今宵の門出。おめ〳〵御身達の自由にならうや。捕れるものなら捕つて見やれ。

佐内　是非に及ばぬ。それ者共。

捕手一齊に打つてかゝる。これから入亂れて格闘になる。（源三郎の武士らしき手練と、喜六の武術を知らぬ無鐵砲な抵抗とを、際立たして見すべし。）とゞ、喜六は縄をかけられる。源三郎それに心が引かれて手が鈍る。

喜六　こゝ構はずと早く逃げて……おこよを……おこよを……（縛られながら氣もそゞろ）

源三郎　喜六、さらばぢや。

源三郎後に心は殘しつゝも、意を決して捕手の中を抜けつ潜りつ、一散に揚幕へ駈け込む。捕手續く。

おこよ源三郎

（道具その間に廻る）

同　裏田圃青池

平舞臺一面に草深き土手。その向う水澱んだ青池。池を掩ふやうにして土手の上下に樹木鬱蒼と茂る。池の對岸は寺島田圃。月暗し。

源三郎拔刀、揚幕から捕手に追はれて駈け出る。土手に登らうとする後ろから捕手かゝる。源三郎刀を振つて追拂ふ。捕手そのけんまくに恐れて下手へ逃込む。

源三郎急ぎ土手に駈け上つたが、何物にか躓いてばつたり倒れる。同時に足元に一枚の差櫛の落ちてゐるのを發見する。その時月の面から雲霽れる。その明るい月光にかざしてじつと櫛を凝視する。さてはといふ面持で、池の上へ差出た木の枝に攀まつてじつと水面を透し眺める。やがて何物をか見出したやうにわな〳〵と身を顫はす。

源三郎　おゝ、岸邊の芦間に月を浴びて浮ぶはまさしくおこよの骸……さてはわしを諫めうばかりに、溺れて死んだか。（聲となる）

一旦逃げ込みし捕手ばら〳〵と打つて出る。

源三郎　おこよ入水の上からは、生きて甲斐なき源三郎、いざこの儘に。（刀を捨てて自ら兩手を後ろに廻す）

捕手立ちかゝつて縄をかけようとする。

同心倉持下手から走り出る。

佐内　心底見えた。この上は縄かくるに及ばず。われら同道奉行所へ――

源三郎　御芳志忝う存ずる。さらば方々。（立ちかける）

月又暗くなる。上手から武右衛門、松江、息を切らして駈け出る。

松江　源三郎様……（縋りつく）

源三郎　おゝ、松江殿か。（思はず手を取らうとしてはつと心づき）今は罪を得て囚れの身。近寄りめさるな。

武右衛門　委細の様子は大方知つた。このやうな事にさせまい爲、伯父が心を盡したものを……

松江　あなたに別れてこれから先、何樂みに生きて行かうぞ。わしも一緒に牢屋まで……

源三郎　情を知らぬ源三郎を恨みもせずにその詞、膽に銘じて忝い。さりながら、生きながらへても、所詮御身の心に添ふ事ならぬこのわしぢや。諦めて下されい。

武右衞門　千言萬語も今は遲い。この上はせめて武士の家に生れし者らしく、尋常にお仕置を……

（聲を曇らして顏そむける）

この時芦の茂みから螢一匹すうと飛び立つ。

松江　おゝ、螢が……まるで人魂か何ぞのやうに……

源三郎　あれがおこよの魂か。（じつと螢の行くへを目送し）わしも追付け後から行かうぞ。

螢火消える。

佐内眼くばせにて立てと示す。源三郎立ちかけて又水面に心引かるゝ思入れ。松江聲を立てゝ泣き伏す。

（幕）

坂崎出羽

人物

坂崎出羽守成正
弟小七郎
側室松波
家老牧野勘兵衛
柳生但馬守宗矩
村越左門
本庄五助
倉田傳内
渡邊半左衛門
櫻元梅野

同　楓

醫師　寺澤了齋

その他近侍の士、足輕、小姓、腰元など多勢

第一幕　石州津和野城内裏門口

平舞臺、上手寄に城門を内側より見たる光景。門扉には門を鎖す。左右に城壁連なる。上手に高き石垣。下手に土手。その頂に數本の松樹あり、城壁の上に蔽ふやうに枝を伸ばす。

元和二年九月下旬の或深更の事。幕明くと城主出羽守の家臣村越左門、本庄五助、野梅、草鞋掛、覆面にて足輕多勢を指揮してゐる。足輕は孤にて包みし鐵砲を持つ。

左門　（四邊へ忍ぶやうにして足輕等に）豫て申渡せし通り、今度の御出立は家中一統の者にさへ内密の御企。道中すがらも心を用ひて、構へて人目に立たぬやうに致さうぞ。

五助　若し、あれこそ坂崎出羽守が手の者、隊伍を組んでいづくに行くなどと疑はれなば、その事忽ち江戸に傳はり、殿が必死の御企も水の泡となる。

左門　我等が目ざすは伊勢の桑名ぢやゝ桑名に達するまではいかなる困難も唯忍べ。

足輕一　殿樣のお見出しにあづかり、卑しき身ながら重きお役目仰せつかりしわれらが面目。

足輕二　固より一命は始めから捨てる覺悟でをりまする。

五助　よくぞ申せし。最早子の刻、殿の御用意も調うたであらう。それ、見咎められぬうちこの裏門より……

足輕三　心得ました。

足輕二三人、城門の門を抜きにかゝる。家老牧野勘兵衛下手より駈け出る。

勘兵衛　待て。誰が許して開門するぞ（足輕等を突きのける）

左門　（ぎよつとして）御家老にはどうして今頃……

勘兵衛　それはこの方よりこそ聞くべき事。草木も眠る眞夜中に、多勢の者人知れず城を忍び出でんとは奇怪千萬。仔細を語りやれ。

左門　それ明したら事が破れ申す。何事も知らぬ振にて……

勘兵衛　いゝや、ならぬ。假にも坂崎家の老臣たる牧野勘兵衛、掟に背きし今夜のしだらを、知らぬ顔で見逃されうや。云聞き立たば好し、さもなくば、門外へ一歩も出る事罷りならぬ。

五助　ぢやと申して今に及び、折角の企中止されませうや。抵げてこの場はお見赦し下され。

勘兵衛　四の五のと詞を濁す程猶怪しい。その菰包は何ぢや。（足軽の手より鐵砲の包を奪はうとする）

五助　それ見られては。（留める）

勘兵衛　えい、見せいと申すに。（留める手を突きのけて菰包を開く。中から火縄銃が出る）やゝ、こりや鐵砲。それでは此間中よりの諫言もお聞入なく、殿にはやつぱり千姫君の御輿入を……

左門　牧野殿、闇に紛れて我等が城を出ようと致すのは、ひとへに主君の面目を立てんが爲。何にも云はずに桑名までおやり下され。

勘兵衛　それ聞いては猶の事、門より出る事ふつにならぬ。いかに主君のお言付なればとて、今度の企がどのやうな事であるかは、御身達にもよう分つてゐる筈ぢや。殿の面を犯してお諫め申上げしそれがしが詞、御雨所とて忘れはされまい。

左門　お家のお爲を思うての御家老のお詞、我等とて御尤とは存ずれど、殿の御胸中を察し上ぐれば、今度の御企に御加擔するより外はなかつたのでござる。

五助　我等を股肱と頼み給へばこそ、殿には隱す限なく大事の秘密をお明し下された。その有難い思召に面じても、躊躇すべき場合でないと考へ申した。

勘兵衛　それこそ一を知つて二を知らぬと申すもの。忝くも千姫君には將軍家の御息女として、播州姫路の城主本多中務大輔殿へ御降嫁遊ばす大切の御方。その途中を待ちうけて御輿を奪はうなどとは、上を恐れぬ大不敬の所業ぢや。その恐ろしい陷穽（おとしあな）に主君を陷れるやうな事をしても、御身達に悔ひはないのか。

左門　さあ、それは……

勘兵衛　まこと殿の爲に捨てる命があらば、なぜその命を投げ出して、どこまでも殿を諫めうとはせぬぞ。津和野三萬石、高が一婦女子の爲に粉微塵にせらるゝは、餘りに言甲斐なき事ならずや。さ、その鐵砲を捨てゝしまへ。さうして打揃うて殿の前に出て、お手打になる覺悟で天魔に魅入られ給うた殿のお心を翻すのぢや。

坂崎出羽守成正、上手よりつか〳〵出る。羅紗の羽織、野袴、草鞋掛。左の小鬢に火傷の痕あり。

坂崎出羽

出羽　天魔に魅入られたとはどの口で申した。成正あれにて聞いてゐたぞよ。

勘兵衛　（情なさゝうに出羽の服裝を見て）恐れながらそのお姿こそ、即ち天魔に魅入られ給ひし何よりの證據。今頃お鷹野でもござりますまい。野袴、草鞋を召して、これからいづれへお越し遊ばす。

出羽　問ふまでもない事。廢れた武士の面目を立てる爲にぢや。

勘兵衛　又しても武士々々と、根が一婦人から起つた事ではござりませぬか。潔う忘れてしまうのが、却つて武士らしいとは思召さぬか。

出羽　根が一婦人と云ふ口で、そちこそ姪の松波を側室に薦め、わが心をたぶらかさんと力むるならずや。

勘兵衛　こは殿のお詞とも覺えず。愚かなれども松波は心優しき生れつき、朝夕お側に附きそひ參らせて御用を承るならば、少しは殿の御心を和らげ奉るよすがにもと存じて……それより外に他意はござらぬ。

出羽　成正が忘れ難きは千姫君の色香ではない。去年大阪夏の陣の砌、茶臼山の御陣所にて大御所のなされた御誓言ぢや。並ゐる家の子諸大名の前で、孫千姫を猛倉の火中より救ひ來るに於ては、誰に限らず姫をその者の妻に與へんと明らかに云はれた御誓言ぢや。

勘兵衛　したがその大御所樣にも、大阪が落ちて一年とは立たぬこの春の頃、御他界遊ばされました。

出羽　たとへ大御所は御他界ありしにもせよ。千姫君の御父上たる將軍家には彌榮えに渡らせ給ふ。まつたあの折席に連なりし本多佐渡守殿を始め、諸代の老臣皆息災。成正が云ふ事の正しきか正しからぬかは世間萬人の知る所ぢや。

勘兵衛　如何樣とも世間は思へ、將軍家に於て殿に千姫君を下し賜はる事を好ませられず、既に姫路の本多家に御降嫁と事定まるに於ては、最早致し方がないではござりませぬか。何事もお家が大事。平地に波瀾を起すやうな事して、後の悔を殘し給ふな。

出羽　將軍家は好んで武士の面に泥を塗られた。所詮成正が執るべき手だては唯一つ。江戸表より播州に下る姫君の輿を桑名に待ち受け、唯一刀に姫を刺殺し、返す刀でわれもその場で腹切るばかりぢや。諫め立てする汝をまで加擔人にとは頼まぬ。主の身を思ふなら、せめては本望遂ぐるまで、この大事をば人に語るな。出羽が最後の頼みぢや。

勘兵衛　なりませぬ。いかに主命なればとて、田夫野人の爭ひにも劣る亂暴狼藉、このまゝ默して

過されませうや。

出羽　では成正がこれ程事を分けて頼んでも、飽くまで邪魔だて致す所存か。

勘兵衛　強つてお止まり遊ばさぬに於ては、江戸表へ飛脚を立てゝも、きつとお留め申しまする。

出羽　云はして置けば方圖のない無禮過言。（大刀を拔いて斬らうとする）

左門　殿、お待ちなされませ。（留める）

出羽　門出の血祭ぢや。離せ。

五助　かゝる夜陰に家中の騒耳を騒がしましては、猶更事を仕損ずる恐れ。先づお鎭まり下さりませ。

兩人一生懸命に出羽を抑へる。下手より小姓一人出て來る。

小姓　申上げます。

勘兵衛　何事ぢや。

小姓　柳生但馬守樣、江戸表より俄の御入來にござります。

出羽　なに但馬守が……（きつと勘兵衛を睨んで）さては汝先廻りして、この成正を訴へしよな。

勘兵衛　いかやうともお取りあれ。江戸表よりのお使者とあらば、何にもせよお出迎ひ。（急いで行きかける）

出羽　待て。われは會はぬぞ。

勘兵衛　とは又、なぜに。

出羽　江戸よりわざ〳〵下りしとあるからは用向は問はいでも知れてある。そのやうな事に心動かさるゝ出羽か。

勘兵衛　したが今御對面なきに於ては、愈々江戸表の疑ひを招ぐ道理。是非にお出迎ひなされませ。

出羽　えゝ、汝等の手に乘せらるゝ出羽でないわ。（上手に行きかける）

柳生但馬守宗矩、坂崎家の家臣に案内されて下手から出て來る。

但馬　珍らしや出羽守、その後は變る事もなうて重疊ぢや。

出羽無言で行きかける。

但馬　（袂を抑へて）昔馴染が遙々江戸から訪ねて來たと云ふに、一言の挨拶もなしに行くのか。

出羽　今の出羽には友もない……家もない。あるのは世を呪ひ人を憤る瞋恚の炎ばかりぢや。

但馬　その炎を消さう爲、但馬わざ〳〵江戸より下つた。心を鎭めて わが云ふ事をよつく聞かれよ。

勘兵衛　恐れながら但馬守様には遠路御苦勞に存じまする。大切の御諚こゝにて承るは恐れあり。何は然れ、先づ奥殿へ……

但馬　おゝ牧野か。去年の夏の陣以來ぢやのう。（ぢつと見て）この中よりの心遣ひ、われもさこそと察し入る。したが但馬が今度下りしは、表向の使者でない。互に心を許し合うた昔の友として腹藏なき談合を遂げん爲。（勘兵衛に何事をか眼顏で知らせ）灯影まばゆき城内の廣間よりは、裏門口の夜の闇、却つて話に都合がよからう。汝等は暫く彼方へ……

勘兵衛　後刻お目通り願ふでござりませう。

但馬と出羽とを除き皆々上下へ別れて入る。足輕の一人うつかりして菰包の鐵砲を取落す。一同はつとする。

但馬　（わざとさりげなく）大分重さうな包ぢやのう。はゝゝゝ。

一同そこ〳〵に退場。

但馬　（四邊を見廻して出羽に近づき）この度の企、洩れ聞いて驚き入つた。

出羽　勘兵衛めが告げ知らせたのであらう。主の寢首を搔く不屈奴め。

但馬　それは御身の思ひ違ひ。牧野はそのやうな不忠の臣ではない。主の爲、家の爲、日夜心を碎く彼が心を少しは察してやるものぞ。

出羽　勘兵衛の爲に辯ずるこそ胡散臭けれ。したが臣下の思惑を憚つて、折角の企、思ひ止まるわれか。

但馬　それではどうでも桑名まで押し出し、千姫君の御輿を奪はん所存か。

出羽　云はいでもの事。これよりすぐに出立の手筈も殘らず調うてゐるわ。

但馬　大御所があの折の御誓言。それを思へば御身がこの度の企も、萬更無理とは存じ申さぬ。したが世の中の事は理詰ばかりでは行かぬもの。殊更、お約束の主たる大御所にはこの春既に薨去あり、千姫君が本多家へ御降嫁の儀も、數日のうちに差迫つた今となつては……

出羽　時遲れしと云はるゝか。その緣組は誰が許して定められた。千姫君が命全うせしと同時に、姫は出羽が妻になつたも同然なのぢや。

但馬　先づ聞け。それに就いては老中土井大炊守殿なども心を惱まし、何とぞして御身の心を慰めんと、さてこそ友垣たる我を選び、わざ〳〵江戸より差し向けし次第ぢや。

出羽　わが心を慰めんとは……本多家との御緣組を破談にせうとか。

但馬　さうではなけれど……現在の知行二萬石、新知を加へて十萬石に取立てうとの御内意ぢや。

どうぢや、これなら不足はあるまいの。

出羽　（無言）

但馬　姫君の御輿を奪はんとの取沙汰もお聞流しの上、世に有難き御計らひ。頑な御身の心もこれで名残なう解けたであらうの。

出羽　いゝや解けぬ。出羽が望むは唯大御所の御誓言に實證を立てゝ賜はる事のみぢや。その外には祿も要らぬ。知行も欲しうない。

但馬　おぞましや出羽守。さばかり物の辨へなき男子にはいつの間になりをつたぞ。叶はぬ望に心を焦し、われとわが身で破滅の淵に沈む所存か。思うても見よ、あなたは勿體なくも當將軍家一の御息女、右大臣秀頼公が先の御臺所。こなたは津和野三萬石、小城の主。この緣組の破るゝは始めから知れてあつたのぢや。

出羽　いゝや、いかに小身なればとて、あの折大御所には、並ゐる士卒の面前にて、明かにこの出羽に誓言遊ばされた。猛火に包まれし糒倉の中より孫千姫を救ひ來るに於ては、必ず汝の妻として與ふべしと、堅く詞を交はせられた。御身もあの場に居合せたれば、よも忘れは致されまい。

但馬　何の忘れうぞ。たとへ眼の前に泰山は崩れうとも微塵動じ給はぬ大御所も、肉親の愛には心亂れ、面の色をさへ變へ給うて、「千姫殺すな、孫を助けよ」と叫ばせられたあの折の聲音は、今も但馬が耳元にあるわ。

出羽　その御身が我に望を捨てさせうとは。遠い江戸より下り來て、強ひてもわが手に枷掛けうとは。

但馬　せくな。心を鎭めてあの折の大御所の御心をも察し見よ。千姫君は大御所が初孫。御誕生ありしその折には、天下の寶もこれには如かじとまで御寵愛遊ばされたものぢや。その最愛の初孫を、まだ御七歳の折、德川豐臣兩家和親の爲大阪に遣はし給ひ、それより歳霜十二年、兩家端なく矛盾となつて、千姫君には今にも淀の御方、秀頼公と共に、糒倉の火に燒かれんとし給ふ。あの折大御所が、恙なく姫君を救ひ參らせし者には、知行恩賞、望のまゝに宛て行ふべしと仰せられたは、骨肉の情として御無理があらうか。

出羽　したが、天をも焦がす焔の勢ひに恐れて、誰一人進み出る者はなかつた。「姫を助けた者には姫をくれう。」大御所には物狂ほしく叫ばせられた。その時末坐から出たのがこの出羽ぢや。「その御詞にしかと相違はござりませぬか。」かうこなたは念を押した。「出羽が救はゞ出羽の物ぢや。」大御所にははつきりとさう仰せられた。

但馬　あのお詞は、恐らく大御所のお口を衝いて自然と出たのであらう。火急の場合、後の事などを御思案遊ばす隙はなかつたのであらう。

出羽　いかに火急の場合にもせよ、大御所こそ取も直さず、この世の光、荒人神ぢや。その御方の御誓言に詐りがあつたで濟まされうや。大御所のお詞が信じられずば、世の中は闇ぢや。出羽どうあつてもその暗闇に輝く燈火をつけねば置かぬ。

但馬　但馬がこれ程事を分けて說いてもか。

出羽　（突然左の小鬢を示し）この痕を何と見るぞ。

但馬　うむ。（凝視）

出羽　千姫君を被衣に包んで小脇に掻い抱き、猛火を冒して糧倉より躍り出でし刹那、垂木が燒け落ちて受けし傷ぢや。そればかりか、その時打ちし右の肩骨、今に折々うづいてならぬ。この痕痕、この痛みの癒えぬ限り、出羽はいつまでも大御所の御誓言を忘れまじいぞ。

但馬　（憤然として）おのれ、さうまで執念く將軍家をお恨み申すか。この上は是非に及ばぬ。事の次第を具に江戸表に申し達し、但馬改めて坂崎誅伐の討手を願ふばかりぢや。

出羽　坂崎出羽、甘んじて天下の敵とならう。城を枕に潔く討死するばかりぢや。（つか〳〵上手へ入る）

但馬憤然としてその後影を見送りしが、心づきて立ちかける。

下手より勘兵衛出で、但馬の前に平伏する。

但馬　牧野か。

勘兵衛　樣子如何でござりましたな。

但馬　十萬石に加增せうと說いても、汝が主人の心は解けぬわ。

勘兵衛　そりやさばかりの恩命受けても・・・

但馬　傷けられし武士の面目・・・出羽が胸中を思ひやれば、氣の毒な節もあれど、餘りと云へば分を辨へぬ剛情、我慢。どうぢやな、その方出羽に切腹を勸めて見ぬかな。

勘兵衛　何と仰せらるゝ。

但馬　德川家の御爲に一度は忠節をぬきん出し坂崎出羽、見す〳〵跡目を斷絕さすも無殘ぢや。彼さへ得心して切腹致さば、將軍家の御前へは我等よりよしなに取繕ひ、家督は出羽の弟小七郎に取らせ、家の祀永く斷たすまじ。

勘兵衛　御厚志、忝う存じまする。さりながら、臣下の身として主に對し切腹を勸めまするは・・・

但馬　このまゝに打捨て置かば、出羽は天下の逆賊とならう。家の爲を思ひなば、心を鬼にせねばならぬぞ。

勘兵衛　（きつと思案して）牧野勘兵衛、一命投げ出して主人を說くでござりませう。

但馬　それ聞いて我も安堵ちや。

この時四邊少しづゝ明るくなる。

但馬　おゝ、どこかで鷄の聲がする。

勘兵衛　はつ。

双方顏を見合せて頷き合ふ。又鷄の聲。

（幕）

第二幕　津和野城內大廣間

平舞臺一面に高麗緣の疊敷。正面上の方は上段の間。下の方は襖口。すべて襖間にも襖にも、華麗なる桃山式極彩色の花鳥を描く。

前場より三日を經過せし後の夜。賑やかな笛鼓の音にて幕明くと、上段の間には坂崎出羽脇息に凭れて酒盃を傾け、側室松波と、小姓一人とが左右に侍す。平舞臺では腰元梅野、楓の兩人舞を舞ひ、家臣村越左門、本庄五助、倉田傳內、渡邊半左衞門その他の若侍、腰元等、上下に居流れて見物の體。席何となく亂れる。

舞暫くにして終る。梅野、楓、末坐に下りて平伏する。皆々喝采。

梅野　拙き手振にお目を汚し——

楓　お恥かしう存じまする。

出羽　見事であつたぞ。それ、二人の者に盃取らせい。

腰元　はあ。

腰元二人、銚子を捧げて、梅野と楓とに盃を賜はる事あり。

出羽　この上は無禮講。夜と共に酒くらべせん。こりや傳內、この大盃（たいはい）を受けて見よ。（傍にありし大きな朱塗の盃を差しつける）

傳内　（呂律も廻らず）恐れながら、先刻より頂戴仕りし御酒が體中に充ち溢れて、もう一滴もいけませぬ。平に……平に……（手を振る）

出羽　弱い奴の。然らば左門は。

左門　私とても同樣にござりまする。

出羽　五助、そちに遣はさう。

五助　私が御酒のいけませぬ事は、殿にもよう御存じではござりませぬか。

出羽　誰も彼も意氣地のない事を。（苛立たげに臣下を見やり）おゝ、半左衛門、そちや聞えた豪の者ぢや。汝ならで出羽の相手になる者はない。さ、この盃を見事に乾してくれ。

半左衛門　これはしたり。いかに大酒のそれがしでも、そのやうな大きな物であふつては、それこそ正氣を失うてしまひませう。もう夜も更けまする。又明日の日の樂みに、今夜は一先づこの邊にて……

出羽　酒をやめいと云ひをるか。

半左衛門　昨日も今日も酒びたり。このやうな日が續きましては、お體の程も氣遣はれまする。

五助　殊には柳生殿の手前もござれば……

松波　どうぞ今宵はこのまゝに、早う御寢なされませ。

出羽　酒なくて一刻も生きてゐらるゝ今のわれか。相手がならずば汝等には勸めぬ。出羽一人にて飲んでくれう。松波、つけ。（大盃を松波の前に差しつける）

松波　でも、それは……

出羽　えゝ、つぎをらぬか。

松波やむを得ず銚子を取上げる。

上段の間の襖を開き、出羽の弟小七郎（十六歳）出る。

小七郎　兄上……（盃を持ちし出羽の手に縋る）

出羽　汝は弟小七郎ならずや。弱年者の出る場所でない。下りをれ。

小七郎　いかに弱年の私でも、現在の兄上がこの御亂行を、よそに見過してはをられませぬ。柳生但馬守殿御下向以來は、兄上には閉門同樣の御身分。謹慎の上にも謹慎して、上のお疑ひを解かねばなりますまい。

出羽　出羽の心がそち達に分らうや。猪口才な事を申すな。

松波　いえ〳〵、左樣ではござりませぬ。その事に就きましては叔父勘兵衛も心を痛め、どうぞそな

たより御前へ宜しく申し上ぐるやうにと、今朝もくれ〴〵申してござりました。

左門　お二方が心を盡しての今のお詞。

半左衛門　どうぞ今宵の御酒宴は――

五助　これにてお引けになされませ。

松波　このやうな處を叔父にでも見られましたら、何かと口喧ましう申されませう。さ、腰元衆も氣を利かして、早うこのお席を片付きやいの。

腰元　はあ。（立上りて銚子盃を始末しかける）

出羽　待て。誰が許して酒宴をやめいとは云うた。

松波　でも、この間の夜以來、殿樣には御謹慎の御身……

出羽　それとても勘兵衛めが、よしなき事を江戸へ密告せしばかりに。（何か云はうとする松波を抑へて）いゝや、さうぢや。出羽が明らかな眼にて睨んでゐるわ。勘兵衛は但馬と心を合せ、生きながら主の自由を奪ひをつた。そちは彼が實の姪。檻に入れられた獸に等しき今のわが姿を見て、心では叔父同樣、手を打つて喜びをらうな。

松波　（泣聲で）殿樣、それはあんまりお情ない。いかに愚な女子の身でも、勿體ない、お主樣に對しそのやうな事夢にも思うてよいものか。御殿へ上つてこゝ半年、叔父勘兵衛に申し含められました事を心に締め、不束な身ながらも、何とぞして殿樣のお心が柔らぎますやうと、それのみ祈つてをりまする。

出羽　問ふに落ちず、語るに落ちると、叔父に云含められたと云ふが何よりの證據。汝等二人心を合せ、どうでもこの出羽を腰拔武士にせうと計るに違ひはない。

松波　殿樣。（取縋らうとする）

出羽　えゝ、寄るな。（松波を突き離し）酒だ、酒だ。腰元共、酒を持ちをらぬか。（盃を持つて立ち上り、ふら〳〵と上段の間を降りかけて轡と腰を落す）

腰元等　はどうしていゝのか、唯おろ〳〵。

この時牧野勘兵衛、近侍二三人に支へられながら下手の襖口から出て來る。

勘兵衛　いゝや、留めだてされな。いかに御酒宴最中なりとて、申上ぐべき事は申上げねばならぬ。（近侍を突き退けてつか〳〵と進み出で）殿。

出羽　（きつと見すゑて）勘兵衛か。何と思うてこゝへは參つたぞ。

勘兵衛　杯盤狼藉たるこの場の有樣、これは一體何事でござりまするな。

出羽　問ふまでもない事。臣下を集めて夜と共に酒汲み交すのぢや。

勘兵衛　唯今の御境涯にて、殿にはよくもそのやうな事が平氣で仰せられまするな。城外の紫雲院に御滯留の柳生殿に對しても、かゝる無禮講はお慎み遊ばさねばならぬ御身ではございませぬか。

出羽　二言目には柳生々々と、それ程恐ろしい但馬守か。

勘兵衛　したが、あなたは江戸よりのお目附役。その御亂行が巨細に御老中方のお耳に傳はるに於ては、當家の爲、由々しき大事に相成りまする。

出羽　その忠義面見たうないわ。家よ名よと云ふ口の下から、汝こそ但馬に取入つて、この出羽を押込めの身となし、坂崎の家を計らうとたくらむならずや。

勘兵衛　（きつとなり）こは餘りの御仰せ。何を證據に左樣な事は申されまする。主君のお詞とて聞捨てにはなりませぬぞ。

出羽　證據呼ばはり片腹痛い。千姫君を奪ひ奉らん企を江戸に密告して、但馬守を迎へ來りしが何よりの證據。その上但馬と心を合せ、生きながらに我を葬らんとのたくみ。これでも汝は覺えなしと云張るか。

勘兵衛　さうまで仰せあるからは何事も包み隱しは致しますまい。いかにも勘兵衛、殿の御身を思ふの餘り、豫々御入魂の間柄なる柳生殿のお手許まで密々に書狀を差上げ、然るべき御配慮をお願ひ申したに違ひはござりませぬ。したがそれも皆、お家の爲を思ふの餘り、露些か他意あつての事にあらず。

出羽　云ふな、云ふな。主の身に手械足枷をはませるやうな事をして、それでも主に盡すとなら、世の中に不忠の臣は一人もない筈ぢや。弟小七郎は弱年なり、姪の松波をわが側室に薦めし時より、汝の心は早くも坂崎家を己が氣儘になさんと決してゐたのぢや、

勘兵衛　いかにお心に御不平がおはせばとて、餘りと申せば餘りのお云懸り。柳生殿お下りあつてよりこゝ幾日、勘兵衛が身も痩せ細る苦みを、殿には少しもお汲取り遊ばされぬか。

出羽　苦しむなら勝手に苦しめ。出羽の知つた事か。（ごろりと肘枕）

勘兵衛　殿。（溜りかねて間近く寄る）

出羽　まだ申さうとか。よい加減に下りをらうぞ。

勘兵衛　それがし一人心を碎いても、殿がその御性根では何にもなりませぬ。この上は明ら樣に申上げませう。

出羽　云ひたくば勝手に申せ。寝ながら聞いて遣はさうぞ。

勘兵衛　殿にはそのやうな太平楽をお吐き遊ばせど、殿のお命はこの勘兵衛がお預り申してをるのでござりまするぞ。

出羽　何と。（きつとなつて半身を起す）

勘兵衛　殿には御心を靜めて、それがしが申上ぐる事、よつくお聞き遊ばされませう。先夜柳生殿にはお歸りの節それがしに向はせられ、分を辨へぬ出羽守が剛情、我慢、なれども將軍家の御爲に一度は忠節をぬきん出し坂崎の家を、このまゝ斷絶さすも不憫故、汝主を說いて切腹させよ、さすれば我江戸に歸つて御前へよしなに取做し、家督は弟小七郎に繼がせて、家の榮を長く計るべしとの御諚。否みもならずお受けは申上げしものゝ、臣下の身として重代の御主君に、どうして御腹召せとお勸め致されませう。唯この上は、殿には御身を慎み給ひて、假初にも人の口の端にかゝるやうなる御事を遊ばさで在せかし。さすればそれを云立てに、いかにもして柳生殿を賺し參らせ、江戸表の御不興を和らげんと心を碎きし事も水の泡。さばかり人の誠を疑ひ給うて、する事なす事、皆惡し樣にのみお取り遊ばされては、勘兵衛最早策に盡き果て申した。

出羽　それ故但馬に智慧を附けられし通り、我に切腹を勸めうと云ふのであらう。汝の心は、出羽

聞かいでも存じてをるわ。

勘兵衛　（涙聲で）いかにも御推諒の通り、今改めてそれがしより、殿に御切腹をお願ひ申上げまする。坂崎のお家を大事と思召さば、どうぞこの場で御生害下さりませ。

席に並ゐる面々、驚いて顏を見合す。

出羽　さすれば豫ての本望通り、坂崎の家は汝が思ひのまゝとなる故にの。

勘兵衛　これ程理を盡して申上げても、殿にはやつぱりそのやうに、それがしをお疑ひ遊ばさるゝか。

出羽　えい、最後まで主をたばかる心か。（手にした大盃を勘兵衛に投げつける）

松波　あれ、お危うござりまする。

松波や小七郎は驚いて出羽を支へる。勘兵衛は額に盃を當てられてうつ伏しになる。皆々介抱する。勘兵衛面を上げる。額からたら〳〵血が流れてゐる。

勘兵衛　殿。（身を顫はせて出羽に詰め寄る）

出羽　主を計る報ひを知りをつたか。汝に打たれぬ先に、我より汝を打つてくれるわ。（小姓の手より佩刀を奪つて、抜きにかゝる）

皆々留める。

勘兵衛　諫言耳に逆らうてのお手打となら、固より臣として望む處。さ、見事お斬り遊ばされよ。

出羽　おゝ、斬らいでか。留めだて致すな。放せ。放しをらう。

左門　御家老の方よりそのやうな事を仰せられては、猶の事お氣が昂ぶらせられます。

半左衛門　後はよしなに我々より申し繕ひますれば、早くこゝをば……（勘兵衛を立たせようとする）

出羽　えゝ、逃げうとて逃がさうや。それへ直れ。それへ直れ。

小七郎　兄上の御立腹も御尤ではござりますれど、それとても皆、お家を思うての餘りでござりますれば……

松波　どうぞ今宵の處だけは、お赦しなされて下さりませ。

荒れ狂ふ出羽を、人々は無理に宥め賺して奥に連れ行く。廣間には勘兵衛一人殘る。額を抑へて彼は暫く無念のこなし。軈て何事をか決する所あるが如く、立上つて下手に行きかける。

上手の襖口から松波出で來る。

松波　叔父上。

勘兵衛　（振向いて）松波か……殿には何となされたぞ。

松波　漸々御寢所までお連れ申しました。今方の事などは忘れたかのやうに、すや〳〵と御寢なつてゞござります。

勘兵衛　武士の額に疵を負はせながら、お心にも留めいでか……

松波　（痛ましけに）疵はお痛みなされまするか。

勘兵衛　額の疵は癒えもせう。心に受けしこの痛手は……

松波　どうぞ殿樣を恨まずに下さりませ。殿樣の今のなされ方は、私とて餘りなとは思ひました。したが殿樣の此頃のお心を思ひ遣れば、氣荒におなり遊ばすのも御無理ではござりませぬ。

勘兵衛　松波、わしはそなたに濟まぬと思うてをるぞ。

松波　叔父上とした事が……なぜでござりますか。

勘兵衛　そなたを殿に薦めしばかりに、させいでもよい苦勞をさする。

松波　あれ、何かと思へばそのやうな事でござんすか。殿樣の爲に心を使ふなら、わしや本望でござります。

勘兵衛　それ故に猶の事、わしはそなたが不憫なのぢや。そなたがその心壺しも…勘兵衛がこの苦衷も…殿には少しも汲み分け給はず、只管邪推の御眼を以て眺め給ふ。我等の立つ瀬がどこにあらう。

松波　御府辯強いだけに、折れるのも早い殿様の事、酔が醒めたら悪い事をしたとあなたからお詫びなさるは定。その時こそ今一度私からお諫め申して、きつとお慢み遊ばすやうに致しませう。御切腹の何のと、今方のやうな恐ろしい事は、嘘にも云うて下さりますな。

勘兵衛　心配致すな。わしには決する所があるのぢや。

松波　その御決心とやらが氣懸りな。叔父ー、お願ひでござります。どうぞ殿様を恨まずに下さりませ。

勘兵衛　殿の御身をそなたはそれ程にお氣遣ひ申すか。（ぢつと松波の顔を視つめて眼を瞬いたが、すぐに氣を變へて）はゝゝゝ、勘兵衛はそなたの叔父ぢやぞ。血を引いた實の姪に泣きを見せるやうな事をしてよいものか。殿がお目を醒まされうも知れぬ。早うあちらへ。

松波　でも……

勘兵衛　えい、參れと申すに。

松波　は……い。（後に心を残しつゝ上手へ入る）

勘兵衛　（ぢつと見送つて）あのやうに慕ひ參らするものを……歎きの程も不憫なれど、お家の行末には替へられぬ……

この時遠くにて夜警の拍子木の音。勘兵衛四邊を見廻し、急ぎ足に下手へ入る。

（道具廻る）

同　出羽守寢所

本緣附の二重家體。正面の上の方は床の間、違ひ棚。下の方は繪襖。上手折廻して廊下。平舞臺の下手奥の方は一面の植込にて、家體に接して袖垣などあり。

床の間の前に金屏風を廻らし、その蔭に坂崎出羽うたゝ寢をなしゐる。枕元に燈臺一つ。

下手寄の緣側近く、松波琴を彈じゐる。蒼白き月光斜に屋内を照らし、植込に蟀の聲頻

坂崎出羽

りなり。

出羽　（むつくりと半身を起し）うと〳〵とまどろむ隙に、夢としもなく聞き入りし微妙の音樂……

松波が彈く琴の音であつたか。

松波　お目醒めでござりまするか。（琴を措いて傍へ來ようとする）

出羽　構はずと續けてくれ。久し振に聞くそちが爪音、何とはなしに心が和むわ。

松波再び琴を彈じ出す。出羽は暫くそれに聞き恍れてゐたが、次第に苦痛に堪へざる如き表情となる。

出羽　やめてくれ。彈くのはやめてくれ。

松波　（驚いて手を留め）たつた今方は彈けと仰しやつたに……何ぞお氣にさへられる事でも……

出羽　何の氣になど觸らうぞ。美しい糸の音を聞いてあれば、亂れし頭も鎭まりて、水のやうに心が澄むわ。したが、その澄み渡る心の底から湧き上るは、堪へ難き寂寞の思ひ……

松波　――

出羽　骨に食入るこの寂しさは何ぢや。消えも入りたきこの頼りなさは何ぢや。死にかゝつた蟀の聲。そちの耳にはあれが何と聞ゆるぞ。明日をも知れぬあの蟲の音こそ、取も直さず出羽が今の心を唄うてゐるのぢや。

松波　今宵に限つて殿樣には、なぜそのやうに心細い事ばかり仰しやります。悲しい唄がいけずば、何ぞ陽氣な曲を彈じませう。

出羽　いや〳〵、琴の音は徒らにわが心を痛むるばかりぢや。彈いてくれるな。

松波　そんなら酒なと持つて參りませう。醉醒は誰も心寂しいものとか申しまする。（立ちかける）

出羽　酒……いや、それも飲むまい。醉へば又しても心が荒まう。

松波獸つて何事をか考へてゐる。

出羽　今宵もわしはそち達に、いかい迷惑を掛けたやうぢやの。

松波　（はつとしたやうに）いゝえ、それ程でもございませんだ。

出羽　いや〳〵、わしにも思ひ出さるゝぞよ。わしはそちの叔父を捉へて劇しく云罵つたやうであつたな。血汐したゝる額を向けて、わしを睨んだ勘兵衛が眼ざし……おゝ、わしが盃を投けつけて、彼の眉間を割つたのぢやな。

松波、それとても叔父の詞が過ぎし故。殿樣のお怒りは御尤でございます。

出羽　勘兵衛めは主に腹切れと云ひ居つた。（一度は激したが、すぐに弱々しい調子になつて）それも道理か。生き存へたりとて、所詮は望なき成正。徒らに世を恨み、人を罵つて臣下の憂ひを増さんより、潔う腹切る方がましであらうも知れぬ。

松波　滅相な。大事の御身に御切腹の何のと、そのやうな忌はしい事は、忘れてもお口へは出さぬもの。それだけのお心が在しまさば、どうぞこれからは御身を慎み……

出羽　その事なら云はずにくれ。千姫君を飽くまでわが物にと云張るのは武士の意地ぢや。その意地を立て通さう爲、わしはどれだけ多くの牲を捧げてゐる事であらう。出羽一人の命と食祿とを擲つのみか、亂酒に總てを忘れては、罪なき家臣に堪へ難き恥辱をまで與へる。然も、酒醒めて胸を打つものはこの佗びしさ……頼りなさ……

松波　――

出羽　勘兵衛とわしとは氣質が違ふ。わしのする事を勘兵衛は好まぬ。勘兵衛のする事をわしも好まぬ。したが勘兵衛が出羽の身を氣遣ひ、坂崎家の行末を憂うる誠に詐りはない。それだけはわしも疑はぬ。家中の諸士が並居る前で、先刻のやうな恥辱を彼に與へたは、皆酒のさせる業ぢや。出羽心より詫び入ると、どうぞそちより傳へてくれ。

松波　は……はい。（胸一杯）

出羽　勘兵衛ばかりか、わしはそちにも詫びねばならぬ。側仕に參つてより早半年。我儘氣隨の我に侍して、遂に一度の獸ひもなく、陰日向なく壺しくるゝ眞心の程、出羽仇には思はぬぞよ。

松波、答も得せずすゝり泣く。

出羽　そちや泣いてをるな。何で泣くぞ。

松波　有難い今のお詞を承つて、どうして泣かずにゐられませう。たとへこのまゝ死にませうと、わたくしは……もう本望でござります。

出羽　出羽に云はれた今の一言が、そちやそれ程に嬉しいか。……優しい女心よのう。ならう事ならわしも頑固な武士の意地などは捨てゝ、さうした優しい、和らいだ心持になりたい。

松波　（思はず摺り寄つて）殿様、どうぞその和らいだお心持におなり下さりませ。津和野三萬石の御城主として、いつまでもお家の榮をお樂み遊ばしませ。

出羽　さうしてそちと手を取つて、餘生を安穩に送らうか。（優しく松波を引寄せたが、躰て緣端に立つて行つて）おゝ、月も大分傾いたな。……蟲が鳴く。雨より繁く蟲が鳴く。絶え入るやうなあの聲を聞いてあれば、唯今生の寂しさのみ身に沁みて、恨みも、呪ひも、憤りも、幻影のや

うに消えて行くわ。

庭には頻りと蟬の聲。良あつて出羽、右肩を抑へて苦痛のこなし。その苦痛次第に昂ぶりて呻きの聲を立てる。

松波　どうぞなされましたか。（驚いて介抱）

出羽　この肩骨が疼いてならぬ。千姫君を掻い抱いて糒倉より出でんとせし折、燒け落ちし垂木にて打ちし疵痕が……（次第に心が狂暴になる）

松波　夜風が沁みては猶惡うござりませう。早う御寢なされませ。

出羽　骨の髓からきり〳〵と揉まれるやうなこの痛み……それにつけても思ひ出さるゝはあの折の事。あの時出羽が身を擬して猛火の中に躍り入らずば、姫の御體は糒倉の灰となつたは必定。さすれば今日、播州の本多家と御緣組を結ぶ目出度き日にも逢ひ給はぬ道理……（益々苦吟する）

松波　（おろ〳〵聲で）あれ、誰ぞ來て下さりませ。殿樣が大變でござります。

出羽　この痛みの癒えぬ限り、姫の事は思ひ切らぬ。大御所の御誓言を忘れはせぬ……

松波　そのやうにお昂り遊ばしては、猶と痛みが重うなりませう。唯今……唯今お醫者を呼んで參りますれば、暫くこれにてお休みを……（無理に出羽を屏風の蔭に寢かしつけて、あたふた上手の廊下口へ駈け入る）

後暫くは屏風の中にて出羽が苦吟の聲。

月雲に隱れしと覺しく、舞臺急に暗くなり、蟲の音もやむ。

植込の蔭より勘兵衛、覆面、抜刀にて忍び出づ。

出羽　（聲のみにて）家が何ぢや……家來が何ぢや。廢れし武士の面目、立ていで置かうか……（苦吟）

勘兵衛その聲を頼りに土足のまゝ二重に上り、いきなり枕元の燈臺を吹き消す。四邊暗黑。

出羽　（物音を聞き咎め）何者ぢや。（身を起す）

勘兵衛　殿、御免。（出羽の右肩へ斬りつける）

出羽　（斬られながら身を構へ）何奴なれば名のりも上げず、寢込を襲ふとは卑怯千萬。

勘兵衛　いか程御生害をお勸め申しても、お聞入なき是非なさに、やむなくきたなき振舞致した。

出羽　さういふ聲は勘兵衛ぢやな。さては今宵の事を根に持つて、主をあやむる心になつたか。さうとは知らず今の今まで、汝に詫びんと思ひし事の愚さよ。

勘兵衛　（覆面をかなぐり捨て）主君を斬るもお家の爲、唯お命を下さりませ。（斬つてかゝる）

出羽　などかおめ〳〵汝に打たれう。斬れるものなら斬つて見よ。（痛手を忍びつゝ、手當り次第に室内の調度を投げつける）

松波、雪洞をかざし、醫師寺澤了齋を案内して廊下口から出て來る。

松波　まあ眞暗な。どうしたと云ふのであろ。

了齋　その上、唯ならぬあの物音。

二人急ぎ足に寢所に入りかけ、闇にきらめく白刃の光を見てびつくり。

了齋　ひやあ、大變ぢや。御寢所へ曲者が忍び入りました。お出會ひなされ。お出會ひなされ。（消魂しく叫んで廊下口へ逃げ行く）

松波　殿の御身を窺ふ慮外者、わしが相手ぢや。（雪洞投げ捨て、懷劍拔いて勘兵衛に切つてかゝる）

勘兵衛輕くあしらふ。その時月光再び雲間を洩れ、四邊明るくなる。

松波　（月影に勘兵衛を見咎めて）やゝ、こなたは叔父上……

勘兵衛　こゝまでぢや。（松波を斬り捨てる）

この時了齋を案内に、村越左門その他前場の侍多勢出で來り、ばら〳〵と勘兵衛を取卷く。

左門　主君の御身に刃を當てし痴れ者、御家老なりとて容赦はならぬ。引括つて縛り首にせよ。

一同　云ふにや及ぶ。（一齊に打つてかゝる）

勘兵衛　殿の御首（おくび）賜はらぬうちは、などか御邊等の繩目を受けうや。

五助　何を小癪な。

勘兵衛諸士を相手に奪闘したが、とゞ多勢の爲に刀を打ち落され、繩にかゝる。その間に了齋は、白刃の下をびく〳〵もので、手負の出羽と松波とを介抱する。

半左衛門　（出羽の耳元に口を寄せ）御安心あれ、殿を害せんと企てし勘兵衛には、まつその如く繩かけましたぞ。

左門　この上は城外の紫雲院に御坐ある柳生殿に訴へ出で、然るべきお捌きを受けるでござらう。

五助　それぞ誠に上分別。牧野殿、立ちませい。

この時植込の方より柳生但馬守、近侍二人を從へ出て來る。

但馬　いや、それには及ばぬ。知らせに依つて但馬ぢき〳〵檢分に參つた。

一同はつと平伏する。

但馬　（つかゝ〳〵勘兵衛に近づき）えらい事をやつたものぢやの。

勘兵衛　いか程理を盡して御生害をお勸め申しても、耳にも入れ給はぬ殿の御亂行。臣下の身として主君の肌に刃を當てる切なさ、苦しさ……御推諒下さりませ。

但馬　家の榮えを願ひなば、主人を說いて切腹させよと云ひし但馬の詞が、かくも痛ましき果を見るか。さりながら彼程の大事引起せしからは、汝にも覺悟があらうな。

勘兵衛　仰せまでも候はず、命は始めより投げ出しての事。唯心懸りは弟小七郎君の御身の上……まつた坂崎家の御行末……

但馬　心配致すな。その事なら但馬よう心得てゐるわ。（二重に上つて）心を慥に出羽守。柳生ぢや。但馬ぢやぞ。

出羽　なに、但馬とな……（苦しい息の下よりきつとなり）ようも汝は勘兵衛を唆かして、わが一命を奪はうとはたくらんだな。

但馬　この期に及んでまだ疑ひ。勘兵衛は坂崎家を全うせん爲に、御身の命を牲にした忠臣ぢやぞ。

出羽　えい、見え透いた詐り聞きたうないわ。

廊下口より小七郎駈け出づ。

小七郎　兄上、淺ましいお姿におなりなされましたなあ。（取縋る）

勘兵衛　殿のお憎しみは、勘兵衛七生までも受けませう。唯、お家の行末を思ひ給はゞ、御息のあるうち一言なりと、弟君の御事を柳生殿にお頼みなされませ。

出羽　曾ては御主君たる大御所に欺かれ、今又臣下たる汝の手にかゝる。その我に何の家ぞ。弟ぞ。坂崎出羽はあらゆる物に欺かれた。人も信ぜぬ。道も信ぜぬ。神も信ぜぬ。あらゆる物を疑ふのぢや。あらゆる物を呪ふのぢや。

但馬　こりや、出羽守。

出羽　（恐ろしい眼をして）汝は友を賣つた恥知らずぢや。

勘兵衛　それこそ殿の御邪推と申すもの。

出羽　默れ、汝こそ主を斬つた大惡臣ぢや。盡未來まで呪ひを掛けうぞ。

松波　（息も絕え〳〵に）殿樣、わたくしばかりは……（縋り寄る）

出羽　おゝ、そちも手を負つたか。（痛ましさうに松波の顏を眺めたが、急に荒々しく突きのけて）

えい。寄るな。何物をも出羽は信ぜぬ。何物をも出羽は疑ふ。

勘兵衛　それがしこそ殿の呪ひを受けませう。松波が誠を疑ひ給ふとは、餘りに酷きおん心。

出羽　世をも呪はう。人をも呪はう。生ける千姫君を呪ふばかりか、死して地獄の苦艱を甜め給ふ大御所をも、永劫の果まで呪ひ盡さうぞ。(物狂ほしく叫びつゝ、段々息絶え行く)

但馬　上を恐れぬ大不敬の詞。この上は勘兵衛が苦心も水の泡。坂崎家は今日限り斷絶ぢやぞ。

勘兵衛、小七郎を始め、皆々水を浴びせられたやうにはつとして平伏する。絶え入るやうな峰の聲。

(幕)

松平忠直卿

人物

松平三河守忠直
奥方於勝の方
若君仙千代
乳人佐の局
侍女一國
家臣本多伊豆守富正
同渡邊山城守重紀
同野本右近
同黑田源左衛門
日根野織部正吉明
松平忠直卿

牧野傳藏
伴天連フエルナンデ
牢番兵内
同茂七
その他諸侍、小姓、腰元、足輕、番卒等多勢

第一幕　越前國北庄孝顯寺門前

平舞臺中央より稍上手寄に莊麗なる禪宗寺の山門。その左右より上下一杯に練塀にて見切る。門口のすぐ上手に、「不許葷酒入山門」と記した石標。同じくずつと下手に滿開の櫻樹一本。門の櫓には紫地に葵の紋所を白く染め出したる幕を左右に引絞り、門内遙に松杉の茂み、それに交つて今を盛りと咲亂れし櫻花を望む。

元和九年三月某日の事。

賑やかな笛、鼓の音にて幕明くと、黑田源左衛門、組下の足輕四五人と門口を警護なしゐる。

足輕一　（門内より聞え來る樂音に耳を留め）おゝ、又始まつたぞ。

足輕二　浮き立つやうな笛鼓の音……今度は何の番組かのう。

源左衛門　大方殿のお氣に入りの若侍や腰元共が、酒に狂うて亂舞など始めたのであらう。苦々しい至りぢや。

足輕　それにしても今日、奥方附のお腰元の一國殿が、殿樣の御前で舞をお目にかけるといふのは本當でござりますか。

源左衛門　おゝ本當とも。殿には奥方に一言の御挨拶もなく、無理から一國殿を今日の花の御宴にお呼び出しになつたのぢや。このやうな事をされて默つてお出で遊ばす奥方か。何に限らず殿の此頃のなされ方は、餘りに常規に脱れて、心ある者の眼から見ればほと〳〵狂氣の沙汰ぢや。

門内より野本右近出て來る。

右近　黑田殿……源左衛門殿……

源左衛門　おゝ右近殿か。

右近　組下の輩にて主君の批判、閉苦しうござるぞ。

源左衛門　何かと思へば今の詞がお身の氣に觸つたか。いか程氣に觸らはうとも、源左衛門は己が思ふまゝを、憚らず云ふまでぢや。

右近　今日の觀櫻のお催しも、又此頃のお身持も、わが君の御胸中をお察し申上ぐれば、御尤な入譯があるのぢや。

源左衛門　（門脇の石標を指し）御身の眼にはあれがはいらぬか。葦酒山門に入るを許さずと、明らかに書き記してあるのみか、恐れ多くもこの御寺こそ、先殿淨光院秀康公の御菩提所。いかに不平が在せばとて、その境内にて舞を舞ひ、酒に醉ひしれては、狂氣と呼ばれても仕方がござるまい。

この間に下手より伴天連フエルナンデ、白髪白髯の老翁、黑衣を着し、胸に十字架を下げ、長き自然木の杖に縋つて出て來る。櫻の木蔭に身を隱し、川ありけに門の方を窺ふ。

右近ふと心づき、眼顏で知らせる。フエルナンデ下手へはいる。

右近　（急に折れた態度になり）成程、御身の云はるゝ處は尤もぢや。右近よく會得が參つた。先程よりの見張にてさぞ疲れられたらう。詰所にて休息めされ。

源左衛門　口先ばかりの得心顏措いてくれ。そも〳〵わが君には將軍家に對し奉り……

右近　まあよいわ、それがしの負けぢやと云ふに。

源左衛門　御身の方よりこなたの詞尻を捉へて置きながら、今になつて變な男ぢやのう。（右近の樣子に幾らか不審を抱きつゝ、組下の足輕を從へて門内に入る）

右近、源左衛門が慥に去りし事を見屆けて下手の方へ行く。フエルナンデ再び出で來る。

フエルナンデ　（充分に熟し切らない日本語にて）野本さん。

右近　（聲を潜め）師父には何として輕々しう。切支丹宗門改めの嚴重に相成りし今日此頃、漫りに御他出遊ばすは危なうござりまするぞ。

フエルナンデ　わたくしそれ知らぬではありません。併しそれ構つてゐられない心配事出來ました一國さん今日この寺院で、日本の舞まふさうですね。

右近　有難き師父の御說法に導かれて尊い宗門に歸依してよりは、舞扇を手にする事もとんと打絶え申したが、數ある腰元衆の中でも、一國殿は聞えた舞の名手。わが君には豫々その事を聞し召され、一度御覽ありたき由仰せられし處、今日の花見の宴をよきしほに、遂に一國殿をお呼出しに相成つたのでござる。

フエルナンデ　この國の領主は、己が眼に美しいと映つた程の婦人は、悉くその操を弄ばねばやまぬとか聞いてゐます。わたくしは一國さんも、その痛ましい犠牲の一人にされるであらう事を恐れます。

右近　殿のお身持に對する世間の取沙汰には、或方よりの爲にする作り事もございれば、總てを信ずる譯には參りませぬ。さりながら此頃では、一には將軍家に對し奉り、一には奥方に對しての御不滿の念重り給ひて、時には荒氣なき振舞にも出で給ふわが君……それを思へばそれがしとて、懸念がないでもございませぬ。

フエルナンデ　一國さんをこゝへ呼んで下さい。わたくしはあの人に力を與へなければなりません。

右近　人目繁き今日の御宴、首尾よく御旨を傳へ得られませうや、心許なうはございれど……ともあれ……（門内へ入る）

後にフエルナンデは天を仰ぎて何やら祈念のこなし。間もなく門内より四邊を窺ふやうにして侍女一國出で來る。花の宴の舞姫たるにふさはしき極めて華美なる服裝たるべし。

一國　おゝ、フエルナンデ様。（走り寄る）

フエルナンデ　一國さん、よく來てくれました。

一國　右近様のお知らせがあるとそのまゝ、人目を忍んで抜けて來ました。もうすぐ舞はねばなりませぬ。かう云ふうちも心がせきます。（門内を氣にする）

フエルナンデ　あなたの御領主を注意なさい。その人はあなたのやうな若い、美しい婦人に對して狼のやうな牙を鳴らす恐ろしい君主だと聞いてゐます。舞が終つた後、御領主からどんなに優しい、蜜のやうな甘い詞をかけられようと、決してそれに動かされてはなりませんぞ。

一國　御安心なされませ。わたくしもあなた様の御教のお蔭で、今では慈み深い毘盧菩薩利亞様の御前にぬかづく身でございます。たとへ命は絶たれても、マダメントの御掟はきつと守つて見せませう。それに殿様は、此頃噂に高いやうなそんな恐ろしい方では決してございませぬ。

フエルナンデ　野本さんも今あなたと同じやうな事を云はれました。併しこの國の領主は、彼の爲を思うて諫言した忠義の侍を、手打にしたと云ふ事ではありませんか。

一國　違ひます。その侍は奥方にばかり媚び詔うて、殿様を蔑ろにするやうな所業があつたからでございます。奥方は當將軍家第二の姫君とて、何彼につけて御權威强く、譜代の御家中でさへ、殿様を差措いて奥方に附く方々も數多くございます。わたくしは奥方にお附添ひ申す身ではござ

りますが、殿様の御心中をお察し申上ぐれば、あの御所業も御無理はないと存ぜられます。

フエルナンデ　併し、領主は彼の意に從はない家來達の娘や妻を、五人まで斬り捨てゝ、城の一隅にある空井戸の底に沈めたと聞きました。これでもあなたは領主に同情しますか。

一國　それこそ根も葉もない拵へ事。常々奥方のお傍近く勤めてをりますわたくしは、その出所もよう存じてをりまする。いかに將軍家の姫君とて、女は夫に從ふが道。それをあらう事かあるまい事か、現在妻の御身として、夫を陷れるやうな恐ろしい手だてばつかり……淺ましいお心ではござりませぬか。

フエルナンデ　あなたも野本さんも、神の道にはいつた正しい人です。その人達の詞に詐りはありますまい。わたくしはこの國の領主に對して持つてゐたわたくしの觀念を改めなければなりません。

一國　殿様ぐらゐ洩らしどころのない御不平に、御心をさいなまれてお出で遊ばす方はござりませぬ。又殿様ぐらゐ訴へどころのない寂しさに、お胸を閉されてお出で遊ばす方はござりませぬ。お氣の毒な殿様のお心に、一日も早く平和が來ますやうと、私は毎晩臥戸に入ります前、人知れずお祈りをするのでござります。

フエルナンデ　おゝ、よくお祈りをして上げました。その美しい心こそ、取もなほさず神様の御心です。わたくしもあなたと一緒に、領主の魂の平和の爲に祈りませう。（跪き）天にましますわれらの御主よ、願はくは我等と惱みを同じうする憐れなる者の爲に、永遠の救ひを與へ給へ。（祈る）

一國も跪いて、同じく一心に祈念を凝らす。

この時源左衛門、配下の足輕を連れて門内より出で來り、暫く樣子を窺つてゐたが、時分はよしと何事をか配下に呟く。足輕等一齊にフエルナンデに躍りかゝる。

一國　（フエルナンデを圍ひ）拿いお方ぢや。控へませうぞ。

源左衛門　何が拿いお方ぞ。切支丹宗門は國家を危うする邪宗なりとて、わが國にては嚴しき御法度。別して去年の秋以來は日本國中お布令を廻して、假にもこの掟を犯した者は、立所に磔の刑に所すべしとの御諚ぢや。怪しき南蠻人と共に祈を上ぐる御身こそ容赦はせぬぞ。

一國　（必死に足輕等を突きのけ）こゝ構はずと、早うお逃げなされませ。

フエルナンデ　いや、逃げますまい。日本の役人はわたくしに用があると見えます。わたくしどこへでも引かれて行きませう。（つか〳〵と前へ出る）

一國　あれ、そんな事をなされましては。(支へる)

フエルナンデ　「惡に敵する事勿れ。人若し汝の右の頰を打たば、又他の頰をも廻らしてこれに向け よ」とキリストは仰せられました。わたくしは暴力に抵抗しません。

足輕一　へん、何をチンプンカンプン云つてやがる。

足輕二　縛られたくないつたつて、縛らずに置くものかい。

足輕等フエルナンデを縛し終り、更に一國に及ばんとす。門内より右近出で來る。

右近　こりや一國殿を何として。(そのカへ駈け寄らうとしたが、源左衛門の前に縛されたまゝ引据られしフエルナンデを見てはつとし)やゝ、こりや師父にも……(その方へ寄らうとする)

フエルナンデ眼顔で何にも云ふなといふ意味を通はせる。右近やむなく默す。

源左衛門　その女は切支丹ぢや。それ故引括つて、この伴天連と諸共に、御城内の牢屋へ連れて行くのぢや。

右近　たとへ切支丹にもせよ、今日はわが君の御所望にて、當孝顯寺へ呼び出されし一國殿。御身の一存には參るまい。殿には一國殿の姿が見えずなつたので、それがしに捜し參れとの仰せでござる。

源左衛門　いかにわが君の仰せなりとて、天下の掟に背きし女、引立つるに何の遠慮ぞ。

右近　殿には御身の舞をお待ちかね遊ばされてぢや。一國殿、立たれよ。(促す)

源左衛門　待て。(支へる)

右近　えゝ、御諚ぢや。(振拂ひ、フエルナンデの方に心は殘しつゝも、一國をせきたてゝ門内へ入る)

源左衛門　(腹立しげに門内を睨み)今はそのまゝ放ち遣るとも、時を移さず引括つて見せう。その時吠え面かくまいぞ。どりや、この伴天連めを御城内の牢屋へ……(顧にて足輕に指圖する)

足輕等フエルナンデを引立てゝ花道の方へ行きかける。

その時向うより渡邊山城守重紀を先に、華麗なる乘物二挺、それに續いて乳人佐の局、供奉の腰元、侍など多勢、列を揃へて靜々と出て來る。源左衛門等驚いて平伏する。

山城　(フエルナンデに眼を留め)珍らしき囚人を伴ひ、源左衛門にはいづれへ行かるゝぞ。

源左衛門　はつ。唯今御寺の御門前にて怪しき伴天連を召捕つたれば、引括つて御城内の牢屋まで連れ參る處にござります。

山城　それぞ去年の頃よりこの御城下に出没する、フエルナンデとか申す南蠻であらう。世を惑は

す不敵の痴れ者、よくぞ捕へし。

この時第一の乘物の中より女の聲聞える。忠直卿の奥方於勝の方の聲なり。

於勝の方の聲　なに、源左衛門が南蠻の伴天連を生捕りしとや。

第二の乘物の中よりは少年の聲す。若君仙千代のそれなり。

仙千代の聲　わしにその南蠻人を見せてくれ。

佐の局　（乘物に近寄り）これ、何を仰せられます。

仙千代の聲　（むづかるやうに）でもわしは繪で見ただけで、まだ南蠻の生の者を見た事がないものを。

於勝の方の聲　あのやうに若が云ふのぢや。下して見せてやりや。

佐の局　はあ。

於勝の方先づ第一の乘物の中より出づ。續いて第二の乘物より、佐の局、仙千代の手を取りて出だす。駕籠脇の腰元等それ〴〵草履を薦める。

於勝の方　（ぢつとフエルナンデを見て）これが聞及んだ伴天連かや。人の話では、この者共は世にも恐ろしい魔法を行ひ、又酒の代りに人の生血を啜るといふ事ぢやが、別に惡鬼のやうな顔もしてゐぬのう。

佐の局　外面如菩薩、內心如夜叉……あれはわが國の喩へ事でござりまするが、この殊勝らしい面の下に恐ろしい心が潜んでゐるのでござりませう。

フエルナンデ　（ぢつと仙千代を視つめて）よいお子ぢや。こゝへお出でなさい。

仙千代　あれ、怖い。（佐の局の後ろに隱れる）

佐の局　何の怖い事がござりませう。あの通り縛られて、身動きも出來ぬではござりませぬか。

源左衛門　えい、上を恐れぬ不屈奴め、控へをらぬか。（强くフエルナンデの繩を引く）

山城　嚴しき御法度にも係らず、此頃では越前國中にも邪宗に歸依する者少なからず、御家中の諸侍や腰元達の間にさへ信者ありとの噂。奥方のお附添としてこの越前へ下りしそれがし。このやうな事が江戸表へ聞えては、それがしの落度にも相成る。それと申すも皆此奴がなせる業。思へば憎き南蠻ぢや。

源左衛門　いや、噂のみではござりませぬ。今日、源左衛門、慥な實證を見屆け申した。（更に進み寄り）あの一國殿こそまがふ方なき切支丹でござりまするぞ。

於勝の方　なに、一國が邪宗門とや。

源左衛門　この伴天連と大地に額突き、怪しき祈りを捧げてゐる所を、それがし目のあたり見たのでござる。

佐の局　えゝ、それ程までに誑しくさつたか。

山城　もう容捨がならぬわい。（フエルナンデを足蹴にかける）

於勝の方　控へよ山城。こゝにて窮命致さずとも、城内には……それ、土の牢もある……空井戸もある……（冷かに微笑み）命のある限りあの中に繋ぎ置いて、わが召使の心を迷はせし痴れ者に思ひ知らすのぢや。――源左衛門、こゝ構はずとすぐに牢屋へ……

源左衛門　はつ。（一禮して立上り）立て。

フエルナンデ　（立上つて門内を望み）おゝ神よ、力弱きかの少女を、荒鷲の手より守らせ給へ。

源左衛門　えゝ、行かぬか。

フエルナンデは源左衛門とその配下とに追ひ立てられつゝ、向うへ入る。皆々見送る。

門内より又賑やかな笛鼓の音。

於勝の方　おゝ、舞が始まるさうな。殿にはわらはの手より一國を奪はれた。わらはもこの手で一國を奪ひ返して見せう。皆來や。（悠揚として門内に入る）

皆々續く。

（道具廻る）

同　境内觀櫻の宴

平舞臺中程に廣々と緋の毛氈を敷きつめ、その中央に上壇。後ろは一面に葵の紋所ある幔幕を張り、上壇の背後だけに、桃山風の極彩色の金屏風を立て廻らす。舞臺の上下に滿開の櫻樹一本づゝ。幔幕を越えて、一面透間なきばかりに花の梢見ゆる。

道具納まると松平三河守忠直、前茶筅、寛濶にして華麗なる服裝、眞中の褥に脇息に凭れて盃を傾け、その左右緋毛氈の上には、老臣本多伊豆守富正、野本右近、小姓、諸士、腰元など綺羅びやかに居流れ、一國の舞を見物しゐる。

一國は水干、立烏帽子、緋の袴、白鞘卷を差して男舞を舞ふ。一國はフエルナンデの事が心にかゝり、屢々手振亂れる。右近、持つたる扇子をトンと突き、それとなく注意す

る。一國再び舞ひ續ける。

この時揚幕の方にて聲あり。

於勝の方の聲　（高らかに）その舞やめい。

忠直　（きつとなり）なに、舞をやめいとな。さういふは誰ぢや。

於勝の方　誰でもない、わらはでござりまする。（揚幕から出る）

仙千代の手を引きし佐の局、渡邊山城、その他供奉の面々靜々と續く。一國舞をやめて下坐に下る。

忠直　おゝ、御身は於勝の方、赦しもなしに何としてこの宴席へは參られしぞ。

於勝の方　（忠直より少し下つてよき處に坐し）それはこの方より申す事。わが君こそ何の斷りもなしに、わらはの召使ふ腰元を、今日のお慰みにとお呼び出しになつたではござりませぬか。（佐の局に目配せする）

佐の局　一國殿、自體そなたが惡うござるぞ。いかにわが君の仰せなりとて、奥方のお傍近く勸むるからは、わしへまでなりと一言願ひ出づべき筈ぢや。（一國を引据ゑる）

一國　みんなわたくしが至らぬからでございます。どうぞ御了簡下さりませ。

忠直　赦しもなしに舞を留むるさへ無禮なるに、わが面前にての折檻。右近、佐の局を取押へよ。

右近　お局、わが君の仰せでござる。先づその手を離されい。（一國を佐の局より離さうとする）

於勝の方　えい、何をしやるぞ。一國にはわらは取調べる筋があるのぢや。佐の局、その女を彼方へ引立て、わらはの歸るまで嚴重に見張りをさせよ。

佐の局　はあ。（低頭して）一國殿、立ちませい。

一國　力なく立上る。佐の局を先に供奉の諸侍、一國を下手へ引立てる。

忠直　こりや待て。その女連れ參る事罷りならぬぞ。

佐の局等忠直の威容に恐れて少しく逡巡の體。

於勝の方　（鋭く）わらはが召使ふ腰元を、わらはが引立てるに誰に遠慮ぞ。局、行きや。

佐の局等安堵して一國を下手幔幕の蔭に引立て入る。

忠直　（抑へ難き念慾の念を強ひて抑へて）この上は酒ぢや。雲と見紛ふ花の下で、夜に入るまで飲み續けう。

腰元二人銚子を取つて忠直に酌をする。

於勝の方　手の内の珠を奪はれた腹立ち紛れに、やけ酒でござりまするか。ほ、ほ、ほ、ほ、ほ。

それも宜しうございますまいぞう。

忠直　（きつとなり）現在の夫たるこの我に、そのやうな辱めを與へるのが、然程までに快いのか。こりや奥、御身は忠直の妻ぢやぞよ。

於勝の方　今の詞、お氣に觸りましたか。したがわが君、忝くもわらはは當將軍家第二の息女、殊には次の世嗣たる家光殿には姉に當りまする。世の常の妻と均し並には見られますまい。

忠直　二言目には將軍家々々と、將軍家がそれ程に恐ろしいか。世が世ならこの忠直こそ、當代の將軍よと崇められるゝ身の上ぢやわ。

伊豆　（この時まで强ひて沈默を守つてゐたが、遂に怺へかねて）殿、それを今こゝで仰せられましては……殿と奥方との御不和も、皆その一事に根ざしまする故……

忠直　えゝ、留めだて致すな。かうなつては忠直が胸にわだかまる日頃の憤懣、殘る隱なく云はいで措かうか。

於勝の方　おゝ、何なりとも仰しやりませ。わが君に御不滿あらば、わらはにもござりまする。

忠直　（感傷的になり）思ひ返せば十六年の昔、父君秀康公にはまだ三十四歳の御壯年を以て御他界あらせ給ふ。その秀康公こそ、於勝の方が嵩に着る當代の將軍家秀忠公にはすぐの兄上。されば長幼の序より推せば、德川家二代の將軍には父上こそ立ち給ふべけれ。然るに大御所にはいかなる故にか秀康公を愛し給はず、遂に父上を差措いて、弟たる秀忠公に將軍職を讓らせ給ふ。恭謙なる父上は、世を終はるまでお心の底を人に語らせられなんだが、片手落なるこの御處置を何で快く思ひ給はう。生先長き御身を以て、早くも沒り給ひし事より思ひ合せても、心寂しき御一生推測り參らするに難うはないわ。

伊豆　誠にわが君の仰せの通り。されば大御所樣にも、さすがに秀康公に對する御處置を寢醒惡う思召されてか、先殿御大患の砌、御病狀をお知らせかたゞく、御機嫌伺ひの爲、當越前より駿府に使者を立てし時、大御所樣にはその使者に向はせられ、「わが子多き中にも、秀康は長子と云ひ殊更勇烈にして度々軍功もありし者。さるを唯越前一國のみを與へ置くは本意ならず。この度の病平癒せば、その祝儀として二十五萬石を增し與へ、これまでの知行七十五萬石に加へて百萬石となさん。汝とく越前に歸り、この旨を申し聞けて慰めよ」とて、御自筆のお墨附をその使者に賜はりました。

この時下手幔幕の蔭より佐の局戻り來る。

佐の局　（奥方に向ひ一禮して）仰せに從ひ一國殿を御本堂に引括り、見張させましてござります。

忠直　（佐の局を見て怒の聲を上げ）おゝ、あのをり使者に立ちしは汝であつたな。我はあのをりまだ十三の少年なりしが、汝がなせしさかしらは、よつく覺えてをるぞよ。

伊豆　佐の局には大御所のお墨附を戴くとそのまゝ、夜を日についで越前へ歸られた。然るに途中三州岡崎にて、秀康公には早くも御他界ありしと聞き、當國へは戻らずして、却つて駿府へ引返された。

右近　かくて再び大御所樣にお目通りを願ひ、秀康公の御訃音を言上すると共に、大切の御書なればとて、そのお墨附までお手許へ御返上致されたと申す事。

於勝の方　したがその時大御所樣には、「女ながらも心利きたる者よ」と仰せあつて、その儘お墨附を受收めになつたと申すではござりませぬか。なりや局の所業は、大御所樣よりお讃めにあづかりし程の手柄。責むべき筋はござりますまい。

忠直　それは勝軍家の側より申す事。いらざる女の猿智慧から、越前家は見す〳〵百萬石にない損ねたのぢや。こりや局、汝とてわが家の祿を食む者、かくまで深き痛手を主家に與へて、どの面さげてわが前へは出らるゝぞ。（立上り、足を揚げて佐の局の肩のあたりを蹴る）

仙千代　（急ぎ佐の局の前に立塞がり）父上、局を打つのは、御免なされませ。

忠直　えい、汝までこの女の肩を持ちをるか。

山城　御諚にはござりますれど、佐の局は若君の御乳人。幼な心にもその上をお氣遣ひ遊ばすは、恐れながら有難い御慈悲心かと存ぜられまする。

忠直　乳母の身は氣遣うても、父の心は察せぬのか。現在血を分けたわが子さへ、父を捨てゝ、母や乳母の方へ行つてしまうた。（荒々しく仙千代を衝きのけ、絶望的に身を顫はす）

於勝の方　父々と事々しう仰せあれど、さう仰しやるわが君こそ、父をなみする不孝者ではござりませぬか。

忠直　なに、この忠直を不孝者とや。

於勝の方　思うても御覽なされませ。こゝは父君秀康公の御菩提所、しかも奥城間近い場所に宴席をしつらへ、歌よ舞よと立騒ぐ。これが不孝でなうて何が不孝でござりませう。

山城　誠に奥方が今のお詞こそ、御尤なる仰せ言。いかにこの御寺が御城下きつての花の名所なりとて、かくては餘りに先殿の御靈を御粗略に遊ばすと申すもの。山城、殿の爲に惜しみまする。

忠直　默れ、汝等に忠直の心が分らうや。快々として樂まざるわが胸中は、唯この御寺に埋れ給ふ父上の御奠靈のみ知ろしめすのぢや。一生を不遇のうちに終へ給ひし父上は、忠直が醉うて花の

下に亂舞するを見て、恐らくは一掬の涙を惜しみ給はぬであらう。(聲咽る)

本多伊豆、右近、その他忠直に同情する臣下や腰元は、皆俯いて涙を呑む。

忠直突然立上つて背後の幔幕をかゝげる。小高き丘の上なる秀康の墳墓に通ふ櫻並木の路が、遙かに見渡される。

忠直　おゝ、あれこそは父上淨光院殿秀康公の御墓所。(恭しく遙拜し)父上、松平忠直は父上がこの世に殘された唯一人の子でござりまする。そのわたくしに何で父上のお胸の底が分らないでなりませう。御臨終のその砌、わたくしを枕邊へお招ぎ遊ばされ、「秀康はこの世に仕殘した事が澤山にある。どうぞそれを汝の代に果してくれ」と仰せられた御一言は、今も耳に附いて離れませぬ。さればその御詞を力草に、文武の道にいそしむ事幾年。忠直二十一歳の折大阪夏の陣に臨り、それがしも一方の大將を承はる。父上が望を果すはこの時よと勇み立ち、忘れもせぬ元和元年五月七日、大阪城總攻の砌には、それがし先鋒として立向ひ、大御所さへ恐れをなし給ひし彼の眞田幸村の首を始めとして、御宿越前守、その他、わが手の者にて大阪方の首を取る事三千七百餘級、比類なき功名を擧げました。

伊豆　(懷舊の情に堪へざる如く)それがしもあの折は御陣のお供申せしが、誠にあの日の殿のお働きは、今思ふだに武者振ひがするやうな。天地に轟く鬨の聲、矢叫びの中を、御馬を躍立てゝ西に追立て、東に切りまくつた勇々しさは、ほと〳〵阿修羅王の荒れたる如くであつた。

右近　されば大御所樣にも、わが君が御武勇の程を感歎あらせられ、忠直は漢の樊噲にもをさ〳〵劣らぬ剛氣の若武者ぢや、日本樊噲ぢやとお讃めのお詞があつたとの事。

忠直　したが忠直が取つたは空しき名ばかり。大御所が手づから下された御恩賞と云へば、初花といふ小さな茶入に過ぎなんだ。

山城　その初花の茶入こそ、大御所樣が御秘藏ありし天下の名器。それをお手づから賜はるとは、これに上越す面目はござりますまい。

忠直　えい、この忠直は利休の紹鷗のと、愚にもつかぬ土くれなんどに隨喜の涙を零す閑人でないわ。その軍功に依つて、このたびこそ必ず百萬石になり得るものと期してゐたのぢや。將軍職に得昇らずば、せめては百萬石を知行して、父君の御靈を慰めうと待つてゐたのぢや。

於勝の方　その望みが叶はなんだばかりにわが君には、近年武家の掟たる參覲交替をさへ渉々しうなされぬのみか、將軍家の流れを汲む身ぢやとて、わらはをまでないがしろにはし給ふな。

山城　恨みも憤りも、おのれ先づ道を守りてこそ、世に訴ふる手だてはあれ。殿のなされ方は、ひ

とへに上を恐れぬ大不敬の御所業かと存ぜられまする。

忠直　不敬なりと云はゞ云へ。わが家は將軍家の上に立つ家柄ぢや。その越前家の待遇が、秀忠公の御弟達より出でし尾張、紀伊の二家にも及ばぬとあつては、忠直の胸はいつかな納まらぬぞ。

於勝の方　では、わらはの父君秀忠公のなされ方が今のまゝに續くに於ては、わが君にはいつまでも將軍家をお恨み遊ばすとな。

忠直　忠直が心に受けし傷手は、輕々しう忘れてしまふには餘りに深いわ。

於勝の方　現在妻たるわらはが、心を籠めてお諫め申しても……

忠直　今の忠直には妻も子も皆敵ぢや。（顔を反向ける）

於勝の方　（冷靜に）宜しうございます。わが君がそのお心なら、わらはにも覺悟がございます。（決然たる態度で）山城、こゝへ。

山城。奥方に摺り寄る。奥方扇子を開き、山城に何事をか囁く。

山城　（點頭き）然らばすぐ樣江戸表へ……（一禮もそこ〳〵に向うへ行きかける）

忠直　なに、江戸表とな。

於勝の方　（冷笑的に）父上の御機嫌伺ひに、山城を使はすのでございます。

忠直　遣りたくば勝手に遣られよ。それ程の事恐るゝ忠直か。

山城行きかける。伊豆守、右近に何か合圖をする。

右近　（立上つて山城を控へ）お待ち下され。今江戸表へお出あつては、それこそお家の一大事……平に、平にお止まり下さりませ。

忠直　右近、何を留むるぞ。

右近　でも此儘に差措きましては……

忠直　忠直はいかなる運命をも甘んじて受けう。山城、行け。

山城　殿、御免。（右近の手を拂ひのけ、すた〳〵向うへ入る）

忠直　（立上り）要なき詞爭ひにて興も醒めた。今日の宴もこれ限り。われは父上の御幕に詣でん。（掲げし幔幕の間を並木路へと去る）

伊豆、右近、その他の面々も續く。奥方は頭だに下げず、冷やかに目送する。舞臺少しづゝ暗くなる。

於勝の方　おゝ、日が暮れる。どりや、わらはも歸館致さうか。（立上る）

佐の局　思はぬ長論議に、さぞお疲れでございませう。

於勝の方　そなたこそわが君がお腹立紛れの傍杖受け、氣の毒であつたのう。(諸侍に)そち達は本堂へ參り、後より一國を引立て來ませうぞ。

諸侍　はつ。(幔幕の蔭に去る)

於勝の方　仙千代、來や。(手を取る)

奥方の一行勝ち誇つたやうに向うへ練り入る。

入相の鐘。暫くして幔幕の蔭から一國、舞の衣裝を剝がれ、腰縄付、諸侍に引立てられて出て來る。櫻花はら〳〵と散る。

侍一　奥方の仰せぢや。きり〳〵歩まれい。

一國つか〳〵と舞臺の中程まで行く。

侍二　どこへ失するぞ。(縄を引く)

一國　(四邊を見廻し)今の先までは笛や鼓に賑はしう花やかなりし宴の席…殿樣はいづれへお出でなされたのでござりまする。

侍三　さすがの殿も奥方の御威光には敵し給はず、御自分から酒宴をやめて、先殿の御墓所へお出で遊ばしたわ。

この時忠直一人戻り來り、幔幕の蔭に佇み聞く。

一國　心も空なる宴のすぐ後に、父君のお墓の前に涙しく額突き給ふお胸のうち…お痛はしい事でござんすな。(聲曇る)

忠直　(出て)一國…こりや一國…

一國　おゝ、殿樣でござりまするか。(寄らうとする)

侍縄を引く。

忠直　そちや忠直を痛はしいと申したな。

一國　よしない事をお耳に入れ、恐れ入つてござりまする。

忠直　何の詫びに及ばう。そちのやうな優しい心の女子が、一人でもこの世にあると思へば、忠直は嬉しいぞよ。

一國俯いて涙を呑む。

忠直　今日の花見に、無理からそちの舞を所望せしばかりにその縄目。このかよりこそ詫びねばならぬ。

一國　勿體ないそのお詞。縄目の責苦も、信仰ゆゑなら切ないとも思ひませぬ。

忠直　なに、信仰と申したな。

一國　殿様、わたくしは切支丹でございます。

忠直　えゝ、切支丹……(愕然として)そちのやうな優しい女子が、何で……何であの恐ろしい、邪宗門には歸依したのぢや。

一國　殿様、わたくしの信仰する教は、恐ろしい教でも、忌はしい教でもございませぬ。嶮しもなく廣い、底ひもなく深い、慈悲の教でございます。どうぞ殿様も、早く神の道に御入り遊ばして心の平和をお求めなされませ。

侍一　えゝ、又しても世迷言。歩めと申すに。(引立てる)

一國は抗ひもせず、諸侍に引かれたまゝ靜に向うへ入る。

忠直　(失神したやうに向うを見送つて)不思議な詞よ……この忠直には何としても得解せぬ。

右近歸り來る。

右近　殿、いかゞ遊ばされました。

忠直　右近か。(ぢつと考へて)奥に鼻を明かせるには、一國をわが物とするより外はないのう。

右近はつとして忠直の面を窺ふ。忠直猶も向うを凝視する。四邊愈々深く夕闇に閉されて、櫻花頻りに散る。

(幕)

第二幕　北ノ庄城内土牢

平舞臺上の方に高き崖あり。その側面を穿ちて土の牢とし、入口の太き格子には錠を卸す。下の方に方形の石の井戸あり。嚴めしき鐵格子の蓋を以て掩ひとなし、同じく錠を卸す。崖の背後より下手奥へかけて一面に老樹の茂み。根方には雜草蓬々。樹間を透して城の石垣、高櫓を隱見し得。

前幕より約一箇月を經過せし四月の或夜半。

劇しき風の音にて幕明く。始め舞臺は殆ど暗黒にして、人影なく、唯樹梢の物凄く風に鳴るを聞くのみ。暫くにして井戸の中より、莊重なる低音部にて讃美歌をうたふ聲聞え來る。フエルナンデの歌ふなり。(事實より云へばラテン語の讃美歌なるべけれど、便宜上英語のそれを以て代ふるも可なり。日本語にては異國情調を失ふを以て面白からず)

松平忠直　卿

牢番兵内、龕燈提灯を携へ、六尺棒を突き、上手から見廻りに來る。

兵内　えい、やけに吹きやがるな。(身を縮めたが、井戸の聲を聞咎めて)毛唐め、又何か喚いてやあがるな。(井戸側に走り寄り)喧ましい、よさねえか。(六尺棒で鐵格子を叩く)

井中の聲はたとやむ。

兵内　少し眼を離しやすぐこれだ。世話の焼ける野郎だな。

崖の後ろより牢番茂七。同樣の姿にて出て來る。

茂七　(龕燈で照らし見て)兵内ぢやねえか。何を獨り言云つてゐんだい。

兵内　おゝ、茂七か。この井戸の底にゐる伴天連がの、又ぞろ變な歌をうたひ出しやがつたから、今叱りつけてゐた處よ。

茂七　だが、この南蠻も隨分死ぶとい野郎ぢやねえか。孝顯寺の御門前で捉まつて、この空井戸へぶち込まれてからもう一月近。雨風吹き晒しの穴の中で、食ふ者といへは朝晩鹽むすびが一つ宛。それでよく命が續くものだな。

兵内　併しこの南蠻の方は、さういふ苦しい思ひをしたさに、わざ〳〵遠い國から日本へ渡つて來たのだから、まだしも諦めがつくだらう。分らねえのはあの一國とかいふ腰元だ。

茂七　さうよな。今夜もこの土の牢からお白洲へ呼出されて行つたが、今頃はきつとひどい拷問にかゝつてゐる事だらう。お白洲から戻つて來る度毎、けつそり體が弱つて見えるのでも、大抵の責析檮でねえ事は分つてゐるのに、どうしても邪宗は捨てねえと剛情を張り通してゐるのだ。

フエルナンデの聲　(井戸の中より)それが本當ぢや。さうなければならん。

茂七　畜生、又喋りやがる。聲を出しちやならねえと、嚴しく云渡してあるぢやねえか。(井戸側を叩く)

兵内　あの女もこの南蠻と一緒にこの土牢へ連れられて來た頃は、眼の醒めるやうな綺麗な姿だつたが、此頃では肉は落ち、眼は窪み、まるで生きながらの幽靈よ。

茂七　切支丹にはいりや磔とは極つてゐるのに、命が惜しくねえのか知ら。あんなになつてまで、その邪宗の神樣とかゞ捨てられねえ人間の心持が、おいらにや分らねえ。切支丹さへころんで見ろ、あの女なんかあの縲紲だし、どんな榮耀でも出來る身分だ。南蠻の奴、どうしてあゝまでの女の心を迷はしやがつたんだらう。

兵内　伴天連は魔法を使ふといふから、それで誑らかしたのかも知れねえぜ。

茂七　さうかも知れねえ。それでなけりやとんと合點がいかねえからな。

向うより番卒一名松明を翳し、他の一名は高手小手に縛めし一國の縄尻を取つて出て來る。一國は牢番が噂せし通りの悄衰せる顔容。

番卒一　(花道の七三にて)牢番、囚人をお渡し申すぞ。

兵内　毎晩御苦勞でござりますな。

茂七　咎人は慥に受取りました。

番卒二　間違ひのないやうにしつかりと見張を致されい。

兵内　大丈夫でござります。

番卒等は一國を渡してすぐに向うへ歸り行く。

茂七　どうだ、今夜もひどい拷問にかゝつたかの。餘計なお世話だが、いゝ加減にお前もころんだらどうだい。

一國答へず、俯きゐる。

兵内　(一國の顔を覗き見て)頬の處が紫色に腫れ上つてゐるぞ。やつぱり剛情を張り通したのだな。

茂七　痛い思ひも自業自得だ。牢屋へ歸つて地獄の夢でも見るがいゝや。(土牢の方へ引立てる)

フエルナンデの聲　一國さん……一國さん……

一國　おゝ、フエルナンデ樣。(井戸の方へ走り寄らうとする)

茂七　えゝ、どこへ失しやがる。(縄を引く)

フエルナンデの聲　毎晩のやうな拷問、わたくしあなたに同情します。併しどんな事があつても、弱い心を起してはいけません。「正しき事の爲に責めらるゝ者は幸なり。天國は即ちその人のものなればなり」と人の子は仰せられましたぞ。

一國　有難いお詞、決して忘れは致しません。

フエルナンデの聲　肉體の苦痛は一時です。魂の平安は永遠です。

兵内　えゝ、まだ默らねえのか。(井戸側を叩く)

フエルナンデの聲　一國さん。

一國　フエルナンデ樣。

フエルナンデの聲　唯神樣にお祈りなさい。祈る者には救ひが來ます。

茂七　剛情張りや痛い眼を見せるぞ。(六尺棒を振つて一國を嚇す)

この間に兵内は腰に下げし合鍵にて土牢の格子口を開く。茂七一國の縄目を解き、牢内

に突き入れる。兵内再び錠を卸す。

兵内　揃ひも揃つて死太い奴等だな。――さあ、これでおいら達も、番小屋でゆつくり寢られるとこ云ふものだ。

茂七　だが、むやみと寢ちまつて、若しもの事があつたら大變だぜ。

兵内　なあに、この合鍵さへかうして已が持つてりや安心だ。景清の生れ代りだつて、破れるやうな土牢ぢやねえんだからな。はゝゝゝ。(空を仰いで)おや、降つて來たぞ。

茂七　成程降つて來やがつた。さつきから危なつかしい空模樣だと思つてるたんだ。

一國　雨の音。それに交つて遠雷。

兵内　いけねえ〳〵、御丁寧に雷まで鳴り出しやがつた。

きらりと電の影。

茂七　おいら雷が大嫌えなんだ。

兩人慌てゝ上手へ逃げ込む。後には雨聲、雷鳴愈々繁く、紫電物凄く闇を劈く。

土牢の中より祈の聲聞え來る。

一國の聲　天主(デウス)樣、わたくしは罪深い女子でござります。わたくしのやうな者が尊いハライソの御國へ生れます爲には、どのやうなこの世の苦艱を受けうと厭ひは致しませぬ。全能のデウス樣、どうぞわたくしに力をお與へ下さいまし。

この間に風雨愈加はり、一國が祈りの聲も消えなんとす。

その時雜草の間に唯ならぬ物音して、頭より菰を被れる怪しき姿の男忍び出づ。彼は電光を頼りに土牢の口へ近づく。松平忠直なり。

忠直　(牢格子に口を寄せ)一國……こりや一國……

一國　(内より牢格子の傍へ寄つて來て)わたくしを呼ぶのは……どなたでござります。(ぢつと外を透かす)

忠直　わしぢや。忠直ぢや。(菰をかなぐり捨てる)

一國　お、殿樣……どうして今頃、このやうな處へ……

忠直　そちを救ひに來たのぢや。待つてをれ、今すぐに出してやるぞ。

一國　あれ、いけませぬ。わたくしは奥方のお憎しみでこの牢屋(ひとや)に囚れの身。そのやうな事をなされたら、猶の事御仲が御不和になりませう。

忠直　(その間にも石塊などにて格子の錠前を打碎かんとあせりつゝ)そちを奪ひ出して、奥に鼻を

明かせるのぢや。――えい、まだ開かぬか。(頻りに叩く)

上手から兵内抜身の槍を下げて出て來る。

兵内　何だか人聲がするやうだが！(忠直の方を透し見て)そこにゐるのは誰ぢや。

忠直答へず、身構へをする。

兵内　うぬ、曲者。(突いてかゝる)

忠直身をかはして捨身を食らはせ、相手の槍を奪ふとすぐさま、刀を抜いて兵内を斬る。

兵内一溜りもなく倒れる。

忠直　邪魔だてせし故思はぬ殺生……(ぢつと兵内の死骸を視つめて)おゝ、こりや土牢の合鍵ぢやの。

忠直は兵内の腰より合鍵を奪ふと、その死骸を雜草の中に蹴込み、合鍵を以て牢格子を開け、中より一國を引出す。

一國　殿樣。(放心したやうに忠直の顏を見る)

忠直　わしと一緒にすぐに來るのぢや。(手を取る)

一國　行くとはどこへ……どこへ行くのでございます。

忠直　知れた事、わが住む本丸の奥殿へ。(茂みの間より見ゆる城櫓を指し)風雨に紛れて危きを冒し、救ひに參りし忠直が心、そちにも大方得心が行つたであらう。わが心にさへ從はゞ、邪宗門に歸依せし事も、そのまゝに見赦し遣はさうぞ。

一國　有難いお志、勿體なうはございますれど……それればかりは、どうぞお赦し下さりませ。

忠直　なに、聞かれぬと申すか。

一國　思うても御覽なされませ。殿樣には於勝の方樣と申上げる立派な奥樣がお出で遊ばすではございませぬか。その御方を差措いて、名もない野の花にお眼をお散らし遊ばすは罪深い業でございます。

忠直　於勝の方はわが妻にして妻に非ず。櫻散る孝顯寺の夕暮に、優しいそちの詞を聞いた時から、忠直の心はそちの方へ引かれるやうになつたのぢや。

一國　(思はず感動して)おゝ……

フエルナンデの聲　恐ろしいサタンの聲ぢや。聞いてはならぬぞ。

忠直　(ぎよつとして)井戸の底から呼ぶのは誰ぢや。

フエルナンデの聲　誰でもない、神の使ぢや。この世に光と幸福(さいはひ)とを與へる爲に下された神使のぢ

や。悔改めよ。さなくば、インヘルノの地獄は立所に御身の前に來よう。

忠直　おのれ、その舌で一國の心を惑はしをつたか。(荒々しく井戸へ駈け寄らうとする)

一國　あれ、待つて下さりませ。(忠直の袂に縋りつき)その聲の主はこの世に二人とない尊いお方。そのお方に若しもの事があつたら、わたくしの心は闇夜も同然でございます。

忠直　そんならわが心に從ふか。

一國　でもそればかりは……一人の男が二人の女を弄び、又女の身で、妻ある男に許すのは、嚴しい敎の戒めでございます。

忠直　そちや忠直が卑しい心から、そちを弄ぶと思ひをるか。さうではない。決してさうではないのぢや。忠直はあらゆる物に望を失うた。妻にも、子にも、家柄にも。總ての物はわが手から逃げ失せた。醒めて果敢なき白日の夢……忠直は獨法師ぢや。從三位の宰相。越前七十五萬石の大守の誇も何かせん、今は形影空しく吊ふ孤獨の身ぢや。

一國　その佗びしいお心のうちは、數ならぬこの身にもしみ〴〵と思ひやられて、寢醒がちなる牢屋の夜半、何度泣いた事でございませう。

忠直　わが爲に泣くその涙があるならば、何でいつまで情なくはするぞ。あらゆる物を失うた忠直に、せめてはそちの心をゝれよ。

一國　そのやうな優しいお詞を伺がひましては、もうわたくしは……(思はず忠直に取縋らうとする)

フエルナンデの聲　(一層鋭く)惡魔の聲は耳に快い。聞いてはならぬぞ。

一國　おゝ……(忠直から身を飛びのく)

忠直　憎くき伴天連、おのれこそ惡魔ぢや。(憤然として、先刻兵内が取落せし槍を拾ひ上げ、矢庭に鐵格子の間より井戸の底に向つて突き立てる)

井底にてフエルナンデが苦悶の聲。

一國　おゝ、こりや殿樣には酷たらしう……(鐵格子の狹間から井底を覗いて身を顫はす)

忠直　そちの心を惑はす惡魔は死んだ。今こそ忠直が心のまゝにならうの。(手を取らうとする)

一國　(强く拂ひのけ)なりませぬ。フエルナンデ樣が今のお聲を聞くとひとしく、わたくしの迷ひは醒めました。

忠直　一國の大守ともあらう者が、これ程詞を低くして賴んでもか。

一國　フエルナンデ樣がお流し遊ばされた血汐は、殉敎者の血汐でございます。その血を見ました

一　わたくしの心は、もう動く事ではございませぬ。

忠直　無禮者。（いきなり一國を拔打にする）

一國　（手を負ひながらも忠直の刄にしつかと縋り、天を仰いで）どうぞ神樣、お氣の毒な殿樣のお心に、平和をお與へ下さいまし……（合掌したまゝばつたり倒れる）

忠直　（雷火に打たれたやうに）おゝ……

フェルナンデの聲　（死の苦痛に打勝つやうに）救ひとゞびとの只中にさ迷うてをりまするこの國の領主に、御主よ、光を與へ給へ……（聲消える）

忠直　（ぢつと井戸の底を覗いて）おゝ、命の斷末魔に、おのれを殺した敵の爲に祈つた……（壁となる）

この間に風雨全くやみ、四邊は夜明前の極めて靜寂なる光景を呈す。

右近　下手より右近駈け出づ。わが君ではござりませぬか。何として今頃こゝに……

忠直　（心も空に）彼等は祈つた。命の際に忠直の幸を祈つた。

右近　こりや一國殿の骸……（走り寄つたが、傍に落ちてゐる拔身の槍にはつとして、井戸を覗き）

おゝ、井戸の底なるフェルナンデ殿をまで……（顏色が變る）

忠直　眼が明いた。生れて始めて忠直の眼が開いた。

右近　（ぢつと忠直の面を視つめてゐるうちに、湧き上る歡喜の情を抑へ兼ね）殿には神の光を御覽なされましたな。

忠直　この眼で見たのぢや。この耳で聞いたのぢや。切支丹は世にも大いなる慈悲の敎であつた。

右近　（忠直の脫ぎ捨て置いた孤で靜に一國の骸を蔽うて）「汝等の仇をいつくしみ、汝等を呪ふ者を祝し、汝等を憎む者を善くせよ」と、敎の書物に書いてございます。

忠直　敎の書物と申したな。（驚く）

右近　今は何をかお隱し申さん。わたくしも疾くよりこの道に歸依致す者でございます。（頸に掛けて懷に納めし十字架を出して示す）

忠直　一國一人と思ひきや、忠直が唯一の腹心たる汝までが……

右近　（嚴かに）「天國は近づけり、悔改めよ」とございまするぞ。

忠直　（感激して）おゝ、彼等は死して忠直の導師となつた。そちこそ生きてわが生涯の燈火となつてくれ。（右近の手を取る）

右近　（落涙し）殿、よくぞ仰せ遊ばされし。それでこそ死者の魂も安んじて天へ昇る事が出來ます
る。（跪き）天にまします我等が御親、御名を尊ませ給へ。御代來り給へ。我等人に敵すが如く、
我等が咎をも赦し給へ。

忠直、不知不識の間に右近に附いて一心に所念を凝らすやうになる。

下手より本多伊豆守出で來る。

伊豆　殿、江戸表よりの御上使でござりまするぞ。

忠直　なに、江戸表より……

伊豆　正使として日根野織部正殿、同じく介添として牧野傳藏殿、唯今參着致されました。

忠直　上使とあらば何にもせよ、衣服を改めて對面せん。

この時下手の方に聲あり。

織部の聲　それには及ばぬ。日根野織部正吉明――

牧野の聲　牧野傳藏――

織部の聲　上樣よりの上使として、唯今それへ――

兩人の聲　參るでござらう。

日根野織部守吉明、牧野傳藏出で來る。

忠直　（恭しく下坐に着き）御上使には遠路御苦勞に存ずる。先づ、上意申聞け下されい。

織部　さらば謹んで承られよ。將軍家には年と共に募る忠直卿の暴狀を憤らせ給ひ、このまゝに打
捨て置かば、いかなる禍を惹起さんも測られずとて、乃ち當越前國守の位を奪ひ、豐後國萩原の
里に配流せよとの御嚴命でござる。

牧野　但し、一子仙千代殿には別に領地を與へ、家の祀は絶やすまじとの御諚。乃ちこの御本書の
面の如し。（懷より墨附を取出して忠直の方に見せる）

織部　お咎めの筋は殿に於ても覺えがござらう。この議御承引あるやいかに。

忠直　（決然として）上意の趣承知致した。忠直筑紫に下るでござらう。

伊豆　殿、暫くお待ち下さりませ。たとへ御上意にもせよ、かく重大なる事柄を、一應の御言開き
もなく御承引遊ばすは餘りの輕跳み。察する所渡邊山城、奥方の旨を受けて、殿を害ひ參らする
やうの事を御傍衆に申上げしと相見えまする。何は然れ、一刻も早く山城を江戸表より呼返され、
篤と實否を糺すが上分別でござりませう。

忠直　今となつてそれが何の要ぞ。忠直は疾くより今日の日を豫期してゐたわ。